

MOCHIODANI

母智丘谷遺跡

HATADA

畑田遺跡

YOMESAKA

嫁坂遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第63集

「母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡」正誤表

訂正箇所	誤	正
p5-第5図		1と2が逆
p7-13	第3図	下図
p13-11	第3節 IX第層(中世水田層)の調査(第5図～第10 図)	第3節 第IX層(中世水田層)の調査(第5図～第10 図)
p50-11	第3節	第4節
p54-134	坏Ⅷ類(第15・16図-40～51)	坏Ⅷ類(第16図-52～57)
p76-第29図のスケール	10m	10cm
p109-①	①畦畔Lと水田区画13	①水田区画Jと水田区画13

	③水田区画6～8検出状況/④水田区画6～8完掘状況	
図版4	①凹凸痕検出状況/②水田区画1と畦畔A検出状況/	30
	③畦畔B検出状況/④畦畔E・F検出状況/⑤凹凸痕(水田区画6)検出状況	
図版5	①土層堆積状況/②並ぶ凹凸痕/③水田区画5・6と畦畔D/	31
	④水田区画3・4と畦畔C/⑤畦畔C完掘状況/⑥段差遺構の杭列跡	

畑田遺跡 図版目次

図版1	①畑田遺跡 全景1	101
図版2	①畑田遺跡 全景2	102
図版3	①畑田遺跡 第IV層上面遺構検出状況	103
図版4	①畑田遺跡 第V層遺構完掘状況	104
図版5	①水田区画1～4検出状況/②水田区画3～8検出状況/	105
	③水田区画6～12検出状況/④水田区画10～12検出状況	
図版6	①土層断面図1/②土層断面図2/③畦畔Aと杭列痕検出状況/	106
	④畦畔Aと段差1完掘状況/⑤畦畔E完掘状況/⑥畦畔B・C完掘状況/	
	⑦畦畔D完掘状況/⑧水田区画凹凸痕	
図版7	①水田区画13と畦畔L完掘状況/②水田区画凹凸痕/	107
	③第VI～VIII層検出状況(上から)/④第VI～VIII層検出状況(南東から)/	
	⑤土層堆積状況(Eライン)/⑥土層堆積状況(Fライン)/	
	⑦第VI～VIII層遺物出土状況1/⑧第VI～VIII層遺物出土状況2	
図版8	①出土土師器環(第I類)/②出土土師器環(第II類)/	108
	③出土土師器環(第II類)/④出土土師器環(第III類)/⑤出土土師器環(第III類)/	
	⑥出土土師器環(第IV類)/⑦出土土師器環(第V類)/⑧出土土師器環(第V類)/	
	⑨出土土師器環(第V類)/⑩出土土師器環(第VI類)	
図版9	①出土土師器環(第VI類)/②出土土師器環(第VI類)/	109
	③出土土師器環(第VII類)/④出土土師器環(第VII類)/⑤出土土師器環(第VII類)/	
	⑥出土土師器環(第VIII類 墨書土器)/⑦出土土師器環(第VIII類)/	
	⑧出土土師器環(第IX類)/⑨出土土師器環(第IX類)/⑩出土土師器環(第IX類)	
図版10	①出土土師器環(第XI類)/②出土土師器環(第XI類)/	110
	③出土土師器環(第XI類)/④出土土師器環(第XI類)/	
	⑤出土土師器環(第XI類 穿孔のある土器)/⑥出土土師器環(第XII類)/	
	⑦出土土師器環(第XIV類)/⑧出土土師器環(第XIV類)/	
	⑨出土土師器皿(第I類)/⑩出土土師器皿(第II類)	
図版11	①出土土師器皿(第II類)/②出土土師器皿(第III類)/	111
	③出土土師器皿(第III類)/④出土土師器皿(第IV類)/⑤出土土師器皿(第V類)/	
	⑥出土土師器皿(第VI類)/⑦出土土師器皿(第VI類)/⑧出土土師器皿(第VII類)	

	⑨出土土師器皿(第Ⅷ類) / ⑩出土土師器皿(第Ⅷ・Ⅸ類)	
図版 12	①出土陶器(甕A類-1) / ②出土陶器(甕A類-2) / ③出土陶器(甕A類-3) / ④出土陶器(甕A類-4) / ⑤出土陶器(甕A類-5) / ⑥出土陶器(甕A類-6)	112
図版 13	①出土陶器(甕A類-7) / ②出土陶器(甕B類) / ③出土陶器(甕C類-1) / ④出土陶器(甕C類-2) / ⑤出土陶器(甕C類-3) / ⑥出土陶器(甕D類) /	113
図版 14	①出土陶器(甕E類) / ②出土陶器(甕F類) / ③出土陶器(壺A類) / ④出土陶器(壺B類) / ⑤出土陶器(壺C類) / ⑥出土陶器(捏鉢)	114
図版 15	①出土陶器(播鉢-1) / ②出土陶器(播鉢-2) / ③出土陶器(瓶子・深皿) / ④出土磁器(土瓶) / ⑤出土磁器(青磁碗-1) ⑥出土磁器(青磁坏)	115
図版 16	①出土磁器(青磁碗-2) / ②出土磁器(青磁坏・皿・水注) / ③出土磁器(白磁碗) / ④出土磁器(白磁水注・壺) / ⑤出土磁器(朽葉色系青白皿) / ⑥出土磁器(青白磁壺) / ⑦出土遺物(滑石製石鍋)	116

嫁坂遺跡 図版目次

図版 1	①嫁坂遺跡遠景(南から)	149
図版 2	①嫁坂遺跡全景(上から) / ②嫁坂遺跡全景(南から)	150
図版 3	①嫁坂遺跡 SW7(上から) / ②嫁坂遺跡 SW4・SW3・SW2(上から)	151
図版 4	①嫁坂遺跡 SW4・SW3・SE2農耕具等痕検出状況 / ②嫁坂遺跡 SW4農耕具等痕検出状況	152
図版 5	①嫁坂遺跡 SW5農耕具等痕検出状況 / ②嫁坂遺跡 SW8農耕具等痕検出状況	153
図版 6	①嫁坂遺跡 SW8足痕等痕検出状況 / 嫁坂遺跡 SG1・SG2・SG3	154
図版 7	①嫁坂遺跡 SC1・SC2・SC3および円形配置ピット群 / ②嫁坂遺跡 SC1・SC2	155
図版 8	①嫁坂遺跡 土層堆積状況(1)	156
図版 9	①嫁坂遺跡 出土遺物(1)	157
図版 10	①嫁坂遺跡 出土遺物(2)	158

MOCHIODANI

母智丘谷遺跡

HATADA

畑田遺跡

YOMESAKA

嫁坂遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設工事に伴い、母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、中世を中心とする遺構・遺物が検出されました。特に、3遺跡全てで確認された中世の水田跡は、火山灰に埋もれた状態で検出され、厳しい自然環境と生活を共にしてきた当時の人々の暮らしを知ることのできる貴重な資料となりました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、ならびに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成14年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 矢野 剛

例 言

1. 本報告書は、農用地総合整備事業「都城区域」農業用道路建設工事に伴い宮崎県教育委員会が行った母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は次のとおりである。

母智丘谷遺跡 平成10年1月19日から平成10年3月25日
畑田遺跡 平成10年5月20日から平成10年9月30日
嫁坂遺跡 平成10年9月10日から平成10年12月24日
4. 現地での実測・写真撮影等の記録は主に甲斐貴充・南正覚雅士・高橋誠・黒木欣綱・橋川敬子・廣田晶子が行い、空中写真撮影は業者に委託した。
5. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・実測・トレースは甲斐貴充・高橋誠が整理補助員の協力を得て行った。
6. 本書で使用した位置図は国土地理院発行の5万分の1または2万5千分の1図を基に作成した。
7. 土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。
8. 本書で使用した方位は、主として座標北（座標第Ⅱ系）を使用している。その他「M. N.」と記載しているものは磁北（磁針方位は西偏約 5.5° ）である。レベルは海拔絶対高である。
9. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

S C…土坑 S E…溝状遺構 S G…道状遺構 S W…水田跡
10. 本書の執筆は、第Ⅰ章が永友良典・第Ⅱ章～第Ⅳ章が甲斐貴充・第Ⅴ章が高橋誠と永友良典が行い、編集は甲斐が行った。
11. 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章	はじめに	1~2
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1~2
第II章	母智丘谷遺跡・畑田遺跡の立地と環境	5~6
第III章	母智丘谷遺跡の調査	7~32
第1節	基本層序	7
第2節	調査の経過	8~12
第3節	第IX層（中世水田層）の調査	13~17
第4節	母智丘谷遺跡における自然科学分析	18
1	母智丘谷遺跡のプラント・オパール分析	18~25
第5節	小結	26
第IV章	畑田遺跡の調査	33~116
第1節	基本層序	35~39
第2節	調査の経過	40
第3節	第V層（中世水田層）の調査	41~49
第4節	第VI層～第VIII層（中世包含層）の調査	50~76
第5節	畑田遺跡における自然科学分析	86~98
1	畑田遺跡のテフラ分析	86~87
2	畑田遺跡のプラント・オパール分析	88~98
第6節	まとめ	99~102
第V章	嫁坂遺跡の調査	119~160
第1節	遺跡の位置と環境	121
第2節	層序	121~125
第3節	調査の経過	125~127
第4節	調査の記録	127~138
1	遺構	128~137
水田遺構		128~131
道状遺構		131~133
溝状遺構		134
土坑・円形配置ピット群		134
2	遺物	134~138
第5節	まとめ	138
第6節	嫁坂遺跡における自然科学分析	139~150
1	嫁坂遺跡におけるプラント・オパール分析	139~150

挿 図 目 次

母智丘谷遺跡 挿図目次

第 1 図	母智丘谷遺跡・畑田遺跡の位置と周辺遺跡図 (1/25,000)	5
第 2 図	母智丘谷遺跡・畑田遺跡周辺地形図 (1/2,000)	6
第 3 図	母智丘谷遺跡 地形図 (第IX層上面) (1/400)	8
第 4 図	母智丘谷遺跡 土層堆積状況図 (1/50)	9~10
第 5 図	母智丘谷遺跡 遺構検出状況図 (第IX層上面) ① (1/300)	11~12
第 6 図	母智丘谷遺跡 遺構検出状況図 (第IX層上面) ② (1/100)	14
第 7 図	母智丘谷遺跡 段差遺構土層堆積状況図 (1/20)	16
第 8 図	母智丘谷遺跡 遺構検出状況図 (第IX層上面) ③ (1/50)	17

畑田遺跡 挿図目次

第 1 図	畑田遺跡 土層堆積状況図① (1/80)	36~37
第 2 図	畑田遺跡 土層堆積状況図② (1/80)	38~39
第 3 図	畑田遺跡 地形図 (第IX層上面) (1/800)	40
第 4 図	畑田遺跡 第V層遺構検出状況図 (調査区全域) ① (1/400)	42
第 5 図	畑田遺跡 第V層遺構検出状況図 (水田区画1~4付近) ② (1/60)	43
第 6 図	畑田遺跡 遺構検出状況図 (第IX層上面) ② (1/40)	43
第 7 図	畑田遺跡 畦畔B・C断面図 (1/50)	44
第 8 図	畑田遺跡 第V層遺構検出状況図③ (水田区画3・5・6付近) (1/100)	45
第 9 図	畑田遺跡 第V層遺構検出状況図④ (水田区画8~11付近) (1/200)	47
第10 図	畑田遺跡 第V層遺構検出状況図⑤ (水田区画13付近) (1/80)	49
第11 図	畑田遺跡 土層堆積状況図③ (1/50)	51~52
第12 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層遺構検出状況図 (1/200)	53
第13 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器① (1/3)	56
第14 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器② (1/3)	57
第15 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器③ (1/3)	58
第16 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器④ (1/3)	59
第17 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器⑤ (1/3)	60
第18 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器⑥ (1/3)	61
第19 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器⑦ (1/3)	62
第20 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器⑧ (1/3)	64
第21 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器⑨ (1/3)	65
第22 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土土師器⑩ (1/3)	66
第23 図	畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土陶器① (1/6・1/3)	68

第24図	畑田遺跡 第Ⅵ層～第Ⅷ層出土陶器② (1/3)	69
第25図	畑田遺跡 第Ⅵ層～第Ⅷ層出土陶器③ (1/3)	70
第26図	畑田遺跡 第Ⅵ層～第Ⅷ層出土陶器④ (1/3)	71
第27図	畑田遺跡 第Ⅵ層～第Ⅷ層出土陶器⑤ (1/3)	72
第28図	畑田遺跡 第Ⅵ層～第Ⅷ層出土磁器 (1/3)	74
第29図	畑田遺跡 第Ⅵ層～第Ⅷ層出土石鍋・瓦質土器 (1/3)	76

嫁坂遺跡 挿図目次

第1図	嫁坂遺跡 遺跡位置図	122
第2図	嫁坂遺跡 土層図 (1/50)	124
第3図	嫁坂遺跡 地形図 (1/1,000)	126
第4図	嫁坂遺跡 遺構配置図 (1/500)	129～130
第5図	嫁坂遺跡 SG1・SG2・SG3 遺構実測図 (1/50)	132
第6図	嫁坂遺跡 SC1・SC2および円形配置ピット群遺構実測図 (1/40)	133
第7図	嫁坂遺跡 出土遺物実測図(1) (1/3)	136
第8図	嫁坂遺跡 出土遺物実測図(2) (1/3)	137

表 目 次

母智丘谷遺跡 表目次

第1表	母智丘谷遺跡 水田区画計測表	26
第2表	母智丘谷遺跡 水田畦畔計測表	26

畑田遺跡 表目次

第1表～第11表	畑田遺跡 出土遺物観察表①～⑨	77～85
第12表	畑田遺跡 水田区画計測表	99
第13表	畑田遺跡 水田畦畔計測表	100

図 版 目 次

母智丘谷遺跡 図版目次

図版1	①母智丘谷遺跡全景	27
図版2	①母智丘谷遺跡 調査区全景 (第Ⅷ層上面検出時) / ②母智丘谷遺跡 調査区全景 (第Ⅸ層上面検出時)	28
図版3	①水田区画1・2 検出状況 / ②水田区画1・2 完掘状況 /	29

	③水田区画6～8検出状況／④水田区画6～8完掘状況	
図版4	①凹凸痕検出状況／②水田区画1と畦畔A検出状況／ ③畦畔B検出状況／④畦畔E・F検出状況／⑤凹凸痕（水田区画6）検出状況	30
図版5	①土層堆積状況／②並ぶ凹凸痕／③水田区画5・6と畦畔D／ ④水田区画3・4と畦畔C／⑤畦畔C完掘状況／⑥段差遺構の杭列跡	31

畑田遺跡 図版目次

図版1	①畑田遺跡 全景1	103
図版2	①畑田遺跡 全景2	104
図版3	①畑田遺跡 第IV層上面遺構検出状況	105
図版4	①畑田遺跡 第V層遺構完掘状況	106
図版5	①水田区画1～4検出状況／②水田区画3～8検出状況／ ③水田区画6～12検出状況／④水田区画10～12検出状況	107
図版6	①土層断面図1／②土層断面図2／③畦畔Aと杭列痕検出状況／ ④畦畔Aと段差1完掘状況／⑤畦畔E完掘状況／⑥畦畔B・C完掘状況／ ⑦畦畔D完掘状況／⑧水田区画凹凸痕	108
図版7	①水田区画13と畦畔L完掘状況／②水田区画凹凸痕／ ③第VI～VIII層検出状況（上から）／④第VI～VIII層検出状況（南東から）／ ⑤土層堆積状況（Eライン）／⑥土層堆積状況（Fライン）／ ⑦第VI～VIII層遺物出土状況1／⑧第VI～VIII層遺物出土状況2	109
図版8	①出土土師器坏（第I・II類）／②出土土師器坏（第III・IV類）／ ③出土土師器坏（第V類）／④出土土師器坏（第VI類）／ ⑤出土土師器坏（第VII類）／⑥出土土師器坏（第VIII類）／ ⑦出土土師器坏（墨書土器）／⑧出土土師器坏（第IX類-1）	110
図版9	①出土土師器坏（第IX類-2）／②出土土師器坏（第X類）／ ③出土土師器坏（第XI類-1）／④出土土師器坏（第XI類-2）／ ⑤出土土師器坏（第XII類-1）／⑥出土土師器坏（第XII類-2）／ ⑦出土土師器坏（第XIII類）／⑧出土土師器坏（穿孔のある土器）	111
図版10	①出土土師器坏（第XIV類）／②出土土師器皿（第I類）／ ③出土土師器皿（第II類）／④出土土師器皿（第III類） ⑤出土土師器皿（第IV類）／⑥出土土師器皿（第V類） ⑦出土土師器皿（第VI類）／⑧出土土師器皿（第VII類）	112
図版11	①出土土師器皿（第VIII類）／②出土土師器皿（第IX類）／ ③出土陶器（甕A類-1）／④出土陶器（甕A類-2）／ ⑤出土陶器（甕A類-3）⑥出土陶器（甕A類-4）／	113

	⑦出土陶器（甕A類-5）／⑧出土陶器（甕A類-6）	
図版12	①出土陶器（甕A類-7）／②出土陶器（甕B類）／ ③出土陶器（甕C類-1）／④出土陶器（甕C類-2）／ ⑤出土陶器（甕C類-3）／⑥出土陶器（甕D類）／ ⑦出土陶器（甕E・F類）／⑧出土陶器（壺A類）	114
図版13	①出土陶器（壺B類）／②出土陶器（壺C類）／③出土陶器（捏鉢）／ ④出土陶器（擂鉢-1）／⑤出土陶器（擂鉢-2）／⑥出土陶器（瓶子・深皿）	115
図版14	①出土磁器（青磁碗-1）／②出土磁器（青磁碗-2）／ ③出土陶器（青磁碗-3）／④出土磁器（青磁坏）／ ⑤出土磁器（青磁皿-1）⑥出土磁器（青磁皿-2）	116
図版15	①出土磁器（青磁水注）／②出土磁器（白磁碗）／③出土磁器（白磁壺）／ ④出土磁器（白磁水注）／⑤出土磁器（青白磁壺）／⑥出土磁器（磁器碗）	117
図版16	①出土遺物（滑石製石鍋）／②出土遺物（瓦質土器）	118

嫁坂遺跡 図版目次

図版1	①嫁坂遺跡遠景（南から）	151
図版2	①嫁坂遺跡全景（上から）／②嫁坂遺跡全景（南から）	152
図版3	①嫁坂遺跡 SW7（上から）／ ②嫁坂遺跡 SW4・SW3・SW2（上から）	153
図版4	①嫁坂遺跡 SW4・SW3・SE2農耕具等痕検出状況／ ②嫁坂遺跡 SW4農耕具等痕検出状況	154
図版5	①嫁坂遺跡 SW5農耕具等痕検出状況／ ②嫁坂遺跡 SW8農耕具等痕検出状況	155
図版6	①嫁坂遺跡 SW8足痕等痕検出状況／嫁坂遺跡 SG1・SG2・SG3	156
図版7	①嫁坂遺跡 SC1・SC2・SC3および円形配置ピット群／ ②嫁坂遺跡 SC1・SC2	157
図版8	①嫁坂遺跡 土層堆積状況 土層㊸，土層㊹，土層㊺	158
図版9	①嫁坂遺跡 出土遺物（1）	159
図版10	①嫁坂遺跡 出土遺物（2）	160

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

緑資源公団（旧農用地整備公団）が都城地区農用地総合整備事業として農業生産性の向上・農業安定を図るほ場整備事業（204 ha）やそれに伴う農業生産流通の迅速化を目指した広域農道（総延長19.1 km）を計画した。そこで、平成5年11月に整備事業予定地内の文化財所在の有無についての照会が、九州農政局南部九州土地改良調査管理事務所長より県文化課にあり、平成6年3月に33遺跡と試掘必要な29箇所を回答した。以後、それに基づき埋蔵文化財の保護、発掘調査面積の平準化、調査員の確保などについて協議し、工事施工によって影響を受ける部分については工事着手前に発掘調査を実施することになり、平成9年度の母智丘谷遺跡から発掘調査が始まった。

今回、報告する母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡は広域農道建設に伴うもので、母智丘谷遺跡と畑田遺跡は平成9年12月8日～18日に、嫁坂遺跡は平成9年12月15日～25日に県文化課が確認調査を実施した。その結果、3遺跡とも文明ボラ層（軽石層）直下から水田跡と思われる遺構が検出されたため、工事施工によって影響を受ける部分についてそれぞれ発掘調査を行うこととなった。発掘調査期間は母智丘谷遺跡が平成10年1月19日から3月25日、畑田遺跡が平成10年5月20日から9月30日、嫁坂遺跡が平成10年9月10日から12月24日に実施された。

第 2 節 調査の組織

発掘調査

母智丘谷遺跡（平成9年度）

調査主体 宮崎県教育委員会

教育次長	岩 切 正 憲
文化課長	仲 田 俊 彦
埋蔵文化財係長	北 郷 泰 道
主査	永 友 良 典（調整担当）

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	藤 本 健 一
副所長	岩 永 哲 夫
庶務係長	三 石 泰 博
（兼）調査第二係長	岩 永 哲 夫
同 主査	谷 口 武 範（調整担当）
同 主事	甲 斐 貴 充（調査担当）
同調査員（嘱託）	黒 木 欣 綱

畑田遺跡・嫁坂遺跡（平成10年度）

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 笹山竹義
文化課長 仲田俊彦
埋蔵文化財係長 北郷泰道
同 主査 長津宗重（調整担当）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田中守
副所長 江口京子
庶務係長 児玉和昭
調査第二係長 青山尚友
同 主査 谷口武範（調整担当・嫁坂遺跡調査担当）
同 主査 南正覚雅士（畑田遺跡調査担当）
同 主事 高橋誠（嫁坂遺跡調査担当）
同 主事 甲斐貴充（畑田遺跡調査担当）
同調査員（嘱託） 橋川敬子（嫁坂遺跡調査担当）
同調査員（嘱託） 廣田晶子（畑田遺跡調査担当）

報告書作成

母智丘谷遺跡・畑田遺跡・嫁坂遺跡（平成13年度）

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 岩切正憲
文化課長 黒岩正博
埋蔵文化財係長 石川悦雄
同 主査 飯田博之（調整担当）

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野剛
副所長兼総務課長 菊地茂仁
副所長兼調査第二課長 岩永哲夫
総務係長 亀井維子
調査第二課調査第四係長 永友良典（調整担当・嫁坂遺跡執筆担当）
同 調査第三係主任主事 甲斐貴充（母智丘谷遺跡・畑田遺跡執筆担当）
県労働政策課主任主事 高橋誠（嫁坂遺跡執筆担当）

MOCHIODANI

母智丘谷遺跡

第Ⅱ章 母智丘谷・畑田遺跡の立地と環境（第1図）

母智丘谷遺跡（第1図-1）は都城市横市町字母智丘谷に、畑田遺跡（第1図-2）は同市横市町字表に所在する。遺跡の位置する都城市は、宮崎県の南西部に位置し、東の鰐塚山系や北西の霧島山系をはじめとする山々に囲まれた都城盆地の中央部に位置する。両遺跡は、都城市街地から北西に約3km、鹿児島県曾於郡財部町との県境近くにあり、大淀川支流である横市川の左岸の月野原台地南端部にある。

本遺跡周辺には、縄文時代から中世にかけて数多くの遺跡が確認されている。肱穴遺跡（縄文時代晩期をはじめ中世までの水田跡などの生産遺跡や集落遺跡第：1図-3）、中尾山・馬渡遺跡（縄文～平安時代：第1図-4）、母智丘原第1遺跡（第1図-5）、母智丘原第2遺跡（弥生～古墳時代：第1図-6）、牧ノ原第2遺跡（縄文～近世：第1図-7）、上牧第2遺跡（縄文～近世：第1図-8）、新宮城跡（畑田遺跡東隣、中世館城跡：1図-9）などが挙げられる。

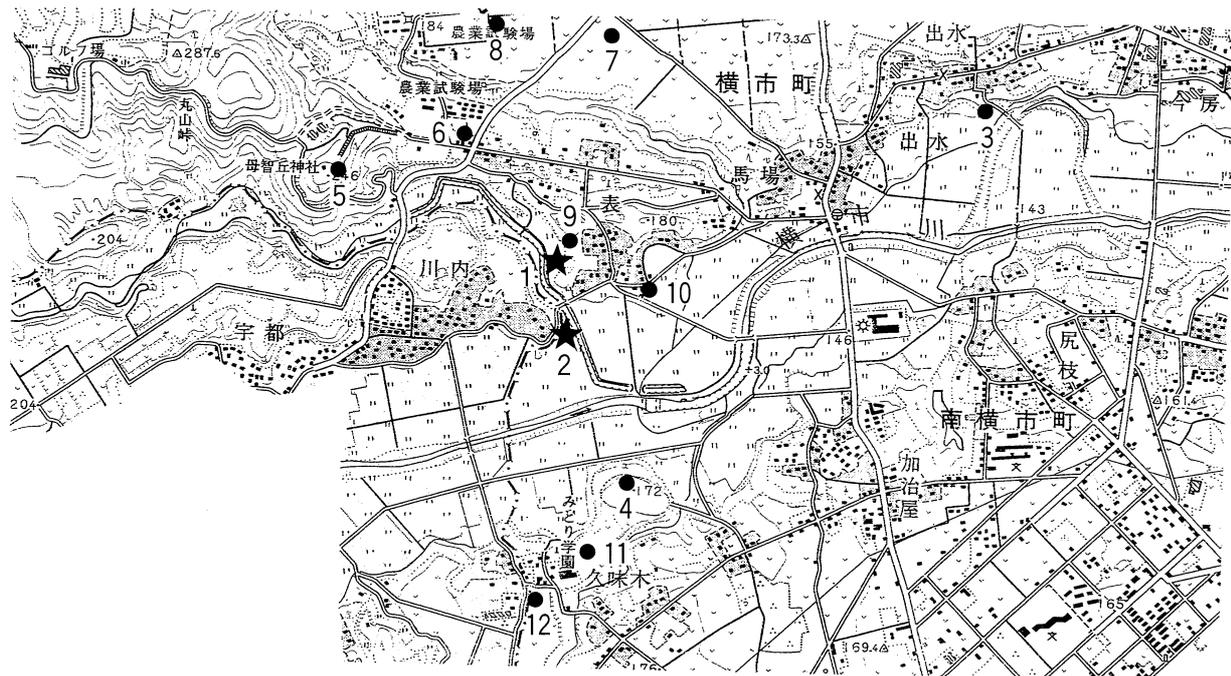
特に、遺跡周辺では、母智丘谷・畑田遺跡と同じように、15世紀後半以降に降灰したと考えられる桜島文明軽石層に覆われた形で多くの水田跡・畠跡の生産遺跡が確認されている。鶴喰遺跡（水田跡：第1図-10）、中尾遺跡（畠跡：第1図-11）、蓑原遺跡（畠跡：第1図-12）、肱穴遺跡（水田跡・畠跡：第1図-3）などであり、中世の生産基盤を考える上で貴重な発見が相次いでいる。

【引用参考文献】

米沢英昭1998年「鶴喰遺跡」『都城市文化財調査報告書 第44集』都城市教育委員会

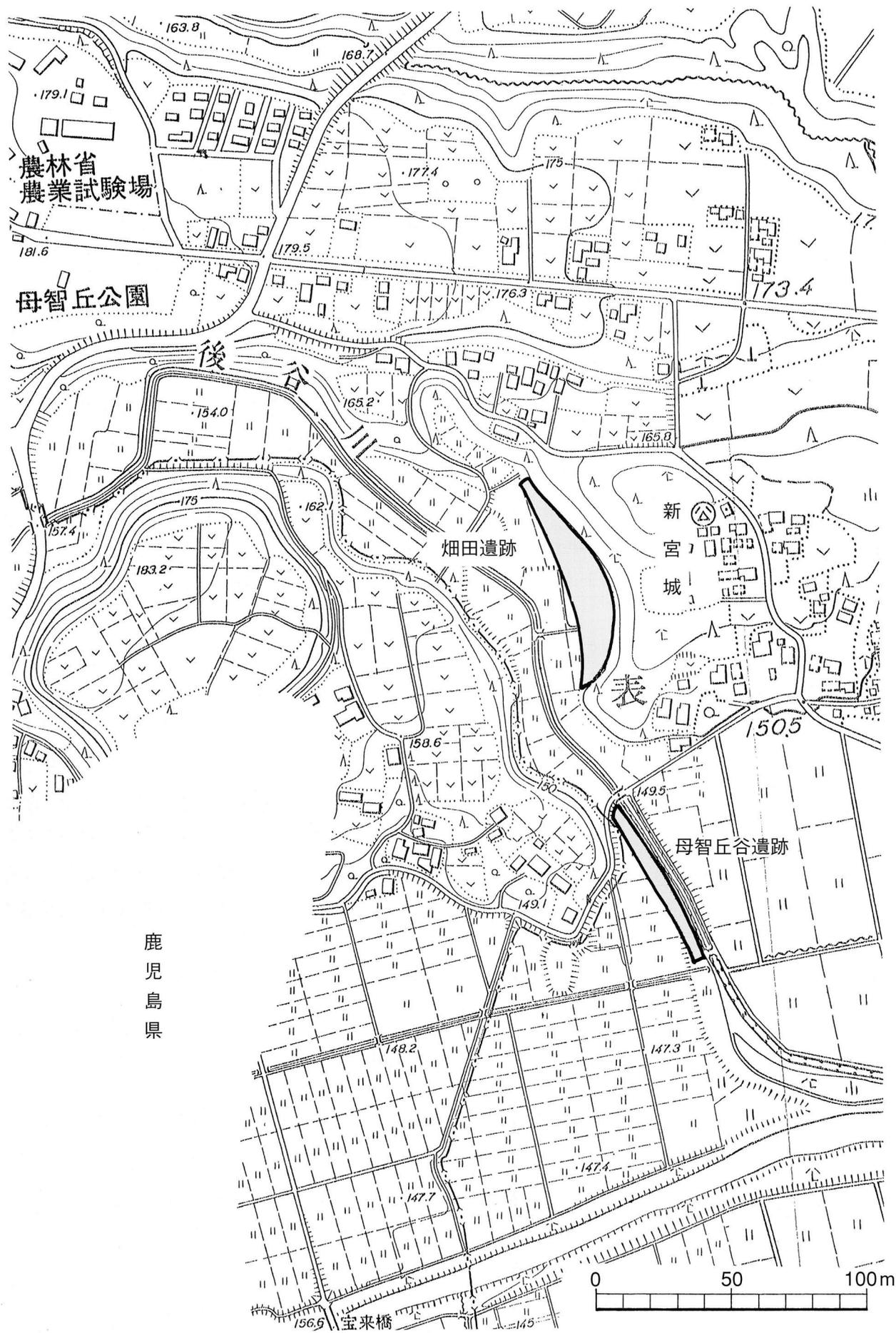
横山哲英1999年「肱穴遺跡」『都城市文化財調査報告書 第47集』都城市教育委員会

甲斐貴充・鈴木健二・高橋浩子2001年「梅北佐土原遺跡・蓑原遺跡・中尾遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第42集』宮崎県埋蔵文化財センター



- | | | | | | |
|------------|-----------|---------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 母智丘谷遺跡 | 2. 畑田遺跡 | 3. 肱穴遺跡 | 4. 中尾山・馬渡遺跡 | 5. 母智丘原第1遺跡 | 6. 母智丘原第2遺跡 |
| 7. 牧ノ原第2遺跡 | 8. 上牧第2遺跡 | 9. 新宮城跡 | 10. 鶴喰遺跡 | 11. 中尾遺跡 | 12. 蓑原遺跡 |

第1図 母智丘谷遺跡の位置と周辺遺跡（1 / 25,000）



第2図 母智丘谷遺跡周辺図 (1 / 2,000)

第 III 章 母智丘谷遺跡の調査の記録

第 1 節 基本層序 (第 4 図)

母智丘谷遺跡の基本層序を第 3 図に示した。母智丘谷遺跡の現地地形は調査前まで水田に利用されていたので水平に近いが、かつての旧地形は横市川に向かって緩やかに傾斜していたと推察される。先に述べてはいるが、母智丘谷遺跡は、大淀川支流の横市川に非常に近く、ところどころ河川の氾濫によると考えることのできる浸食部分が確認でき、一部不安定な堆積を呈する。しかし、全体的には、安定した堆積の様相を呈している。

第 I 層は、暗褐色～暗灰褐色系土である。含有物は少なく、表土及び現代の水田耕作土だと考えることができる。第 II 層は、様々な土質がブロック状で構成される暗灰褐色土層である。洪水等の後に施された近年の造成土だと考えられる。第 III 層は明褐色～明灰褐色砂質土である。全体的に細互層のように堆積している。氾濫等による洪水砂の堆積だと考えることができる。第 IV 層は暗灰褐色土である。灰白色軽石細粒を全体に含む。第 IV 層は、水平に近い堆積状況でさらに細かく幾層にも細分できることやところどころに洪水砂と思しき砂質土があることなどから、中世から現代にかけての連続した水田跡面であると考えられる。第 V 層は暗青灰色土である。全体的に細互層のように堆積している。氾濫等による洪水砂の堆積だと考えられる。第 VI 層は、灰白色軽石細粒を全体に多く含む暗灰色土である。全体に班紋状の酸化鉄が確認できる。第 VII 層は、暗褐灰色土である。全体に灰白色軽石細粒を含むだけでなく、径 1～10 cm 程度の灰白色軽石粒も含む。第 VIII 層は灰白色軽石粒の堆積層である。この軽石は桜島文明軽石（桜島起源－15 世紀後半噴出）層であると考えられる。本来なら下方に軽石粒、上方に灰質土が堆積するのだが、攪拌された状態で確認されている。下部は酸化により著しく赤変している。第 IX 層は暗青灰褐色粘質土である。上部は激しく凹凸している。第 X 層は灰色砂質土である。含有物はほとんどなく、砂質土が細互層状に堆積している。第 XI 層は、ところどころに暗青緑灰色の円礫を含む、暗青灰色粘質土である。第 XII 層は径 1～10 cm の円礫と粒子の粗い砂質土を主構成とする暗青緑灰色礫層である。

第 I 層	第 I 層 暗褐色～暗灰褐色土。現代の耕作土
第 II 層	第 II 層 暗灰褐色土
第 III 層	第 III 層 明褐色～明灰褐色砂質土
第 IV 層	第 IV 層 暗灰褐色土
第 V 層	第 V 層 暗青灰色砂質土
第 VI 層	第 VI 層 暗灰色土
第 VII 層	第 VII 層 暗褐灰色土
第 VIII 層	第 VIII 層 灰白色軽石粒。桜島文明軽石層
第 IX 層	第 IX 層 暗青灰褐色粘質土。中世水田面
第 X 層	第 X 層 灰色砂質土
第 XI 層	第 XI 層 暗青灰色粘質土
第 XII 層	第 XII 層 暗青緑灰色礫層

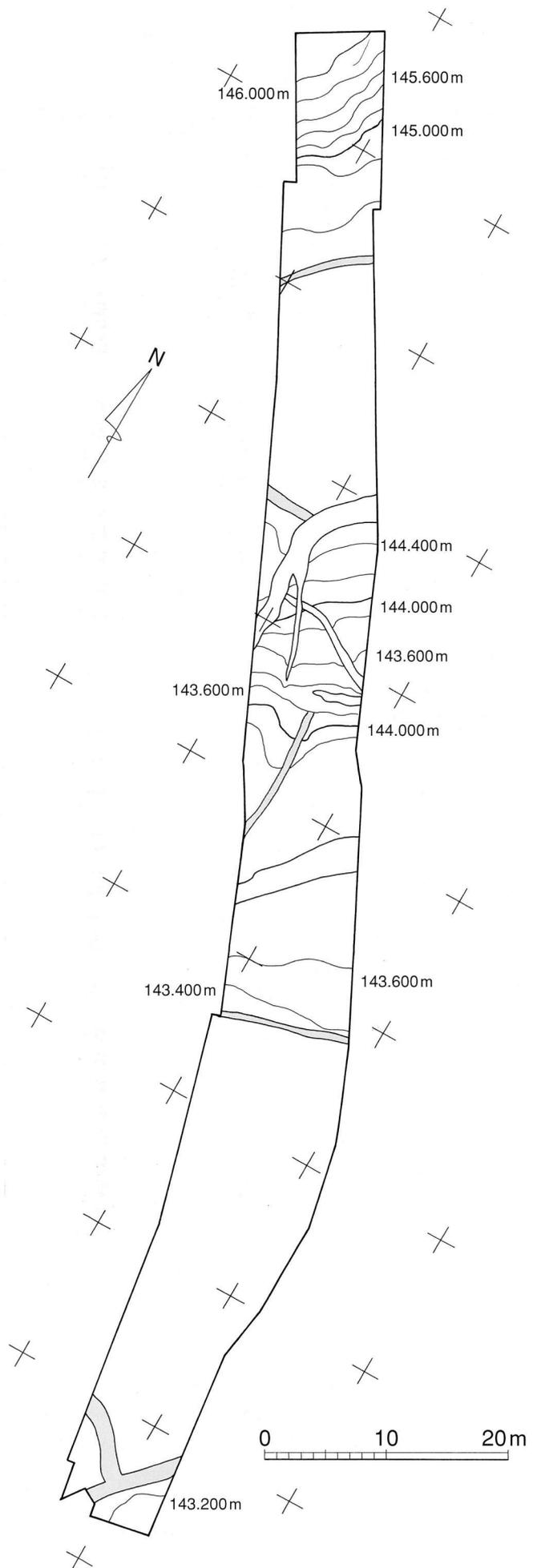
第2節 調査の経過

母智丘谷遺跡の調査対象面積は780㎡である。遺跡は、大淀川支流の横市川に近く、かつては氾濫原であったと考えられる。その影響を受けてか、調査区全域にわたって流水作用による厚い堆積状況が確認され、15世紀後半噴出と考えられる桜島文明軽石（通称「白ボラ」「文明ボラ」）の層まで3m程の深さであった。

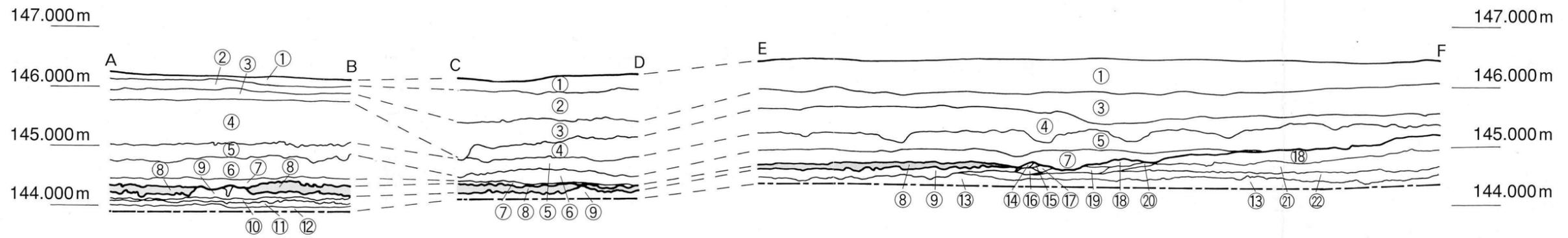
本調査において、この桜島文明軽石層（母智丘谷遺跡の基本層序の第Ⅷ層）上まで重機を用いて表土や堆積土の除去を行い、その後人力によって第Ⅷ層上面での検出作業を行った。調査前地形は、耕地に利用されていたためにほぼ水平な状態であった。ところが、第Ⅲ層は、当時の旧地形を反映してか、大きく2面の段差をもちながら北から南に緩やかに傾斜する状態で検出された。

第Ⅷ層まで掘り下げたところ、検出面の大部分が隣接する用水路の水面下となってしまうために、検出面の大部分から常に水が湧いてくるという不測の事態に見舞われた。そこで、土層の堆積状況確認と排水施設を兼ねて調査区の周囲に排水溝（幅約60cm）を廻らし、常時センサー付き水中ポンプを用いて水を汲み出しながら、調査を続行した。

第Ⅷ層上面での検出作業の結果、数条の帯状の遺構を確認した。この遺構を確認すべく、第Ⅷ層を人力によって除去したところ、数条の帯状遺構は、水田の畦畔であることが判明した。また、この畦畔に囲まれた区画を数えたところ、最低8区画、つまり8面以上の水田面跡が確認された。

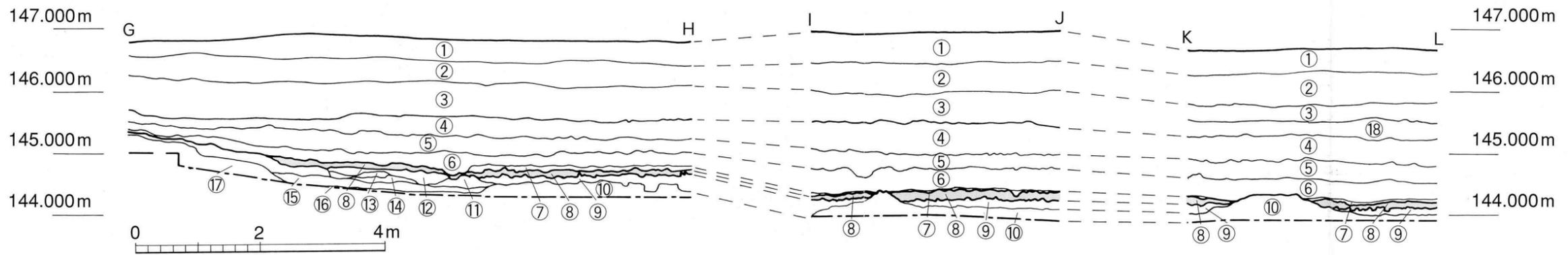


第3図 母智丘谷遺跡 地形図（第Ⅸ層上面）（1 / 400）



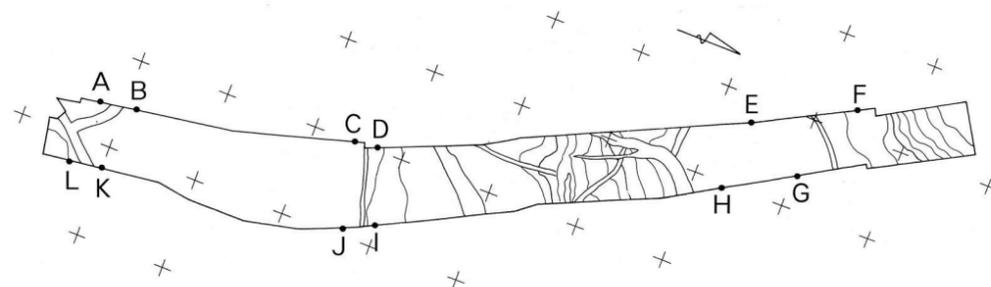
【土層註記 調査区西側A～F間】

①褐色～暗灰褐色土…基本層序の第I層。現代の耕作土。／②暗灰褐色土…基本層序の第II層。造成土だと考えられる。／③明褐色砂質土～明灰褐色砂質土…基本層序の第III層。洪水砂か？／④暗灰褐色土…基本層序の第IV層。洪水砂と耕作土から構成されている。／⑤暗青灰砂質土…基本層序の第V層。砂質あり。／⑥暗灰色土…全体に酸化の痕跡が確認できる。／⑦暗褐色土…基本層序の第VII層。酸化の痕跡が確認できる。灰白色軽石粒を多く含む。／⑧灰白色軽石土…桜島文明軽石の堆積層。全体的に攪拌されているようである。／⑨暗青灰褐色粘質土…基本層序の第IX層。層上部一面に凹凸痕が確認できる。／⑩灰色砂質土…基本層序の第X層。砂質土がラミナ状で堆積している。／⑪暗青灰褐色粘質土…基本層序の第XI層。暗青緑灰色の小円礫を含む。／⑫暗青緑灰色礫層…基本層序の第XII層。径1～10cm円礫と砂質土から構成される。／⑬灰色砂質土…⑩層と同じ層だと考えられる。／⑭暗灰褐色土…上部に灰白色軽石粒が含まれる。畦畔の盛土か？／⑮暗灰褐色土…⑭層と似ているが、灰白色軽石粒を含まない。畦畔の盛土か？／⑯暗灰褐色土…⑭層と似ているが、色調は明るめで灰白色軽石粒を含まない。畦畔の部分だと考えられる。／⑰暗褐色土…色調その他⑩層と類似しているが、灰白色軽石粒を含まない。／⑱暗灰褐色土…わずかに白色パミスを含む。／⑲暗褐色土…⑱層に似ているが、わずかながら砂質土を含む。／⑳暗灰褐色土…⑱層と同じ／㉑暗褐色土…全体的に白・黄色のパミスを含む、下部は砂質土が混じる。／㉒明灰褐色土…㉑層と似ているが、色調が明るく、灰白色軽石粒の含有率が高い。

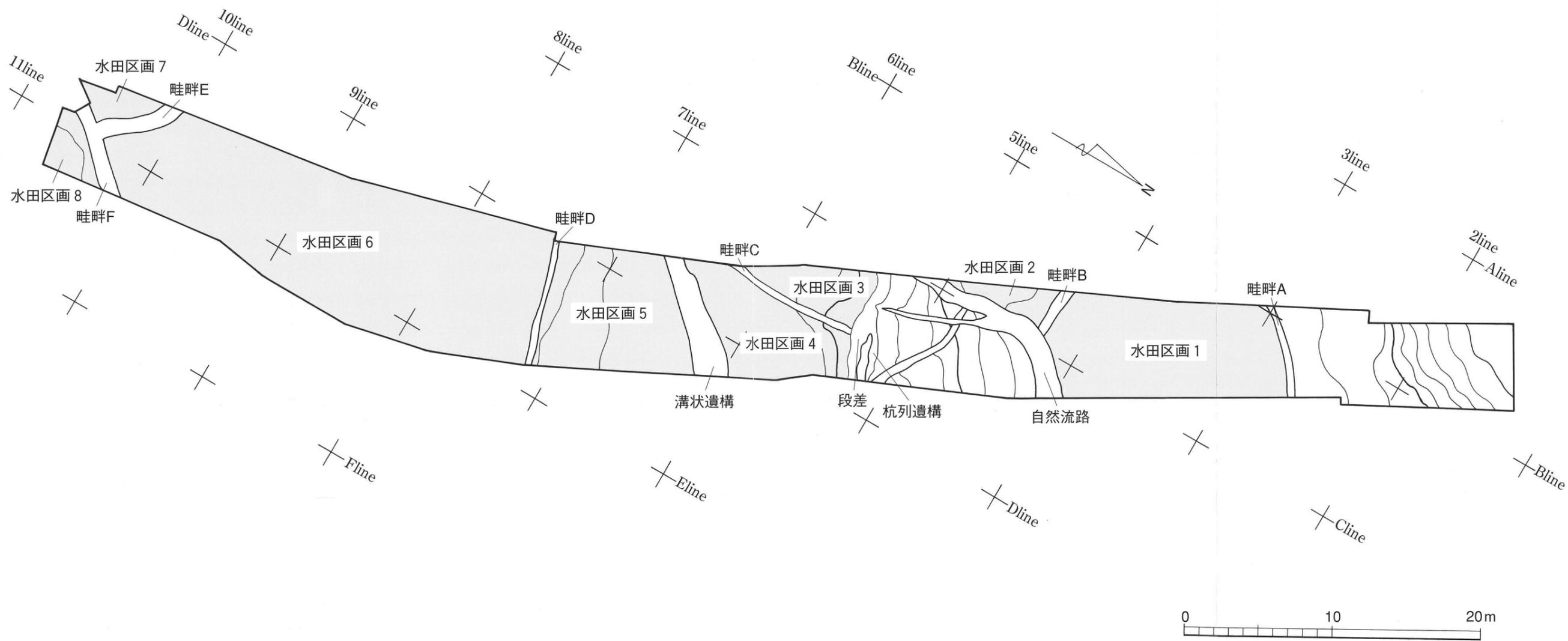


【土層註記 調査区東側G～L間】

①褐色～暗灰褐色土…基本層序の第I層。現代の耕作土。／②暗灰褐色土…基本層序の第II層。造成土だと考えられる。／③明褐色砂質土～明灰褐色砂質土…基本層序の第III層。洪水砂か？／④暗灰褐色土…基本層序の第IV層。洪水砂と耕作土から構成されている。／⑤暗青灰砂質土…基本層序の第V層。砂質あり。／⑥暗灰色土…全体に酸化の痕跡が確認できる。／⑦暗褐色土…基本層序の第VII層。酸化の痕跡が確認できる。灰白色軽石粒を多く含む。／⑧灰白色軽石土…桜島文明軽石の堆積層。全体的に攪拌されているようである。／⑨暗青灰褐色粘質土…基本層序の第IX層。層上部一面に凹凸痕が確認できる。／⑩灰色砂質土…基本層序の第X層。砂質土がラミナ状で堆積している。／⑪灰色粘質土…土質は⑫層に似ているが、色調が明るい。畦畔の可能性のある層。／⑫暗灰色粘質土…⑪層と似ているが、灰白色軽石を多く含む点異なる。／⑬灰色粘質土…⑪層と似ているが、灰白色軽石を含む。溝の盛土もしくは畦畔の可能性のある。／⑭暗灰色粘質土…基本的には⑬層と同じ。／⑮青灰色粘質土…灰白色軽石と砂利を含む。／⑯灰黄色砂質土…径3mm前後の灰白色軽石粒を含む／⑰灰色粘質土…⑩層に似ている。砂利の混入した砂質土がラミナ状で堆積している。／⑱暗灰褐色砂質土…③と似ているが、色調が少し暗い。同じく洪水砂か？



第4図 母智丘谷遺跡 土層堆積状況図



第5図 母智丘谷遺跡 遺構検出状況図① (1/300)

第3節Ⅸ第層（中世水田層）の調査（第5図～第10図）

第Ⅸ層の調査で確認され遺構は水田遺構・溝状遺構1・杭列遺構1である。水田遺構は、一部河川の氾濫によって攪乱されている部分があるものの、明確な6本の畦畔、1カ所の段差、1条の溝状遺構、1列の杭列遺構によって区画されている状態で確認された。確認された水田区画は8枚である。調査の便宜上、8枚の水田区画は「水田区画1」～「水田区画8」を、7本の畦畔は「畦畔A」～「畦畔F」、1条の溝状遺構は「溝状遺構1」と呼称するようにした。

調査区の制限もあって、全体が確認できた水田区画はない。しかし、検出状況を見るに、水田区画は、ある程度方形区画を意識しながらも、傾斜の度合いに応じて大小不定形に区画されていると考えられる。検出された各水田区画の面積は $10\text{ m}^2\sim 202\text{ m}^2$ （平均 66.25 m^2 ）で、各水田区画間の距離は $1.6\text{ m}\sim 15.7\text{ m}$ （平均 5.03 m ）である。また、検出された8つの水田区画全てに農具痕と考えられる凹凸痕が夥しく拡がっているのが確認できた。なお、ここで各水田区画に用いる「面積」と「最大幅」の単位は、「面積」は畦畔内の面積を、「最大幅」は畦畔と直交する最大の幅のことを指す。

以下、個別の遺構について若干ではあるが記述する。

■水田区画1・畦畔A

水田区画1は、一部南東側は洪水によって攪乱されているが、北側を畦畔A・南側を畦畔Bによって区画された水田である。面積は 101 m^2 、水田の最大幅部は 7.8 m で比較的広い水田面だったと考えられる。

北側の畦畔Aは、幅 45 cm の小畦畔で幅 80 cm の浅い小溝を付属しており、耕作していない傾斜地側との境界の役割を果たしている。また、畦畔Aの土層堆積状況を見るに、一度畦畔が降灰もしくは流土で埋まった後に再度土盛りをして畦畔を復旧させているようである（第4図）。

■水田区画2・畦畔B

水田区画2は、南側と東側が攪乱によって大部分消失しているが、北側を畦畔Bによって区画された水田である。面積は 10 m^2 で検出された水田区画の中で最小である。

畦畔Bは、幅 $50\sim 80\text{ cm}$ の畦畔であり、水田区画1と水田区画2の高低差（約 10 cm ）を補う役割を果たしている。また、畦畔Bには、一部畦畔が細くなっている箇所があり、水口だとも考えられるが、溝状遺構2によって攪乱されているため不明である。

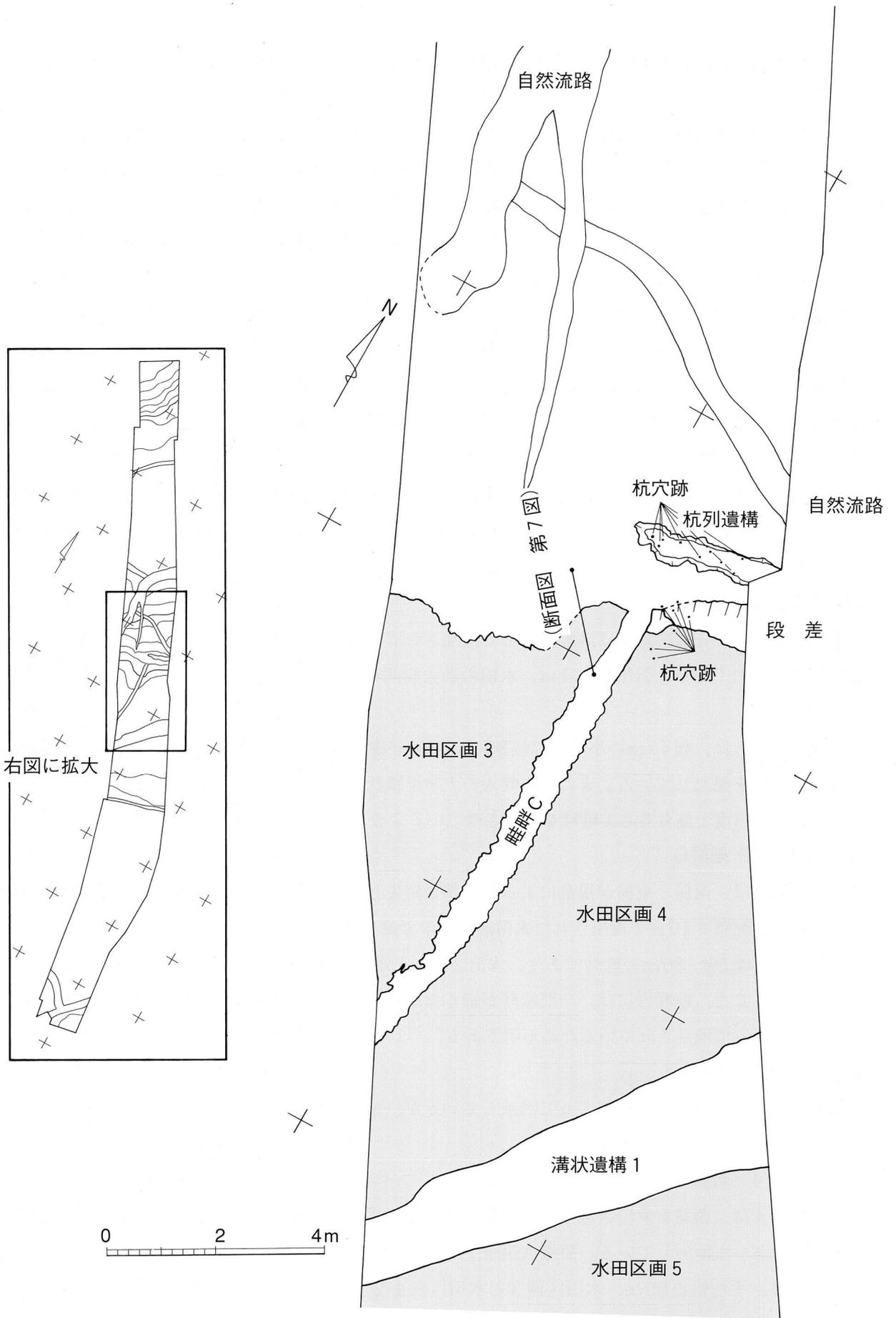
■水田区画3

水田区画3は、北側が攪乱によって消滅しているが、東側を畦畔Cによって区画された水田である。面積は 22 m^2 、最大幅は 1.7 m である。

■水田区画4・畦畔C

水田区画4は、西側を水田区画3と畦畔Cで区画されている以外は北側を段差と杭列遺構・南側が溝状遺構1によって消失している。面積は 50 m^2 、最大幅は 3.1 m である。

畦畔Cは、平均幅約 60 cm 、水田区画3と水田区画4を区切っているが、両水田区画間の高低差は設けていない。



第6図 母智丘谷遺跡 遺構検出状況図② (1 / 100)

■杭列遺構（第6図）

杭列遺構は、水田区画4の北側の段差上に位置する。幅50cm・長さ250cm（検出部分）・深さ5～10cmの浅い溝の中に30～50cmの間隔で10本の杭痕跡の列が確認された。この杭列は、何のための杭列なのか判断は難しいが、おそらく水田区画4への土砂流出防止のための柵用の杭だと考えられる。また、段差近くの畦畔Cからも杭列が確認された（写真図版5-⑥）。この杭列は、25～30cmのほぼ等間隔に配列しており、一部攪乱により消失しているが杭列遺構に繋がるような方向に延びている。これは、水誘導のためのものか、流入土防止のためなのか、性格付けが難しい。

■溝状遺構1（第6図）

溝状遺構1は、水田区画4と水田区画5を区画する幅60～120cmの遺構である。土層の堆積状況から、この遺構は水田面より新しい時代の遺構であると考えられる。そのことを踏まえて考えると、この溝状遺構によって区画された水田区画4と水田区画5は、本来同一区画であった可能性が強く指摘できる。

■水田区画5・畦畔D（第6図）

水田区画5は、北側を溝状遺構1、南側を畦畔Dによって区画された水田である。面積は75㎡、最大幅5.3mで、比較的大きい。前述したとおり溝状遺構1は、水田面より後の時代のものである可能性があるので、水田区画4と同一区画だったと考えられる。

畦畔Dは、幅50～60cmの細い小畦畔で、水田区画5と水田区画6の高低差（水田区画5が約5cm高い）を補う役割を果たしている。

■水田区画6・畦畔E・F（第6図）

水田区画6は、北側を畦畔D、南東側を畦畔E、南西側を畦畔Fによって区画された水田である。面積は遺跡最大の250㎡である。最大幅も15.7mで最も広いのではあるが、区画内の比高差は10cm未満とほぼ水平である。

畦畔Eは、水田区画6と水田区画7の高低差（水田区画6の方が5～8cm高い）を補う畦畔である。幅は約60～80cmと人が歩けるほどの太さであり、畦畔Fと同様に他の畦畔より太い。畦畔の中心部には、基本層序の第XII層と同じ暗青灰色砂礫土が芯材のように敷き詰められており、畦畔の補強の様子が伺える。

畦畔Eには、一部畦畔が凹み、変形している箇所がある（第8図）。周辺を精査すると、水田区画6から水田区画8へ土が流れているようであることと、畦畔に沿って杭跡らしき痕跡がいくつかあることが確認された。このことから考えてこの変形箇所は水口であると考えられる。また、水口と考えられる変形箇所周辺の畦畔には、畦畔が流失するのを防ぐために、杭を打ち込むか板材などで覆うことによって補強を施していたと考えられる。

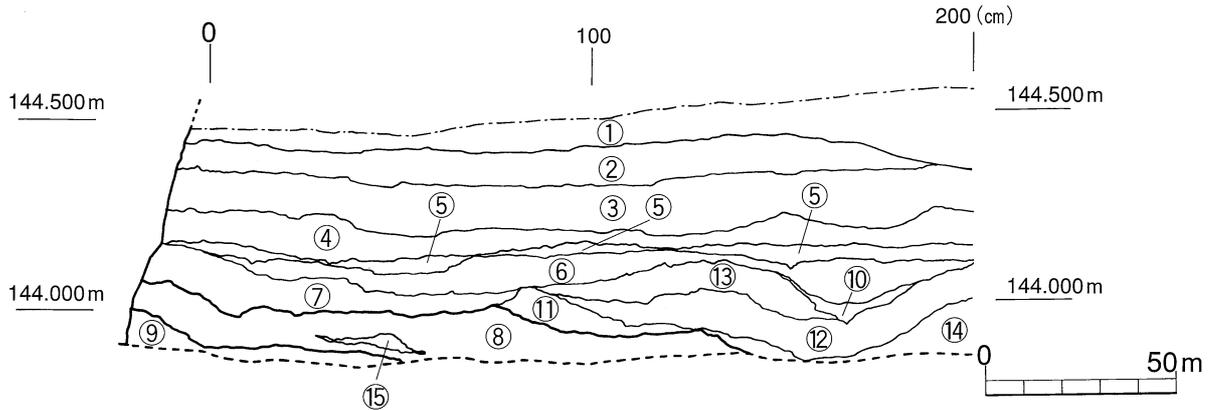
畦畔Fは、水田区画6と水田区画8の高低差（水田区画6の方が5～8cm高い）を補う畦畔である。この畦畔は、他の畦畔と違い、二つの段差をもつ二段構成の畦畔である。一段目の基部の幅は約120cm、二段目の幅は60～90cmと比較的太い。畦畔の中心部には、畦畔E同様に補強目的のためか、暗青灰色砂礫土が敷き詰められている。

■水田区画 7

水田区画 7 は、調査対象外区域にかかっていて全容は不明であるが、北西側を畦畔 E によって区画された水田である。面積は 12 m²、最大幅 2.0 m である。

■水田区画 8

水田区画 8 は、調査対象外区域にかかっており全容は不明であるが、北東側を畦畔 F、南東側を畦畔 E によって区画された水田跡である。面積は 10 m²、最大幅 1.6 m と小さい。

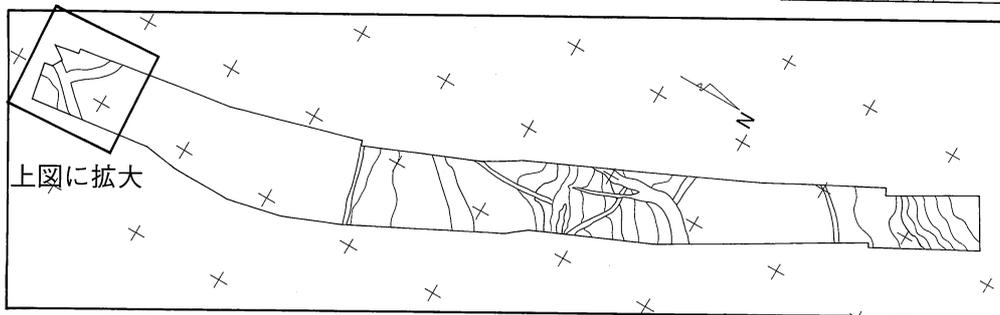
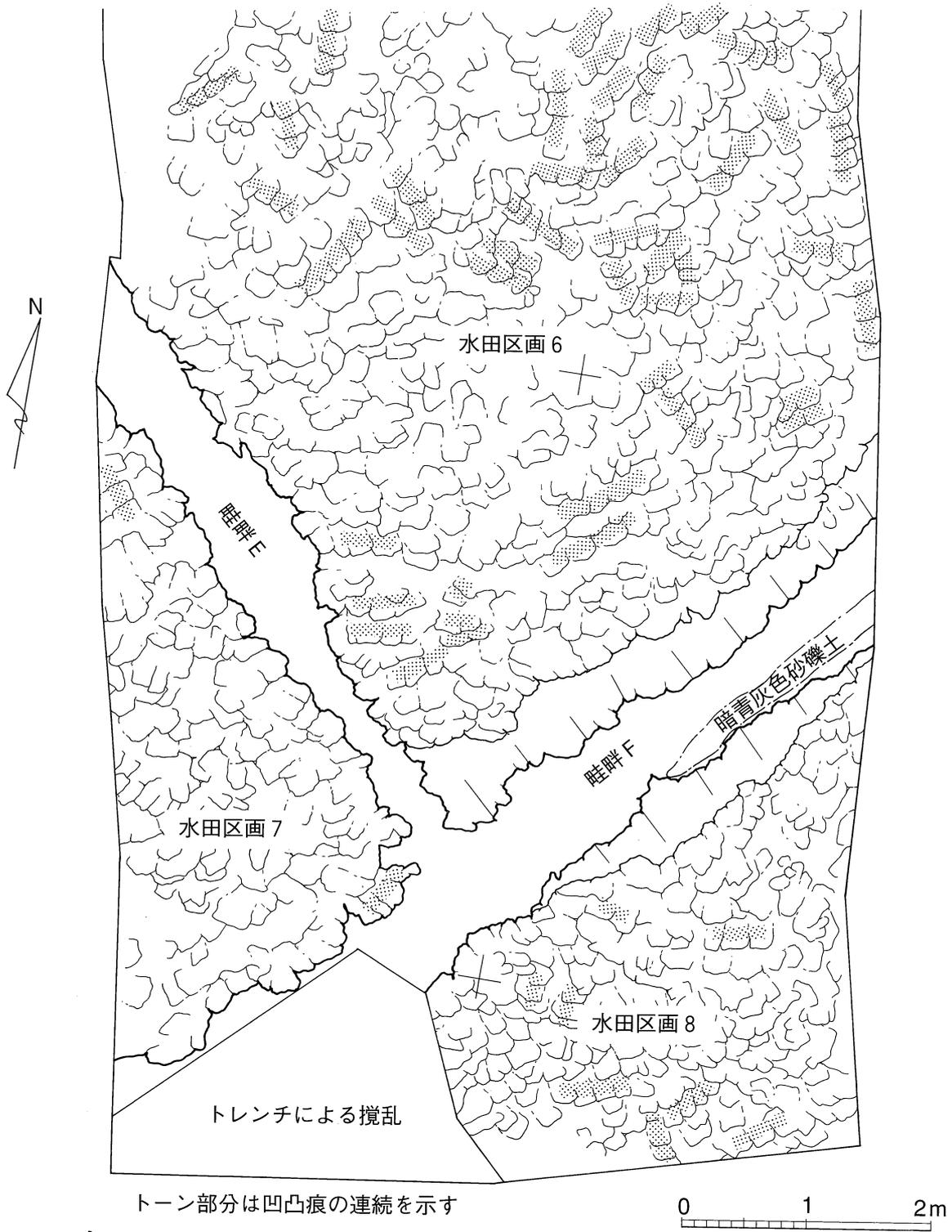


第 7 図 段差遺構断面土層堆積状況図② (1 / 20)

段差部分は、水田面造営時にもあったものであるが、水田面造営後に洪水などによって部分的に水田区画を攪乱している。

【段差土層註記】

① 灰色砂質土 後世の洪水砂だと考えられる。基本層序の第Ⅲ層の一部だと考えられる。 ② 白黄褐色砂質土 後世の洪水砂だと考えられる。中に明るい白色や黄色系統の川砂を多く含む。基本層序の第Ⅲ層の一部だと考えられる。 ③ 暗灰褐色土 A 基本層序の第Ⅳ層だと考えられる。 ④ 暗灰褐色土 B ③より少し明るめの色調であるが、基本的に③層と同じである。基本層序の第Ⅳ層だと考えられる。 ⑤ 青灰砂質土混灰褐色土 中に白色及び青灰色の砂質土を多く含む。一部ラミナ状の堆積をしており、洪水砂の堆積層だと考えられる。基本層序の第Ⅴ層だと考えられる。 ⑥ 暗灰褐色土 層全体に径 1 mm 前後の灰白色軽石粒を含む。基本層序の第Ⅵ層だと考えられる。 ⑦ 暗灰褐色砂質土 ⑥層と似ているが、⑥層に比べて灰白色軽石土・砂質土の混入密度が高い。基本層序の第Ⅶ層と洪水砂の堆積土が混合して形成された層だと考えられる。 ⑧ 灰白軽石土 桜島文明軽石の層だと考えられるが、中に⑨層と考えられる暗青灰粘質土が混入している。⑦層の影響が攪拌が激しく入っていることが確認できる。 ⑨ 暗青灰色粘質土 A 混入物は殆どなく粘質がある。中世の水田耕作土だと考えられる。左端に畦畔 C の高まりが確認できる。 ⑩ 暗灰褐色土 層全体に灰白色を多く含む。溝状遺構の埋土の一部である。 ⑪ 黒褐色土 溝状遺構の埋土の一部である。溝状遺構ができる過程で⑧層と攪乱をうけたと考えられる。 ⑫ 青灰色砂質土 川砂に近い砂質土である。溝状遺構の埋土の一部である。 ⑬ 暗灰褐色砂質土 ⑥層と似ているが、⑥層に比べて砂質土の混入密度が高い。溝状遺構の埋土である。 ⑭ 灰色砂質土 溝状遺構の埋土の一部である。 ⑮ 暗青灰色粘質土 B ⑫層と似た土質である。攪拌された時に入り込んだものと考えられる。



第8図 母智丘谷遺跡 遺構検出状況図 (第層Ⅸ上面) ③ (1/50)

第4節 母智丘谷遺跡における自然科学分析

1 母智丘谷遺跡のプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (藤原・杉山, 1984)。

母智丘谷遺跡の発掘調査では、桜島3テフラ (Sz-3、1417年) 直下から水田遺構が検出された。ここでは、同遺構における稲作の検証を主目的として分析を行った。

2. 試料

試料は、A地点とB地点および桜島3テフラ直下検出面から採取された計56点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1 g に対して直径約 $40\ \mu\text{m}$ のガラスビーズを約 0.02 g 添加
(電子分析天秤により 0.1 mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550°C ・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 ($300\ \text{w}$ ・ $42\ \text{KHz}$ ・10分間) による分散
- 5) 沈底法による $20\ \mu\text{m}$ 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: $10-5\ \text{g}$) をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は 2.94 (種実重は 1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は 8.40、ヨシ属 (ヨシ) は 6.31、ススキ属 (ススキ) は 1.24、タケ亜科 (ネザサ節) は 0.48 である。

4. 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～3に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、宮崎県内では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) A地点（図1）

桜島3テフラ直下（試料1）から暗褐色粘質土層（試料9）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、水田遺構が検出された桜島3テフラ直下層（試料1、2）では密度が5,100個/g、その下層（試料3）でも6,700個/gと高い値であり、最下位の暗褐色粘質土層（試料8、9）でも3,000個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層では密度が1,500～2,200個/gと比較的低いことから、ここで稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の可能性も考えられる。

2) B地点（図2）

桜島3テフラの上層（試料1）から同テフラ直下層（試料10）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、水田遺構が検出された桜島3テフラ直下層（試料8）では密度が9,600個/g、同テフラ直上層（試料3、4）でも13,400個/gと、かなり高い値であり、その上層（試料1）でも7,500個/gと高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

桜島3テフラ層中には、同テフラ直下の水田層と類似した土壌塊（試料6、7）が多く認められた。同試料について分析を行った結果、イネが5,100～6,400個/gと高い密度で検出された。また、その他の分類群の出現状況もテフラ直下の水田層と類似している。これらのことから、桜島3テフラ層中の土壌塊は、同テフラ直下の水田層が何らかの形で巻き上げられた（天地返しされた）ものと考えられる。遺構検出面や土層断面の状況などから、テフラ堆積後に水田の復旧作業が行われた可能性が考えられる。

3) 桜島3テフラ直下検出面

桜島3テフラ直下の水田検出面から採取されたNo1～No37の37点について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。密度は3,700～11,500個/g（平均6,800個/g）といずれも高い値である。したがって、同検出面では調査区のほぼ全域で稲作が行われていたものと推定される。

(2) イネ苗について

桜島3テフラ直下層から検出されたイネのプラント・オパールの中には、縦長が30 μ m前後と明らかに小型で、形状が未熟なものや縦長に対する横長の比率が大きいものが多く認められた。これは生育段階初期(苗の段階)のイネに特有のものである(能登ほか, 1989, 杉山, 1998)。

水田土壤中に残留するイネのプラント・オパールのうち、イネ苗に由来するものの出現率は通常数%未満とわずかであるが、桜島3テフラ直下では30%前後にも達している。また、イネ苗のプラント・オパールは、桜島3テフラ直下のすべての試料から検出された(表1)。

以上のことから、桜島3テフラ直下の水田面にはイネ苗が生育していたと考えられ、田植え直後の状況であったものと推定される。

(3) 稲粍の生産総量の推定

桜島3テフラ直下の水田遺構について、そこで生産された稲粍の総量を算出した(層厚を10cmと仮定)。その結果、面積10a(1,000 m^2)あたり700kgと算出された。当時の稲粍の年間生産量を面積10aあたり100kgとすると、同層ではおよそ70年間にわたって稲作が営まれていたものと推定される。

ただし、これらの値は収穫が穂刈りで行われ、稲わらがすべて水田内に還元されたと仮定して算出しているため、収穫が株刈りで行われて水田から持ち出された場合は、その割合に応じて修正を行う必要がある。

(4) 堆積環境の推定

上記以外の分類群では、全体的にネザサ節型やメダケ節型などのタケ亜科が多く検出され、ヨシ属やススキ属型なども検出された。また、定量は行わなかったがクスノキ科やマンサク科(イスノキ属)などの樹木(照葉樹)も部分的に検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上の結果から、当時の調査区周辺はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周囲にはネザサ節やメダケ節なども生育していたものと推定される。また、遺跡周辺ではクスノキ科などの照葉樹林も分布していたものと推定される。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、水田遺構が検出された桜島3テフラ(Sz-3, 1471年)直下検出面では、分析を行ったすべての試料からイネが多量に検出され、同遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。桜島3テフラ直下検出面にはイネ苗が生育していたと考えられることから、同水田が埋没された季節は田植え直後の初夏であったものと推定される。

参考文献

杉山真二（1998）イネ苗の植物珪酸体とその応用－水田埋没の季節推定－. 日本文化財科学会第15回大会研究発表要旨集.

能登健・内田憲治・石井克己・杉山真二（1989）古墳時代の陸苗代－群馬県子持村黒井峯・西組遺跡の発掘調査から－. 農耕文化研究振興会. 農耕の技術, 第12号, p.21-47.

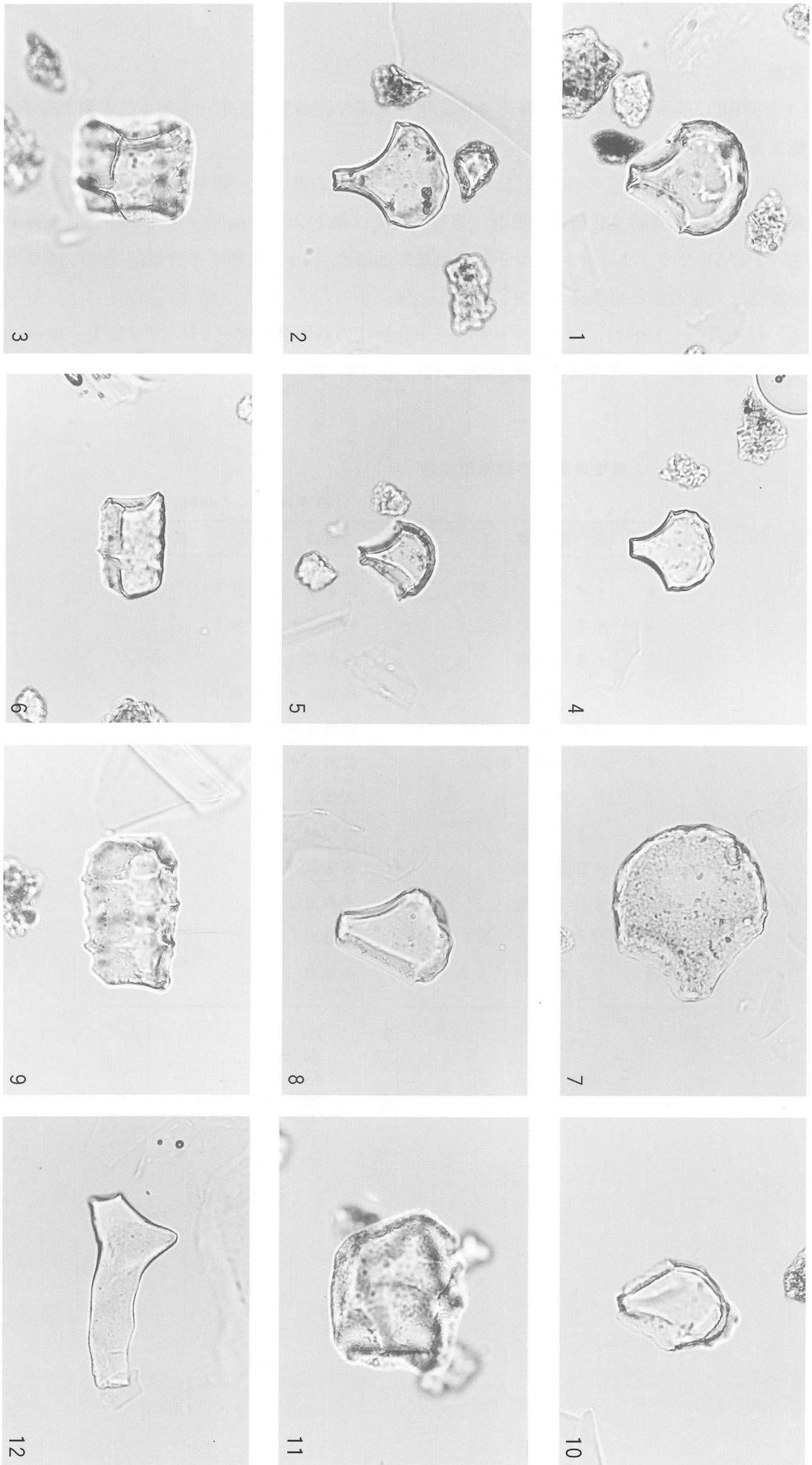
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

植物珪酸体の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	桜島3テフラ直下	10
2	イネ	桜島3テフラ直下	7
3	イネ（側面）	A地点	3
4	イネ（苗）	桜島3テフラ直下	4
5	イネ（苗）	桜島3テフラ直下	4
6	イネ（苗、側面）	桜島3テフラ直下	12
7	ヨシ属	A地点	6
8	ススキ属型	A地点	7
9	ネザサ節型	A地点	2
10	マダケ属型	A地点	7
11	ブナ科（シイ属）	A地点	6
12	マンサク科（イスノキ属）	A地点	7



母智丘谷遺跡 植物珪酸体顯微鏡写真

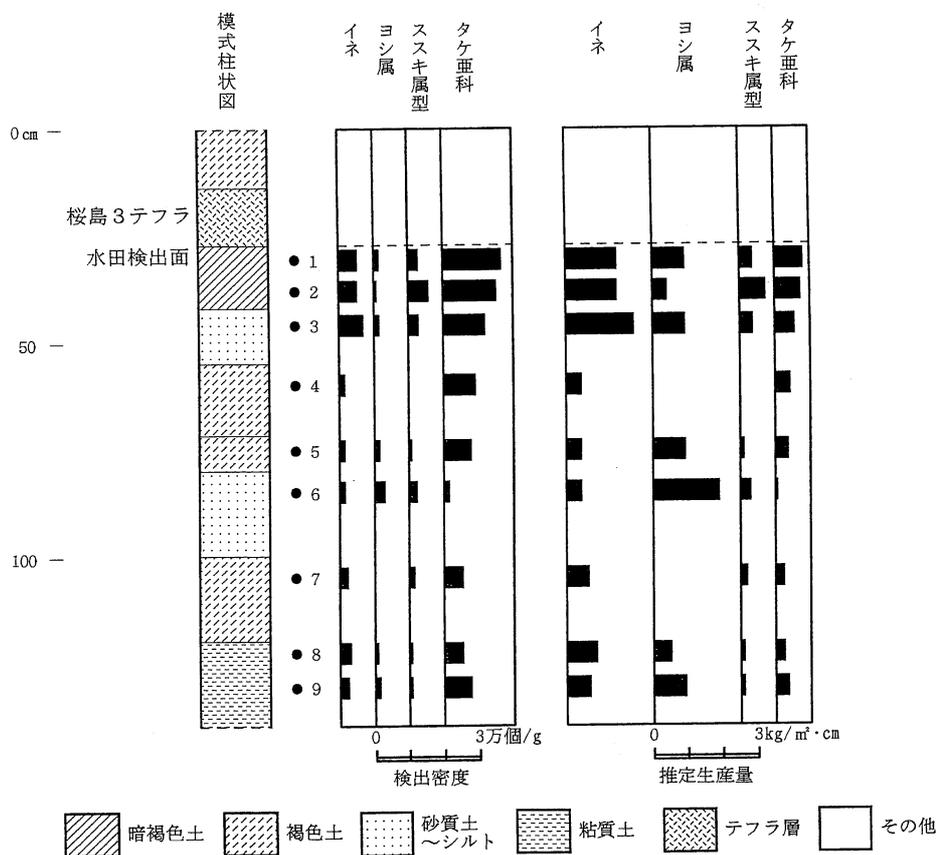


図1 母智丘谷遺跡、A地点におけるプラント・オパール分析結果

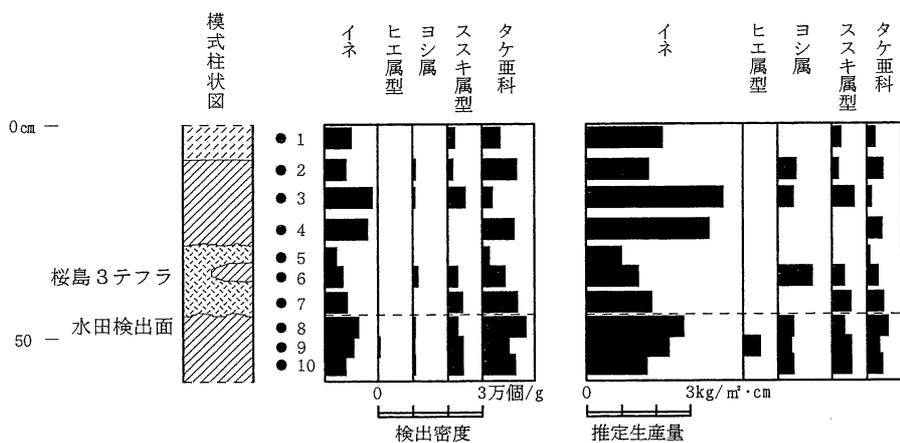


図2 母智丘谷遺跡、B地点におけるプラント・オパール分析結果

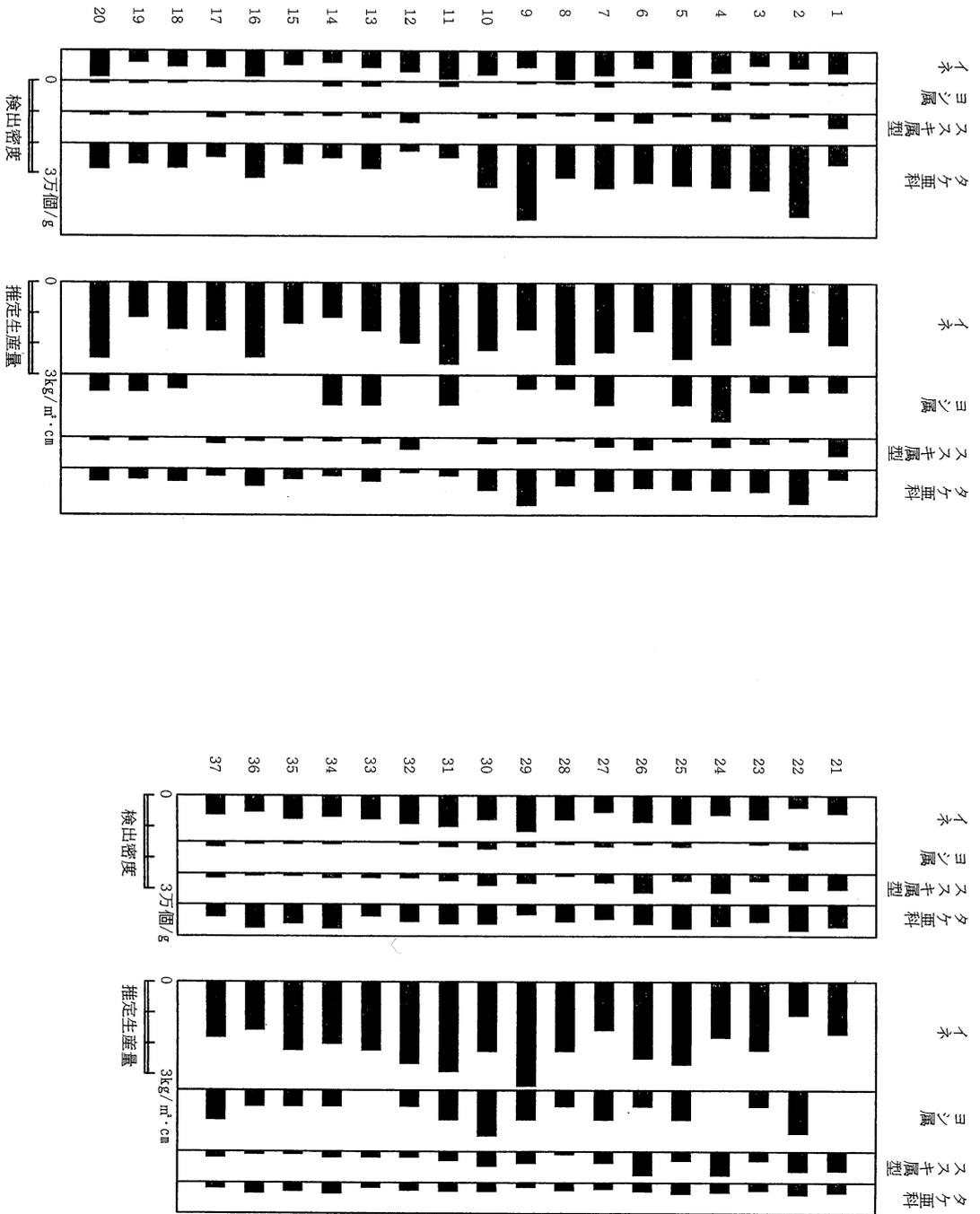


図3 母智丘谷遺跡、桜島3テフラ直下水田検出面におけるプラント・オパール分析結果

表1 宮崎県都城市、母智丘谷遺跡におけるフランチ・オパール分析結果
 検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群\試料	A地点																												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
イネ	51	51	67	15	15	15	22	30	23	68	53	46	68	84	53	77	90	52	75	90	67	53	38	45	83	53	38	84	
ヒエ属型																													
ヨシ属	15	7	15	15	15	30	8	15	8	8	8	8	23	15	15	7	7	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	8
ススキ属型	29	58	30	8	23	15	15	8	8	45	8	15	23	8	30	23	7	15	15	30	15	8	8	8	8	15	8	8	8
タケ草科	168	152	119	90	76	15	52	53	76	68	235	152	143	137	128	146	112	247	143	45	22	83	46	68	113	45	82	68	84
イネ苗の有無	○	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm)	1.50	1.49	1.96	0.44	0.45	0.44	0.66	0.89	0.67	2.00	1.56	1.34	1.99	2.46	1.55	2.26	2.63	1.54	2.21	2.64	1.98	1.56	1.12	1.33	2.43	1.55	1.54	1.11	2.46
イネ																													
ヒエ属型	0.92	0.46	0.94																										
ヨシ属	0.36	0.72	0.37																										
ススキ属型	0.80	0.73	0.57	0.43	0.36	0.07	0.25	0.25	0.37	0.33	1.13	0.73	0.68	0.66	0.61	0.70	0.54	1.19	0.69	0.22	0.11	0.40	0.22	0.33	0.54	0.22	0.39	0.33	0.40
タケ草科																													

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群\試料	B地点																												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	
イネ	75	61	134	121	34	51	64	96	82	59	57	37	75	61	91	84	53	76	115	76	99	90	75	68	75	53	61		
ヒエ属型																													
ヨシ属	8	7																											
ススキ属型	22	15	52																										
タケ草科	52	99	30	91	20	66	100	125	76	95	71	82	53	68	76	61	46	53	31	61	61	53	37	76	60	75	38		
イネ苗の有無	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	2.20	1.79	3.93	3.56	0.99	1.51	1.89	2.82	2.41	1.73	1.68	1.09	2.21	1.78	2.69	2.47	1.57	2.24	3.39	2.22	2.90	2.65	2.20	2.01	2.21	1.55	1.79	
ヒエ属型																												
ヨシ属	0.48	0.47																										
ススキ属型	0.28	0.19	0.64																									
タケ草科	0.25	0.47	0.14	0.44	0.10	0.32	0.48	0.60	0.36	0.46	0.34	0.39	0.25	0.33	0.37	0.29	0.22	0.26	0.15	0.29	0.29	0.25	0.18	0.36	0.29	0.36	0.18	

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

第5節 小 結

母智丘谷遺跡では、基本層序第Ⅸ層から、桜島文明軽石（15世紀後半噴出・母智丘谷遺跡基本層序の第Ⅷ層）に覆われた水田跡が8区画検出された。プラント・オパール分析結果（第4節参照）において、イネのプラント・オパールが第Ⅷ層では13,400個/g・第Ⅸ層では3,700～11,500個/gもの高い数値で検出され、本遺跡において水田稲作が行われていたことを示す結果となった。

検出された水田跡は、調査区域が狭小であったために、面積7～250㎡と、大きさ・形状ともにもばらつきがあった。しかし、ある程度平坦な場所に立地していたためか、後述する畑田遺跡と比べて、比較的大きな方形区画を意識して配置されていたと考えられる。また、検出された全ての水田区画では、平面形態が隅丸方形で、幅25～40cm程度・深さ5～10cm程度の凹凸痕が確認された。この凹凸痕は、直線状もしくは扇状に連続する単位が確認され、鋤や鍬などの農耕具痕跡であると考えられる。この農耕具痕跡は、詳しくは後述の第Ⅳ章―第6節で述べるが、第Ⅷ層の水田耕作痕跡か天地返しなどによる水田復旧痕跡であると考えられる。

	長径 (m)	短径 (m)	面積 (㎡)	長径方位	レベル (m)
水田区画1	15.4	5.3	101	N-32°-W	144.7
水田区画2	5.9	2.7	10	N-2°-W	144.7
水田区画3	7.7	3.4	22	N-3°-W	143.9
水田区画4	10.9	6.1	50	N-2°-W	143.9
水田区画5	10.8	8.5	75	N-19°-W	144.0
水田区画6	31.1	9.1	250	N-10°-W	143.8
水田区画7	4.1	2.7	7	N-38°-W	143.6
水田区画8	5.0	3.3	12	N-43°-E	143.7
	11.36	5.14	65.88	N-8°-W	—

第1表 母智丘谷遺跡 水田区画計測表

	長さ (cm)	幅 (cm)	区 画 水 田	水 口
畦 畔 A	560	45	水田区画1	無
畦 畔 B	315	50～80	水田区画1・水田区画2	有?
畦 畔 C	880	60	水田区画3・水田区画4	有?
畦 畔 D	935	50～60	水田区画5・水田区画6	無
畦 畔 E	480	50	水田区画6・水田区画7	有?
畦 畔 F	580	60～120	水田区画6・水田区画7 水田区画8	無
平 均	628	52.5	—	—

第2表 母智丘谷遺跡 水田畦畔計測表



①母智丘谷遺跡全景（南東より）



①第Ⅷ層上面検出状況



②第Ⅸ層上面検出状況図



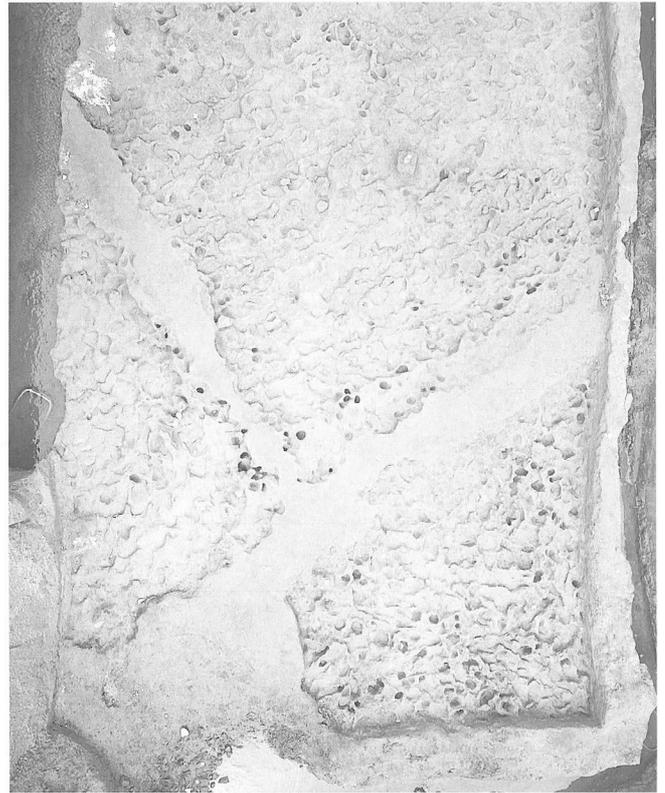
①水田区画1・2検出状況



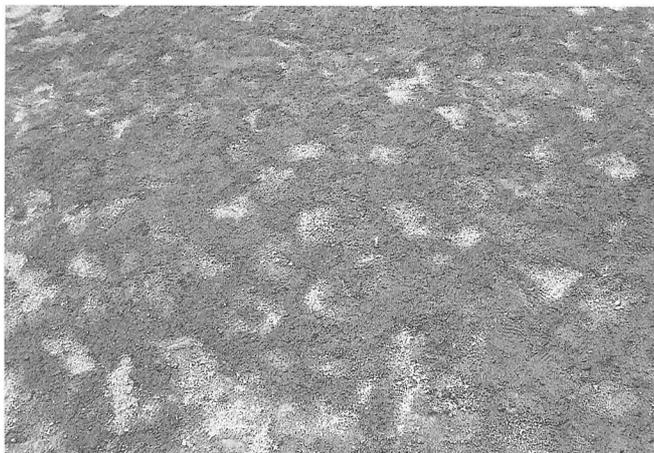
②水田区画1・2完掘状況



③水田区画6～8検出状況



④水田区画6～8完掘状況



①凹凸痕検出状況



②水田区画1と畦畔A検出状況



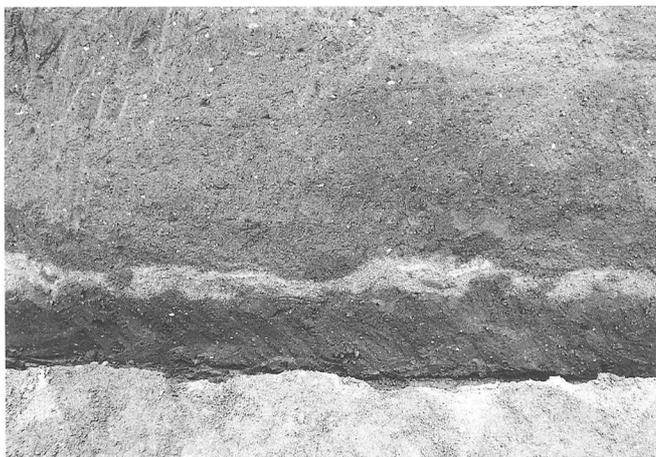
③畦畔B検出状況



④畦畔E・F検出状況



⑤凹凸痕（水田区画6）完掘状況



①土層堆積状況



②並ぶ凹凸痕



③水田区画5・6と畦畔D



④水田区画3・4と畦畔C



⑤畦畔C発掘状況



⑥段差遺構の杭跡

HATADA

畑 田 遺 跡

第IV章 畑田遺跡の調査

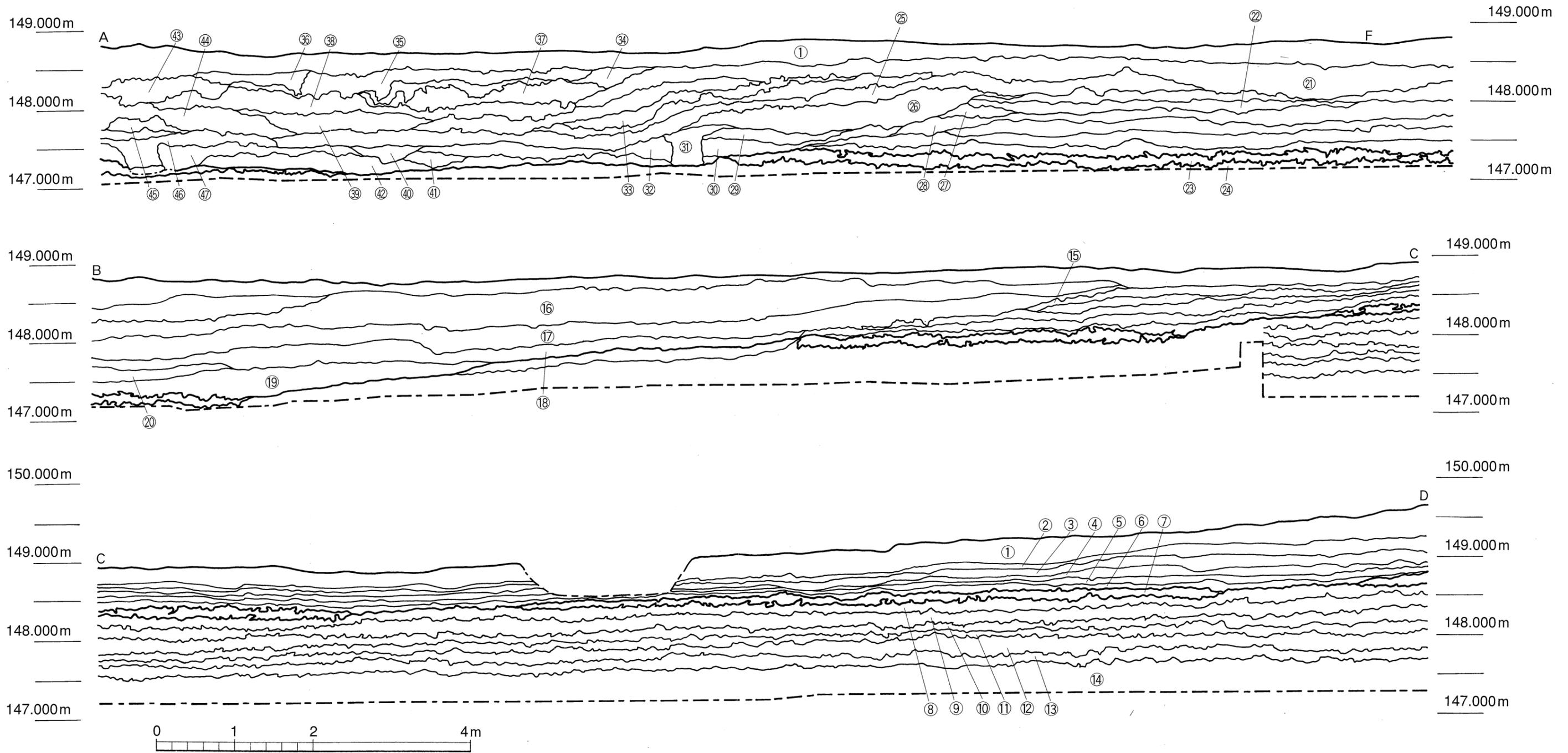
畑田遺跡（第II章－第1図2）は、第III章で記した母智丘谷遺跡（第II章－第1図1）の北側約50m、後谷川と丘陵部（新宮城跡 第II章－第1図9）に挟まれた場所に位置している（第II章－第2図）。同じ後谷川沿いにある母智丘谷遺跡とは、近接する遺跡というよりはむしろ隣接する遺跡であるといえる。詳しい遺跡の位置や周辺地形図などについては、第II章に記載している。

第1節 基本層序（第1図・第2図）

畑田遺跡の基本層序を下記に示した。畑田遺跡の現地形は水平に近いのであるが、下方は河川に向かって緩やかに傾斜していく地形である。第I層はにぶい黄褐色土である。現代の耕作土と考えられる。第II層は暗灰褐色系の堆積土であり、下方には酸化鉄が糸根状で確認される。中世～現代の水田耕作土だと考えられる。第III層は黄灰色土である。桜島文明軽石だと考えられる白色軽石粒を多く含む。第IV層は灰白色軽石粒の堆積層である。桜島文明軽石（15世紀後半噴出）層だと考えられている。本来なら下方に軽石粒、上方に灰質土を堆積する筈であるが、攪拌された状態で確認されている。下部は酸化により著しく赤変している。第V層は黒褐色土であり、灰白色軽石粒を多く含む。上部は激しく凹凸している。第VI層は、褐灰色土であり、班紋状の酸化鉄のブロックや灰白色軽石粒を多く含む。この層の前後から13～14世紀頃の土師器・陶磁器が多く出土した。13～14世紀頃の層であると考えられる。第VII層は、暗褐色土であり、糸根状の酸化鉄を多く含む。第VIII層は黒褐色土であり、第VII層と類似して糸根状の酸化鉄を多く含む。第IX層は黒褐色土であり、きめ細かく軟らかい。第X層は、黒色土であり、きめ細かく軟らかい。

I	第I層 にぶい黄褐色土（Hue 10YR4/3）現代の耕作土
II	第II層 暗灰褐色系土（Hue 10YR3/1～4/1）
III	第III層 黄灰色土（Hue 2.5Y4/1）
IV	第IV層 灰白色軽石粒（Hue N7/ ）桜島文明軽石層
V	第V層 黒褐色土（Hue 10YR3/2）水田跡
VI	第VI層 褐灰色土（Hue 10YR4/1）中世遺物包含層
VII	第VII層 暗褐色土（Hue 10YR3/3）中世遺物包含層
VIII	第VIII層 黒褐色土（Hue 10YR3/2）
IX	第IX層 暗黒褐色土（Hue 2.5Y3/1）
X	第X層 黒色土（Hue 2.5Y2/1）

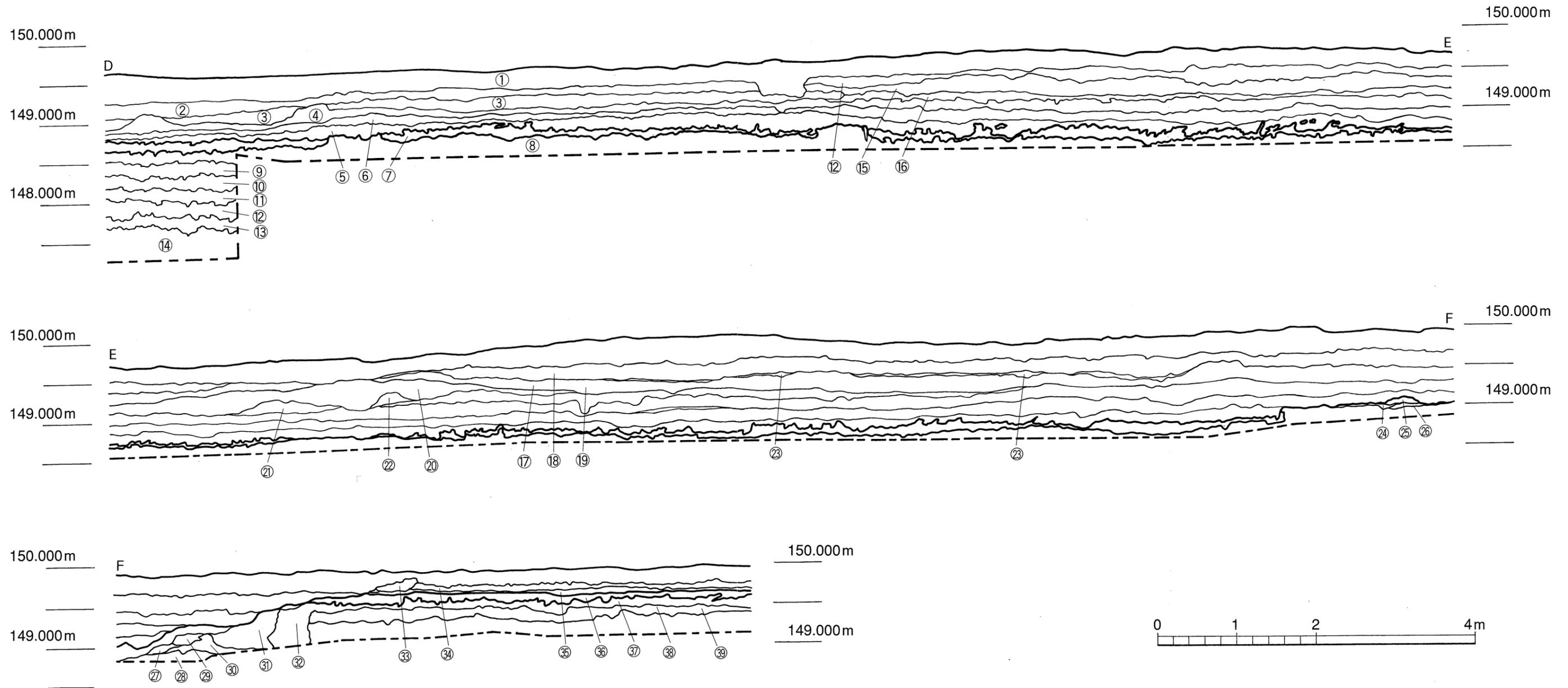
土層概略図



【土層註記 D-G間】

①~⑭は前項の①~⑭と同じ/⑮黒褐色土…径3~4mmの白色軽石粒を多く含む/⑯灰黄褐色土…径3~7mmの白色小礫を多く含む。酸化による変色が認められる/⑰黒褐色土…白色小礫と黄褐色粘質土ブロックを多く含む。酸化による変色が認められる/⑱暗オリーブ褐色土…粘質が強く、酸化粒を含む/⑲黒褐色土…粘質もあるが、⑦層の影響が灰色軽石粒が混じりボロボロする/⑳暗褐色土…比較的粘質あり、径3~5mmの小礫を多く含む/㉑褐灰色土…砂質土と酸化粒を多く含む/㉒黒褐色土…白色軽石粒を多く含む/㉓灰白色軽石層…⑦層と同じ/㉔黒褐色土…⑧層と同じ/㉕黒褐色土…砂質土と黄褐色・白色軽石粒を多く含む/㉖暗褐色土…木片などが混入している攪乱土/㉗黄灰褐色土…径5mm前後の黄褐色粘質土のブロックを多く含む/㉘暗黄灰褐色土…㉗層と似ているが、ブロックの大きさが大きいものが多い/㉙黒褐色土…堅くしまっており、径3~15mmの乳白色軽石粒を多く含む/㉚暗黒褐色土…僅かではあるが、白色・黄褐色小礫を含む/㉛暗灰色土…柔らかい土質で、白色・乳白色・黄色小礫を僅かに含む/㉜暗オリーブ褐色土…⑱層と同じ/㉝灰黄褐色土…土質は堅く、白色軽石粒と酸化粒を含む/㉞灰黒褐色土…径3~5mm程度の白色軽石粒を多く含む/㉟暗灰褐色土…土質は堅く、きめ細かい。白色軽石粒を含む/㊱灰色土…㉝層と基本的に同じであるが、白色軽石粒の含有量が多い/㊲黒褐色土…白色軽石粒を少し含む/㊳暗褐色土…白色・灰色軽石粒を多く含む/㊴褐色土…㉝層と似ているが、白色・灰色軽石粒の含有量が少ない/㊵暗灰色土…粒が細やかで灰質土だと考えられる/㊶黒灰色土…白色軽石粒を多く含む/㊷オリーブ黒色土…粘質があり、径5mm程度の礫を多く含む/㊸暗灰褐色土…㉝層と同じ/㊹暗灰褐色土…白色軽石粒を多量に含む。黒褐色粘質土ブロックを含む/㊺灰黄褐色土…白色軽石粒と酸化粒を少量含む/㊻黒褐色土…攪乱土。径5cm程度の礫を多く含む/㊼暗褐色土…径5mm以下の白色軽石と小礫を少量含む

第1図 畑田遺跡 土層堆積状況図① (1/80)



【土層註記 A-D間】

①にぶい黄褐色土…現在の耕作土。基本層序の第I層/②灰黒褐色土…径1~3mmの白色軽石粒多く含む。基本層序の第II層/③灰褐色土…②層と似ているが、青灰色軽石粒を含む。糸根状酸化が認められる。基本層序の第II層/④褐灰色土…径5~7mm程度の半透明白色粒と小礫を多く含む。糸根状酸化が認められる。基本層序の第II層/⑤黒褐色土…灰色軽石粒(第⑦層),径5~7mm程度の半透明白色粒と青灰色小礫を多く含む。糸根状酸化が認められる。基本層序の第II層/⑥黄灰色土…灰色軽石粒(⑦層)を非常に多く含む。全体にブロック状と糸根状酸化が多く認められる。基本層序の第III層/⑦灰白色軽石層…径1~2mmの灰白色軽石粒(15世紀噴出の桜島文明軽石)と明灰色灰土から構成される。下部は酸化により赤褐色に変色している。基本層序の第IV層/⑧黒褐色土…径1mm前後の灰白色軽石粒(⑦層)と径3~7mm程度の黄褐色粘質土を多く含む。上部は農具痕と考えられる凹凸痕が認められる。基本層序の第V層/⑨褐灰色土…径1~3mmの灰色・乳白色軽石粒を多く含む。酸化粒を多く含み、水田層の可能性ある。基本層序の第VI層/⑩暗褐色土…⑨層と似ているが、含む灰色・乳白色軽石粒が多い。糸根状酸化が認められ、水田層が考えられる。基本層序の第VII層/⑪黒褐色土…径1cm以下の白色・黄色軽石粒を多く含む。酸化鉄粒を多く含み、水田層の可能性ある。基本層序の第VIII層/⑫黒褐色土…小礫・白色軽石粒を多く含む。下部に酸化鉄を多く含み、水田層の可能性ある。基本層序の第VIII層/⑬暗黒褐色土…径5mm前後の黄褐色軽石,径2~3cmの白色・黄褐色軽石粒,径1~2mmの砂粒を含む。基本層序の第IX層/⑭黒色土…やわらかい土質。径1cm未満の黄褐色軽石粒を多く含む。基本層序の第X層/⑮暗褐灰色土…径1cm未満の乳白色軽石粒と灰質土を含む/⑯灰黒褐色土…②層と同じ/⑰灰褐色土…③層と同じ/⑱暗褐灰色土…⑮層と同じ。畦畔らしき高まりが確認できる/⑳黒褐色土…下部に粘土塊と酸化粒を含む/㉑黒褐色土…径1~2cm程度の白色・灰白色軽石・乳白色粒を多く含む/㉒灰黒褐色土…径1~2mmの黄褐色粘質土と砂質土を含む/㉓褐色砂質土…畦畔付近に堆積した砂質土だと考えられる/㉔灰白色軽石層…⑦層と同じ/㉕黒褐色土…やや粘質がある。杭列痕が認められる層である/㉖灰白色軽石層…⑦層と似ているが、灰質土の割合が高い/㉗砂質土混黒褐色土…砂質土と乳白色軽石粒を多く含む/㉘砂質土混暗褐色土…黄褐色の砂質土を多く含む。酸化による変色が認められる/㉙砂質土混黄灰褐色土…灰質土が多量に混入する。酸化による変色が認められる/㉚黒褐色土…きめ細かく粘質に富む/㉛明褐色土…径1cm程度の黄褐色粘質土ブロックを多く含む/㉜黒褐色土…⑪層同様の径1cm程度の黄褐色粘質土ブロックをわずかに含む/㉝黒褐色土…ブロック状に入り込む/㉞灰黒褐色土…②層と同じ/㉟灰褐色土…③層と④層の中間的な層/㊱灰白色軽石層…⑦層と同じ/㊲黒褐色土…⑧層と同じ/㊳黒褐色土…⑨層と同じ/㊴暗褐色土…⑩層と同じ

第2図 畑田遺跡 土層堆積状況図② (1/80)

第2節 調査の経過（第3図）

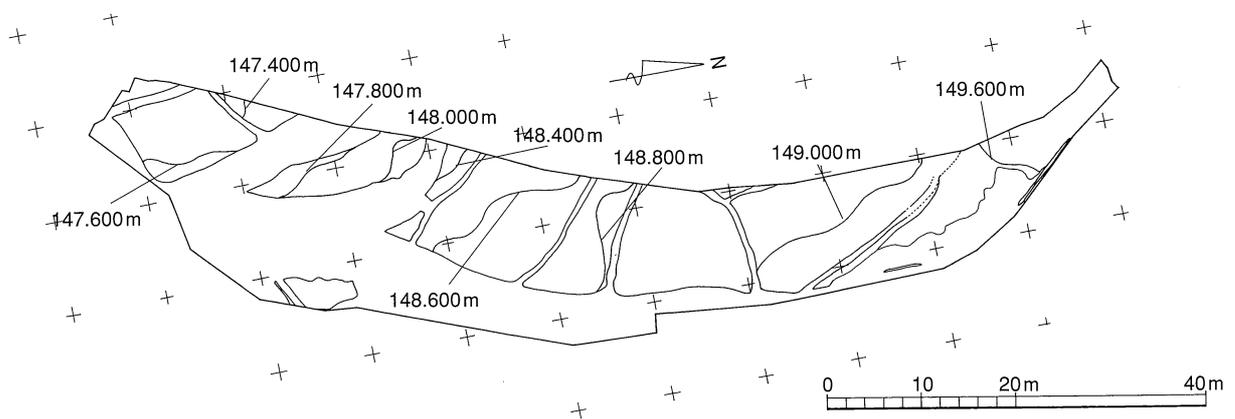
畑田遺跡の調査対象面積は1,550m²である。遺跡は、中世館城跡である新宮城（第I章 第1図-9）の西隣にあたる場所に位置する。15世紀後半噴出と考えられる桜島文明軽石（母智丘谷遺跡の基本層序第Ⅷ層、畑田遺跡の基本層序の第Ⅳ層、通称「白ボラ」「文明ボラ」）に覆われた畦畔が試掘・確認調査時において確認された結果を受けて、表土や近・現代の耕作土である第Ⅰ・Ⅱ層を重機によって除去し、人力によって第Ⅲ層を掘り下げ、第Ⅳ層上面の検出を行った。調査前地形は、最近まで耕地に利用されていたためほぼ水平な状態であった。しかし、第Ⅳ層上面を検出したところ、台地の端部であったことを反映するように、大きく4面の段差をもちながら、横市川に向かって北から南へと緩やかに傾斜していた。

畑田遺跡も低湿地にあり、母智丘谷遺跡同様に常に水が湧く状況にあった。しかし、今回は、母智丘谷遺跡での経験を活かし、調査前から調査区周辺に排水溝を廻らし、最も低い位置に集水桝を設け、センサー付きポンプで水を汲み出すという対策を行っていたために、検出面が水没するという事態は避けられた。

第Ⅳ層上面での検出作業の結果、桜島文明軽石層に覆われていない畔と考えられる数条の帯状の遺構を確認した。この遺構を確認すべく、第Ⅳ層を人力によって除去し、第Ⅴ層の検出を行った。精査の結果、数条の帯状遺構は、水田の畦畔であることが判明した。また、この畦畔に囲まれた区画を数えたところ、最低13区画以上、つまり13面以上の水田面跡が確認された。

第Ⅴ層の水田面調査終了後、第Ⅴ層下の新宮城に隣接する調査区西側の砂質土を掘り下げたところ、多量の中世土師器・陶磁器が出土した。しかし、出土遺物に関する遺構などは確認されなかった。

また、第Ⅴ層下において、植物珪酸体分析の結果（本章第6節参照）多量の植物珪酸体（プラント・オパール）を検出し、水田面の可能性が考えられる第Ⅵ層～第Ⅸ層の調査をおこなったが、畦畔など水田遺構に関するような遺構は確認できなかった。



第3図 畑田遺跡 地形図（第Ⅴ層上面）（1 / 800）

第3節 第V層（中世水田層）の調査（第4図～第10図）

第V層の調査で確認された遺構は水田遺構と小溝状遺構3条である。水田遺構は、明確な10本の畦畔と3カ所の段差によって区画されている状態で確認された（第4図）。確認された水田区画は13枚である。調査の便宜上、13枚の水田区画は「水田区画1」～「水田区画13」、10本の畦畔は「畦畔A」～「畦畔J」、3条の小溝状遺構は「小溝状遺構1」～「小溝状遺構3」、3カ所の段差は「段差1」～「段差3」と呼称するようにした。

調査区の制限もあって、完結した形で確認できた水田区画はない。しかし、検出状況を見るに、水田区画は、主に低地に広がる母智丘谷遺跡（前章参照）と異なり、方形区画を意識しながらも自然の傾斜を最大限に活かして水田区画を行っていると考えられる。

検出された各水田区画は、面積が $3\text{ m}^2\sim 174\text{ m}^2$ （平均 66.69 m^2 ）で、最大幅が $1.0\text{ m}\sim 24.2\text{ m}$ （平均 7.18 m ）である。また、検出された13の水田区画全てに農具痕と考えられる凹凸痕が夥しく拡がっているのが確認できた。なお、ここで各水田区画に用いる「面積」と「最大幅」の単位は、「面積」は畦畔内の面積を、「最大幅」は畦畔と直交する最大の幅のことを指す。

以下、個別の遺構について若干ではあるが記述する。

■水田区画1（第5図）

水田区画1は、南西側を段差1と畦畔Aによって、東側を小溝状遺構1と小溝状遺構2によって区画された水田である。面積は 112 m^2 、水田の最大幅は 8.0 m である。しかし、水田区画1の検出面は、現地表面と近く、後世の連続した耕作によって北東側が攪乱されており、水田区画が明らかではない。

■小溝状遺構1・小溝状遺構2（第5図）

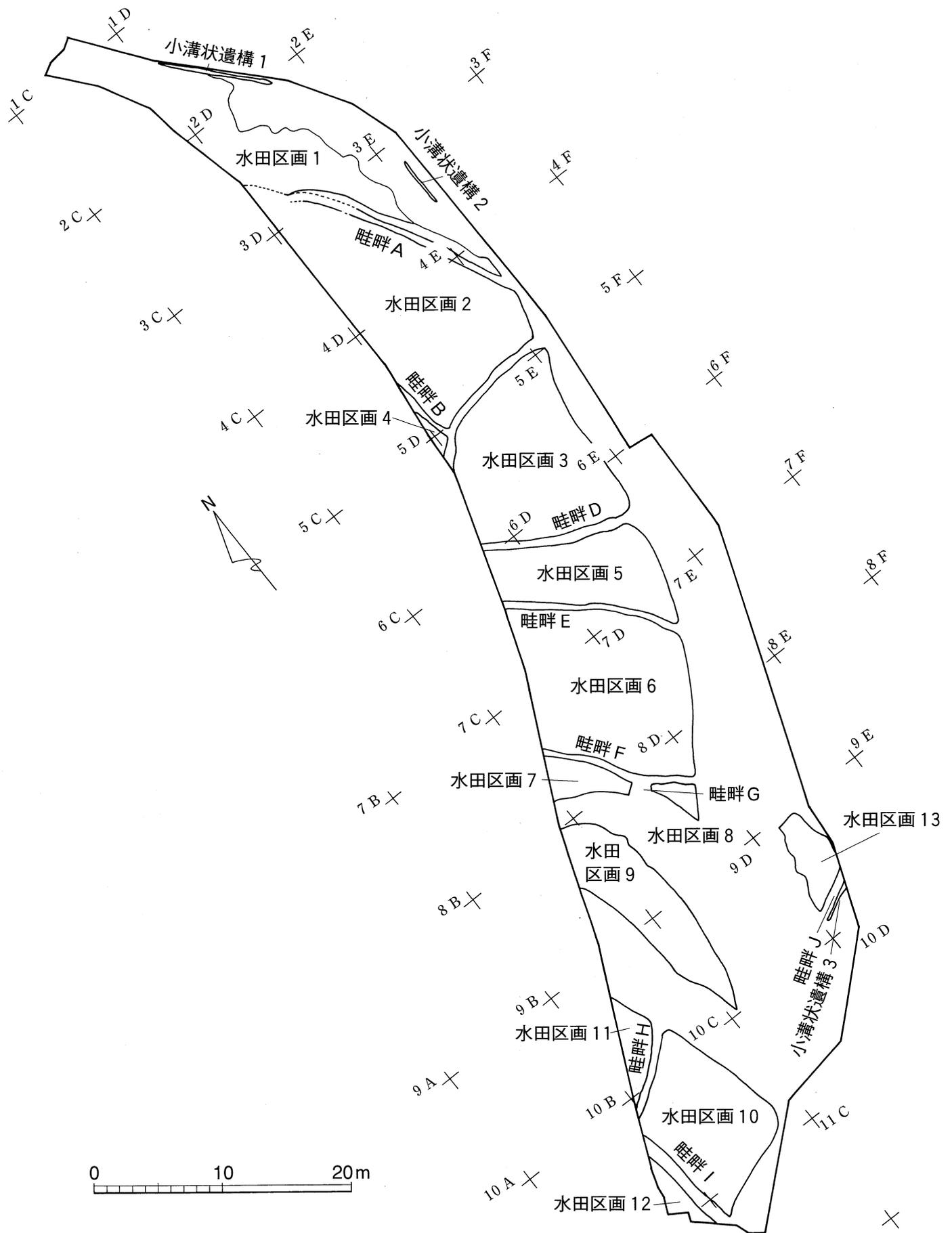
小溝状遺構1は長さ 9.6 m ・幅 25 cm ・深さ 10 cm 未満であり、小溝状遺構2は長さ 3.9 m ・幅 25 cm ・深さ 10 cm 未満である。小溝状遺構1と小溝状遺構2は、水田区画1同様に後世の連続した耕作によって遺構上面が削平されており、遺構の全容は把握できない。しかし、検出状況や規模などを考慮すると、この小溝状遺構は、本来畦畔を伴い1条の溝として水田区画1と無耕作地帯を分けていた可能性が高い。更に、この小溝状遺構は、区画としての役割以外にも、排水施設もしくは段差下の水田区画への導水施設であったとも考えることができる。

■畦畔A・段差1（第5図・第6図）

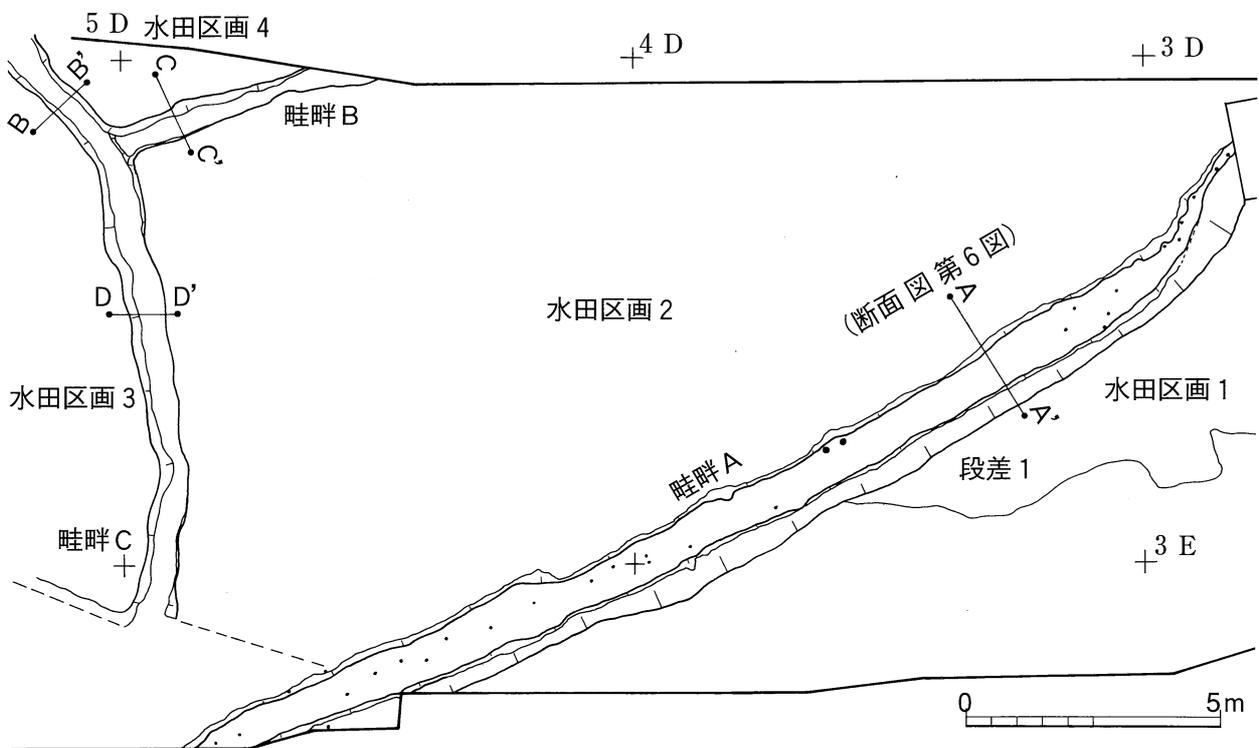
南西側の畦畔Aは、段差1と併せて水田区画1と水田区画2の高低差（水田区画1の方が水田区画2に比べて約 100 cm 高い）を補っている。畦畔Aは、幅 $50\sim 70\text{ cm}$ の小畦畔であるが、段差1の上段側の畦畔北側溝状遺構中に砂質土の堆積があり、畦畔の中に約 $40\text{ cm}\sim 70\text{ cm}$ の間隔で杭跡と考えられる坑列が確認された。この坑列の杭坑は、①Aタイプ…径 $3\sim 5\text{ cm}$ ・深さ $10\sim 20\text{ cm}$ 、②Bタイプ…径 $4\sim 8\text{ cm}$ ・深さ 50 cm 以上、③Cタイプ…径 $10\sim 15\text{ cm}$ ・深さ 20 cm 、と大きく3種類に分類することができる。この杭列は、堆積した砂質土などを考慮に入れると、上段より水田区画2に土が流れ込むのを防ぐために設けられた柵列の跡だと考えられる。

■水田区画2（第5図）

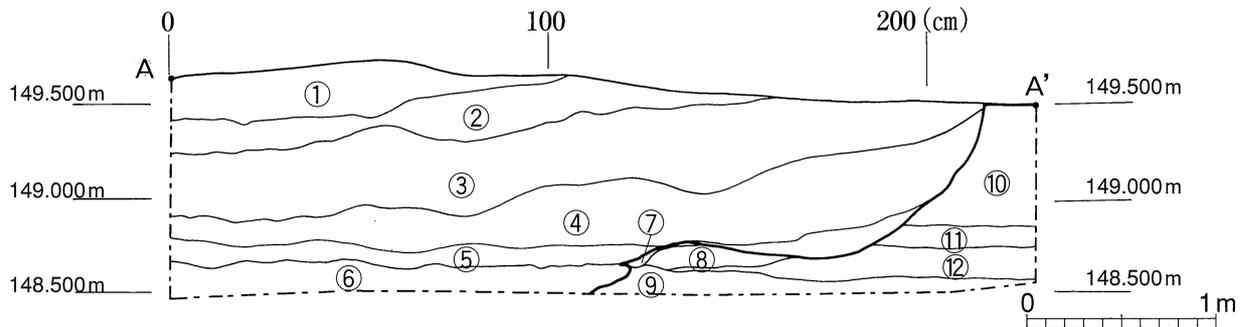
水田区画2は、北東側が調査区外にかかっているが、北東側を畦畔A・南側を畦畔B・西側を畦畔C



第4図 畑田遺跡 第V層遺構検出状況図 (調査区全域) ① (1/400)



第5図 畑田遺跡 第V層遺構検出状況図 (水田区画1～4付近) ② (1/60)



第6図 畑田遺跡 段差遺構1土層堆積状況図 (1/40)

【段差1 土層註記】

①黄灰色土 (1) (Hue 2.5Y5/1) …径2～3mmの白色・青灰色の軽石粒を多く含む。 / ②黄灰色土 (2) (Hue 2.5Y5/1～4/1) …①層と似ているが、少し色調が暗く、白色・青灰色の軽石粒がやや少ない。 / ③黄灰色土 (3) (Hue 2.5Y4/1) …これも①②層と似ているが、比べて色調が暗い。径2～8mmの青灰色・5mm前後の淡黄灰色軽石粒を含む。 / ④黄灰色土 (4) (Hue 4/1～4/2) …①②③層と似ているが、比べて褐色が強い色調である。5mm前後の淡黄色軽石粒を少し含む。 / ⑤暗オリーブ灰褐色土 (Hue 5GY4/1) …多量の灰白色軽石粒と少量の径3～5mmの淡黄色軽石粒を含む。 / ⑥灰白色軽石層 (Hue N7/1～6/1) …桜島文明軽石の堆積層。上部の1～2mm部分のところに酸化による赤変が認められる。 / ⑦暗青灰褐色土 (1) (Hue 7.5YR4/1) …⑤層と似ているが、下部は酸化しておらず、灰白色軽石粒を多く含む。⑤層を攪拌したような土である。 / ⑧暗青灰褐色土 (2) (Hue 2.5Y4/1) …⑤層や⑦層に似ているが、比べて少し褐色が強い色調である。畦畔Aにあたる。 / ⑨青灰褐色土 (Hue 5B5/1) …軽石粒をほとんど含まない。酸化によると考えられる糸根状の斑文がある。 / ⑩橙色・灰白色軽石粒混褐色土 (Hue 7.5YR4/4) …色調が少し異なるが、基本層序の第VI層だと考えられる。かたくしまっている。 / ⑪暗黄褐色土 (Hue 10YR6/4～6/6) …ほんの僅かに径1～2mmの白色軽石粒を含む。砂質が高い。 / ⑫黄褐色土 (Hue 10YR5/8) …径2mm以下の橙色ブロックが主構成。粒子の粗い橙褐色の砂質多く含んでいるために少しボロボロしている。

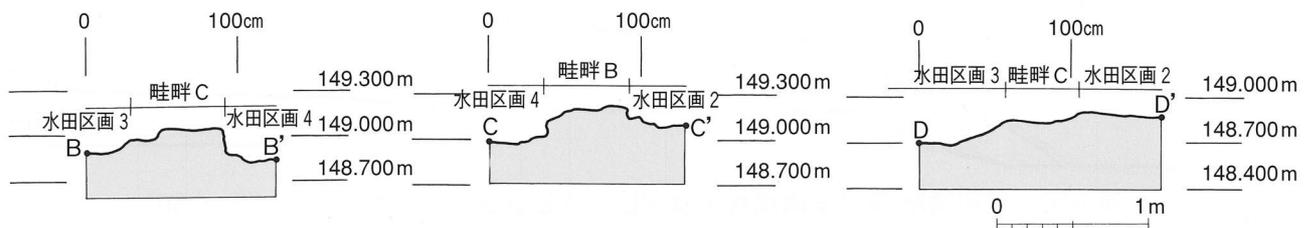
によって区画された水田である。長方形に近い形を呈していたと推察される。面積は174㎡、最大幅は24.2mと検出された水田区画の中で最大規模である。

■畦畔B（第5図・第7図）

畦畔Bは、幅50～60cmの畦畔であり、水田区画2と水田区画4の高低差（約20cm）を補う役割を果たしている。畦畔Cとの接点付近に一部幅30～40cmの低い箇所があり、水口であった可能性が考えられる。

■畦畔C（第5図・第7図）

畦畔Cは、幅60～80cmの畦畔であり、水田区画2と水田区画3の高低差（約15cm）を補う役割を果たしている。畦畔Cの両側にも水田に広がる凹凸痕が確認できるが、北側つまりレベルの高い水田区画2の方は畦畔にまで凹凸痕が残り、南側つまりレベルの低い水田区画4の方は畦畔を外して凹凸痕が入っている。



■水田区画3（第5図・第8図）

水田区画3は、西側が調査区外であるが、北側を畦畔C・南側を畦畔Dで区画されている水田区画である。傾斜面に沿って水田が区画されており、推定形態は扇形に近いと考えられる。面積は132㎡、最大幅は14.2mと比較的大型の水田区画である。

■水田区画4（第5図）

水田区画4は、大部分が調査区外にかかっており、一部のみの検出である。北東側を畦畔B・南東側を畦畔Cによって区画された水田である。面積は27㎡、最大幅は1.0mである。隣接する水田区画とのレベル差は、水田区画2とは約20cm、水田区画3とは約5cmである。

■畦畔D（第8図）

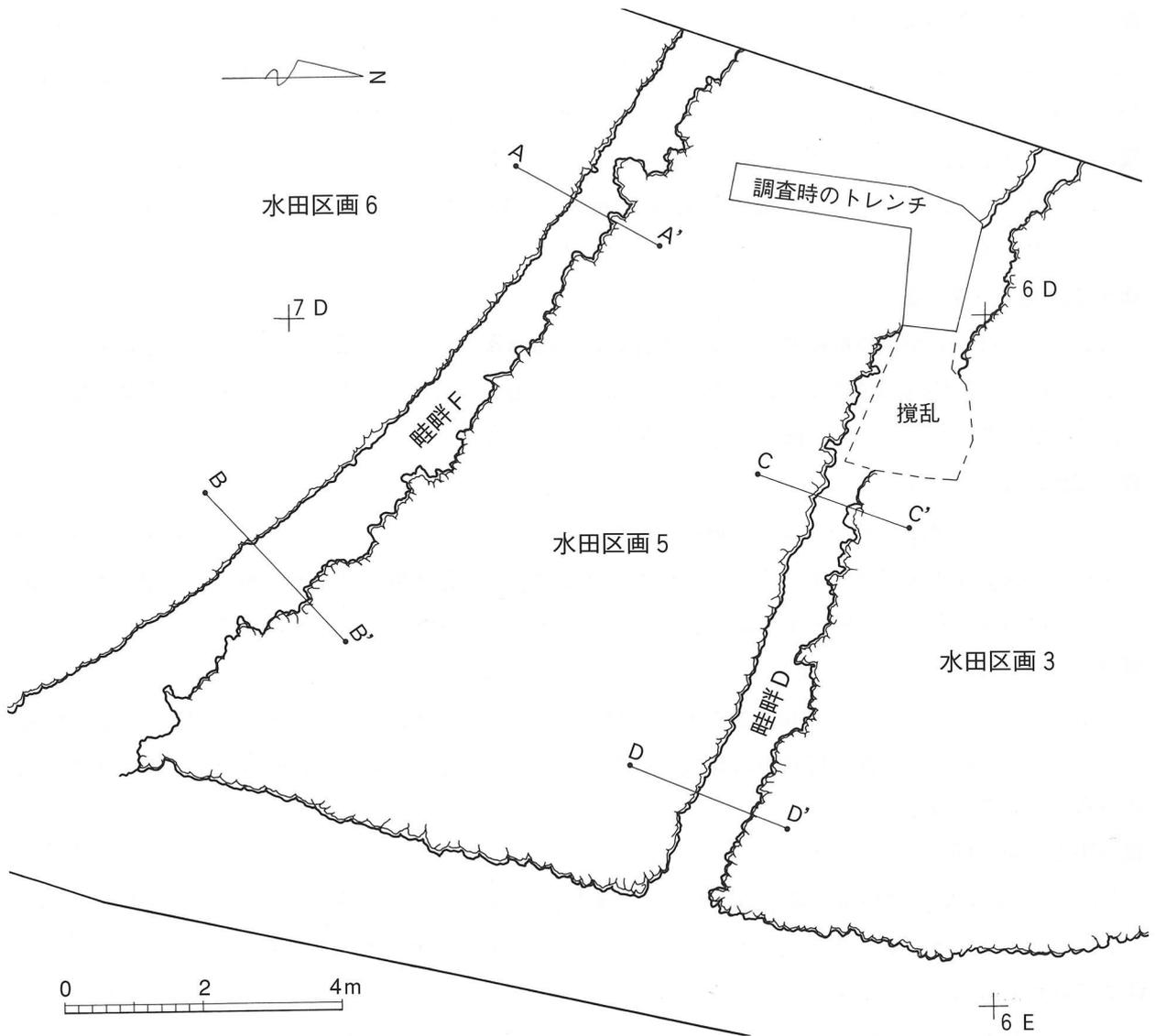
畦畔Dは、幅30～100cm・平均幅70cmであり、水田区画4と水田区画5の高低差（水田区画4の方が約10～15cm高い）を補う役割を果たしている。検出部分では水口だと考えることのできる箇所はなかった。

■水田区画5（第8図）

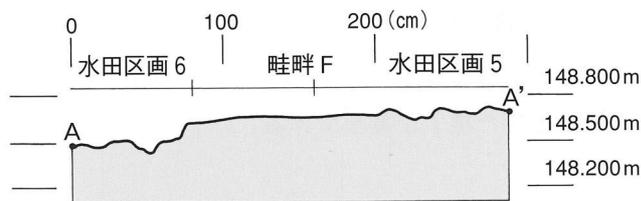
水田区画5は、北東側を畦畔D・南西側を畦畔Eで区画されている水田区画である。面積は67㎡・最大幅6.5mである。検出された形態は長方形に近いが、本来は25～35cmの高低差を補うため、地形に合わせて不定形に区画された水田区画だと考えられる。

■畦畔E（第8図）

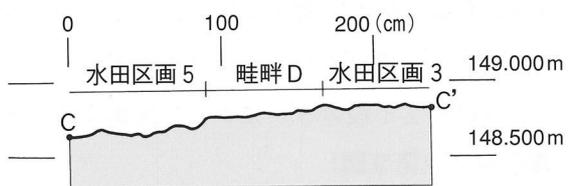
畦畔Eは、幅40～100cm・平均幅80cmのやや太めの畦畔である。水田区画5と水田区画6の高低差（水田区画5の方が約15～20cm高い）を補う。畦畔の東端側幅約50cmのところは他の畦畔の高さより低く、水口部分であったと考えられる。



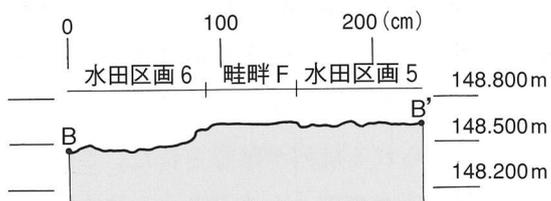
〈畦畔 F A—A' 間断面図〉



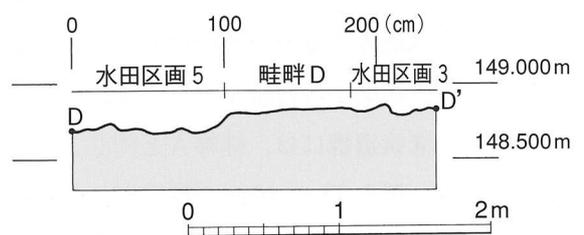
〈畦畔 F C—C' 間断面図〉



〈畦畔 F B—B' 間断面図〉



〈畦畔 F D—D' 間断面図〉



第 8 図 畑田遺跡 第 V 層遺構検出状況図③ (水田区画 3・5・6 付近)

■水田区画 6 (第 8 図・第 9 図)

水田区画 6 は、北東側を畦畔 E・南西側を畦畔 F によって区画されている水田区画である。面積は 150 m²・最大幅は 11.6 m、検出された形状は方形に近いが、本来は長方形に近かったと考えられる。

■畦畔 F (第 9 図)

畦畔 F は、幅 40 ~ 50 cm・平均幅 45 cm のやや細めの畦畔であり、水田区画 6 と水田区画 7・8 の高低差 (水田区画の方が 3 ~ 5 cm 高い) を補う。

■水田区画 7 (第 9 図)

水田区画 7 は、北東側を畦畔 F・南東側を畦畔 G・南側を段差 2 によって区画されている水田区画である。面積は 15 m²・最大幅は 3.4 m で規模は小さいが、調査区外に向かって広がっていく形状であり、完結した形状は比較的大きい区画だと推測できる。

■水田区画 8 (第 9 図)

水田区画 8 は、遺跡で唯一完結した形状で検出された水田区画であり、北東側を畦畔 F・北西側を畦畔 G・南西側を段差 2 によって区画されている。面積は 6 m²・最大幅は 2.7 m と極めて小型の水田区画であり、水田区画上残った場所まで最大限に利用しようとしていた様子が伺える。

■畦畔 G (第 9 図)

畦畔 G は、幅 130 ~ 140 cm・長さ約 100 cm の短い畦畔である。水田区画 7 と水田区画 8 を区切る畦畔であるが、2 つの水田区画に目立った高低差があるわけでもなく、なぜそこに畦畔を築く必要があったのかという疑問が残る。

■段差 2 (第 9 図)

段差 2 は、幅 180 ~ 200 cm、緩やかにカーブを描きながら水田区画 7・8 と水田区画 9 とを区画する。一見、幅の広い畦畔であると考えられることができるが、土層断面を観察すると高まりはなく、北東方向から南西方向に緩やかに傾斜していることより、高低差 (水田区画 7・8 の方が水田区画 9 より約 30 cm 高い) を緩衝するための段差と判断した。

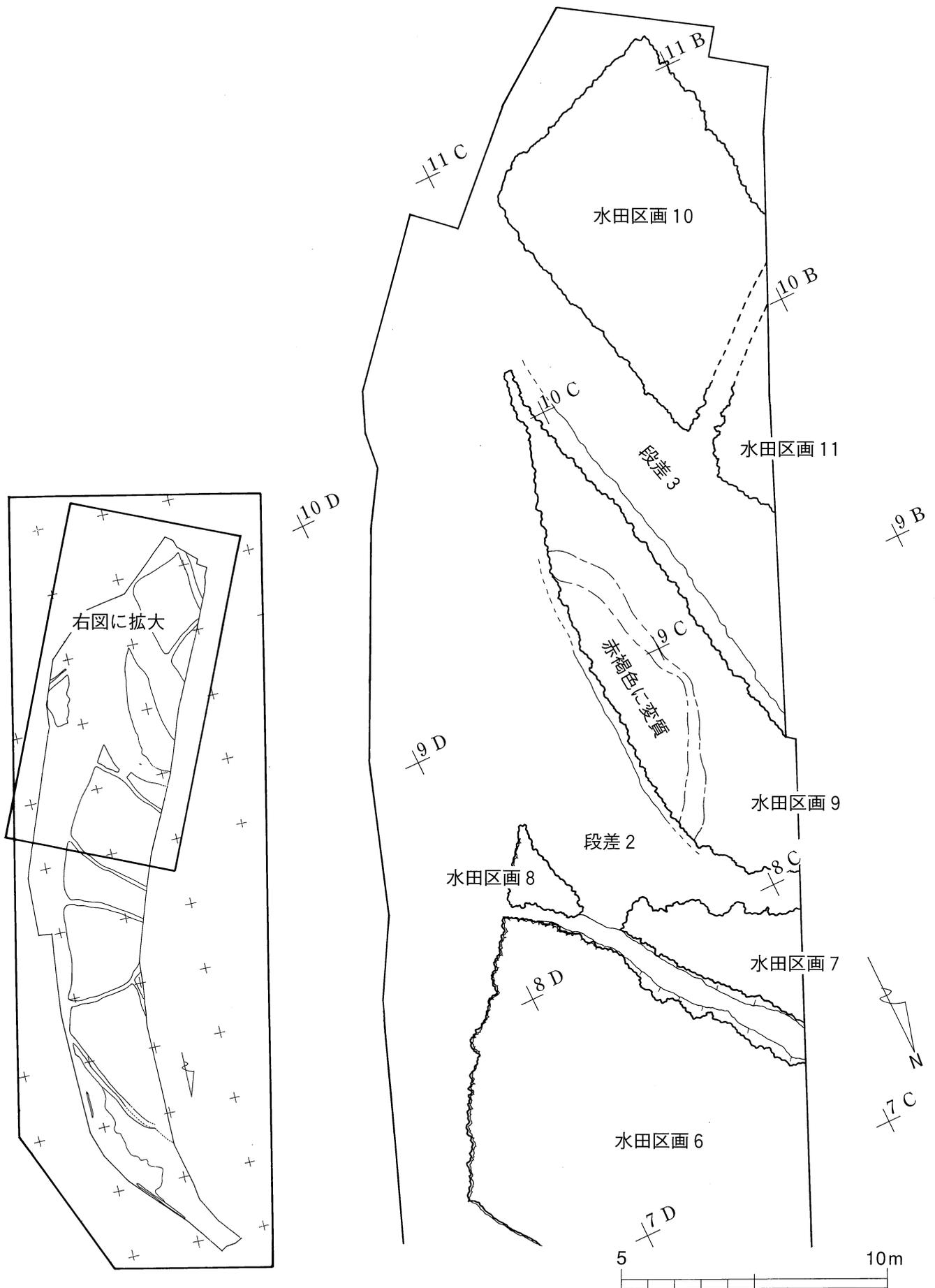
■水田区画 9 (第 9 図)

水田区画 9 は、北東~東側を段差 2・西側を段差 3 により区画されている。面積は 67 m²・最大幅は 4.2 m である。検出された水田区画の形態は半月形に近く、ある程度急な傾斜地であった地形を、2 つの段差 (段差 2 と段差 3) によって区画することで利用してきた様子が推察できる。

■段差 3 (第 9 図)

段差 3 は、幅約 360 cm で、両際に幅 25 ~ 40 cm 程度の小溝状遺構を伴い、水田区画 9 と水田区画 10・11 の高低差 (水田区画の 9 の方が水田区画 10・11 に比べて約 70 cm 高い) を補っている。段差 3 は、段差 2 同様規模の大きい畦畔ともとれるが、検出面は下方に向かって緩やかに傾斜しており、畦畔と考えるよりも高低差を補うための段差であると判断した。ただし、段差とは言え傾斜は緩やかで、直線状に伸びた検出状況から判断すると、通路等として利用していた可能性がある。

東側の小溝状遺構には、畦畔 A と同じように杭坑跡だと考えられる坑列が確認された。この杭列は、径 2 ~ 4 cm・深さ 25 ~ 40 cm の杭坑が、50 ~ 300 cm 間隔 (50 cm の間隔のものが多い) で直線状に並んでいる。この杭列は、畦畔 A と比べて小溝状遺構の中にあるという相違点をもつが、畦畔 A の杭列同様上方の水田区画 (ここでは水田区画 9) から水や土砂等が流れ込むのを防ぐために設けられた柵列の跡



第9図 畑田遺跡 第V層遺構検出状況図④ (水田区画8~11付近)

だと考えられる。

西側の小溝状遺構は、幅25～35cm程度である。平面の検出状況では確認できるのであるが、部分的にしか確認できず、深さなど不明である。東側のように杭列は確認できなかったが、東側の小溝状遺構同様、水や土砂の流入防止のためであったと考えられる。

■水田区画10（第9図）

水田区画10は、北東側を畦畔H・南側を畦畔Iによって区画された水田区画である。調査区には端部がわずかに検出されただけであり、面積は15m²・最大幅は2.6mと小さい。本来は方形に近い形態であったと考えられる。

■畦畔H（第9図）

畦畔Hは、一部試掘調査時のトレンチによって消滅しているが、幅50～60cmで、水田区画10と水田区画11を区画する畦畔である。ただし、水田区画10と11はほぼ同じレベルであり、高低差をもうけていない。

■水田区画11（第9図）

水田区画11は、東側を段差2・北西側を畦畔H・西側を畦畔Iによって区画された水田区画である。一部調査区から外れているが、ほぼ完形に近い形で検出され、面積は89m²・最大幅は8.4mの方形を呈する。

■水田区画12（第9図）

水田区画12は、調査区では端部がわずかに検出されただけであり、東側を畦畔Iで区画された水田区画である。面積は8m²・最大幅は2.1mである。本来どのような形状であったかは不明である。

■畦畔I（第9図）

畦畔Iは、幅70～80cmの比較的太めの畦畔であり、水田区画11と水田区画12の高低差（水田区画11の方が約10cm程度高い）を補う。

■水田区画13（第10図）

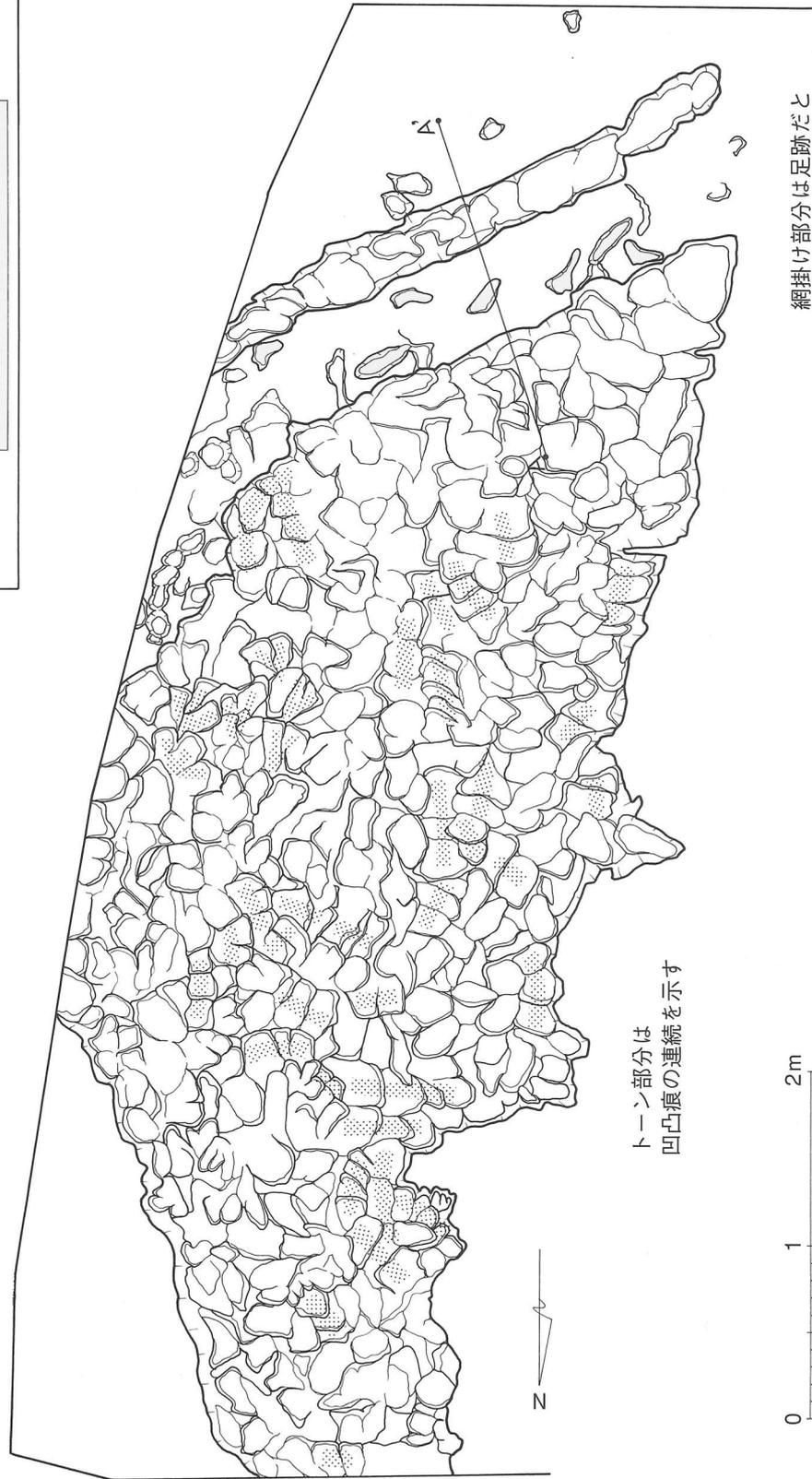
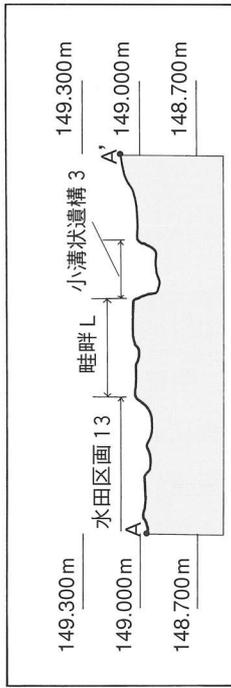
他の水田区画とは離れた地点で確認された水田区画である。他の水田区画は大畦畔の西側にあるのに対して、水田区画13は大畦畔の東側で検出された。検出された場所は他の水田区画と若干違うが、検出された第V層からは、他と同じように、農具痕と考えることのできる凹凸痕を区画一面に確認できた。面積は18m²・最大幅は5.6mで不定矩形を呈しており、小規模ながらも完形に近い形で検出された。南東側に小溝をもつ畦畔J・西側を段差2と段差3によって区画されている。

■畦畔J（第10図）

畦畔Jは、水田区画13と無耕作地帯とを区画する畦畔である。畦畔Jは、幅50～60cmの小畦畔であるが、幅30cm・深さ15cmの小溝を伴う。小溝の底部には、水田区画と同じくらいの大きさ（長さ・幅ともに25～30cm程度）の凹凸痕が溝に沿う形で確認された。この凹凸痕は、小溝が水の作用を受けたというよりも、むしろ掘り返した当時の状態に近いことを示すのではなかろうか。

また、畦畔上には、長さ25～30cm・幅10cm程度の凹痕が確認された。この凹痕は、大きさや形などから考えると、ヒトの足跡である可能性がある。

〈畦畔L A-A' 間断面図〉



第10図 畑田遺跡 第V層遺構検出状況図⑤ (水田区画 13 付近)

第3節 第Ⅵ～Ⅷ層（中世遺物包含層）の調査（第11図～第29図）

第Ⅴ層を掘り下げたところ、第Ⅵ層～第Ⅷ層から水田跡2面と多量の土師器・陶磁器片を検出した。以下に簡単ではあるが若干の記述を記す。

1. 遺構

■水田面（第11図・第12図）

第Ⅴ層調査後、下層確認のために6ラインから10ラインまでの約200㎡の第Ⅴ層以下の掘り下げを行った（第11図）。第Ⅵ層と第Ⅷ層からは、多数の土師器・陶磁器が検出されたが、明確な遺構は検出されなかった。しかし、土層断面を精査したところ、僅かではあるが6ラインの断面において畦畔らしき高まりが確認できた（第12図上段）。また、第Ⅵ層と第Ⅷ層は、掘り下げ前に実施した植物珪酸体分析の結果においてイネのプラント・オパールが多量に検出され（第6節参照）、水田耕作の可能性が強く指摘された層である。ただ、第Ⅵ層と第Ⅷ層は、長年の連続した耕作によるためか均等に攪乱され水平に近い堆積をしており、水田区画の検出は困難であった。これらを総合的に考えると、第Ⅵ層と第Ⅷ層は、平面的に水田区画を確認できなかったが、水田跡であると考えられる。

2. 遺物（第13図～第29図）

ここでは、第Ⅵ層～第Ⅷ層から出土した遺物を若干ではあるが、記述する。なお、遺物の詳細については後に記してある観察表を参照していただきたい。

(1) 土師器（第13図～第22図）

土師器片は全部で177点出土した。器種構成は坏と皿（小皿）からなる。内訳は、坏113点・小皿6点である。その他破片も含めれば相当な数になりそうである。

出土した土師器の調整方法は、風化や砂粒の付着の著しいものを除けば、いずれも内外面とも回転ナデを施している。また、底部の切り離し方法は、確認できるもの（風化や砂粒の付着の著しいものを除く）の殆どが回転糸切りである。また、底部面には、板状圧痕（スノコ痕）が確認できるものが多い。

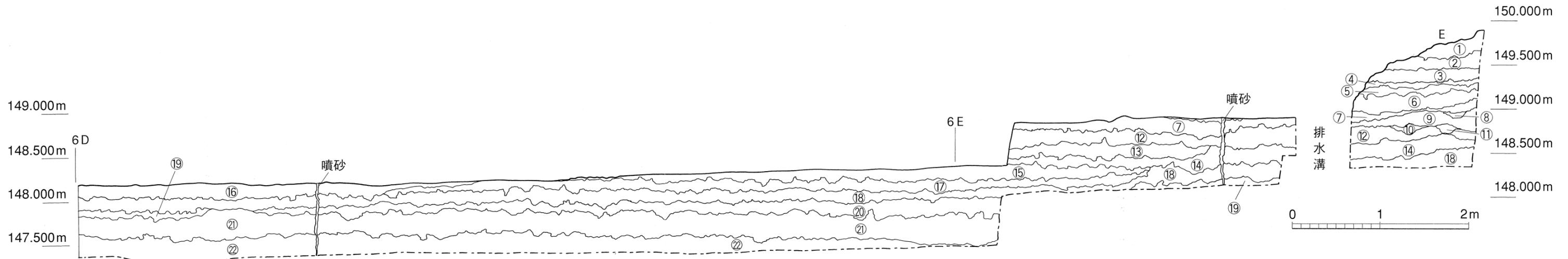
■坏（第13図～第19図—1～113）

器形から大きく8種類の大分類（坏Ⅰ～坏Ⅷ類）の設定を行い、更に組み合わせとして切り離し技法（A～D類）や底部の板状圧痕の有無（a・b類）による小分類を設定した。この3つの分類の組み合わせによって、例えば、坏Ⅰ類の器形をもち・細目の糸で切り離しを行い・板状圧痕なしの坏は、「坏ⅠA b類」と分類される。

（器形による分類）

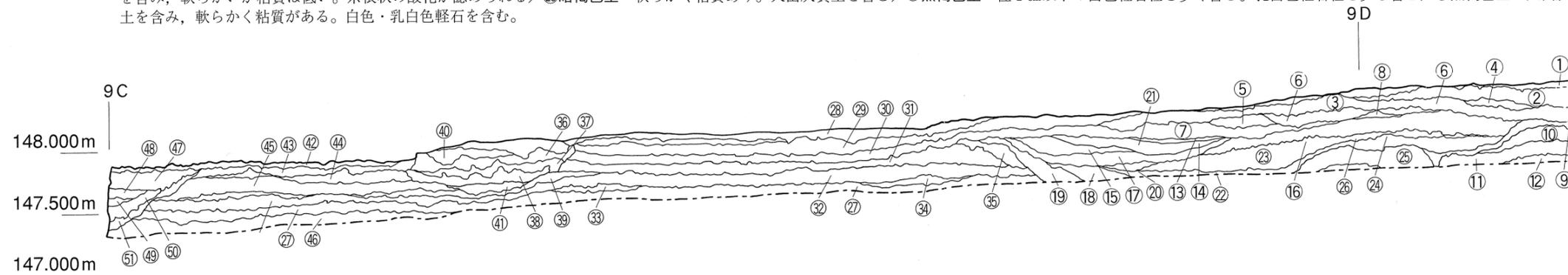
坏Ⅰ類（第13図—1～4）

体部は、わずかに内湾するが、ほぼ直線的に開きながら立ち上がる。底部と体部の境界は、明瞭であり、約60°と比較的急な立ち上がりを形成する。口径11.2～12.5cm（平均11.9cm）・底径6.5～8.0cm（平均7.4cm）・器高3.7～4.1cm（平均3.9cm）・口径/底径の値58～64%（平均62%）で小型である。内外器面ともに調整痕跡の単位が明瞭でなく、この点は坏Ⅱ類と似ているが、その他他型式



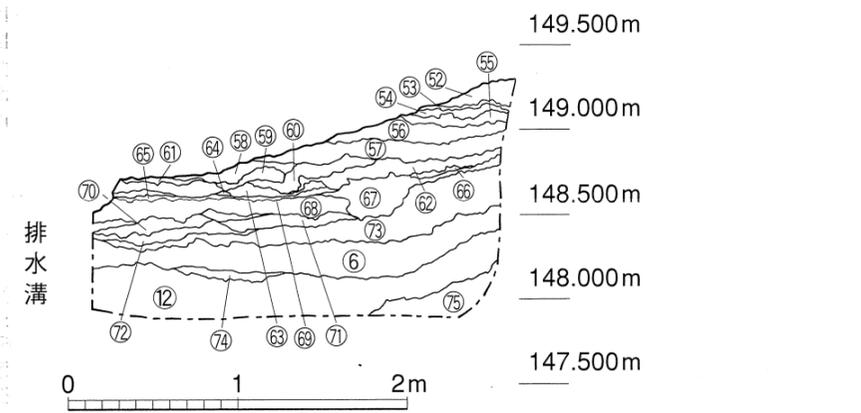
【土層註記 6ライン】

①灰黄褐色土…径1cm以下の白色軽石を非常に多く含む。酸化による変色が認められる／②明灰黄褐色土…径1～3cmの白色軽石を含む。酸化による変色が認められる／③灰黄褐色土…少量の砂粒を含む。糸根状の酸化が認められる／④にぶい橙色土…小礫を含む／⑤黒褐色土…軟らかい、小礫を少し含む／⑥灰褐色土…炭化物を少量含む／⑦黒褐色土…黄褐色粘質土・乳白色小礫を含む／⑧褐色礫層…径1cm程度の小礫を主構成／⑨黄灰色土…白色軽石を少し含む。酸化による変色が認められる／⑩褐色土…砂粒と径1cm前後の小礫を多く含む／⑪灰黄褐色砂質土…白色軽石を少量含む／⑫褐灰色土…火山灰質土と小礫を含む／⑬灰黄褐色土…軟らかく、小礫を含む／⑭褐灰色土…火山灰質土を含みきめ細かい。糸根状の酸化が認められる／⑮褐灰色土…白色軽石を多く含む。下層に行くほど土粒が細くなる／⑯暗褐灰色土…白色軽石を多く含む。⑮層と似ており、下層に行くほど土粒が細くなる／⑰黒褐色土…軟らかい土質で、火山灰質土と砂質土のラミナ状堆積が部分的に認められる／⑱褐灰色土…軟らかく粘質あり。火山灰質土を含む／⑲黒褐色土…径1mm程の砂粒を含み、軟らかいが粘質は低い。糸根状の酸化が認められる／⑳暗褐色土…軟らかく粘質あり。火山灰質土を含む／㉑黒褐色土…径1cm以下の白色軽石粒を多く含む。乳白色軽石粒を少し含む／㉒黒褐色土…火山灰質土を含み、軟らかく粘質がある。白色・乳白色軽石を含む。

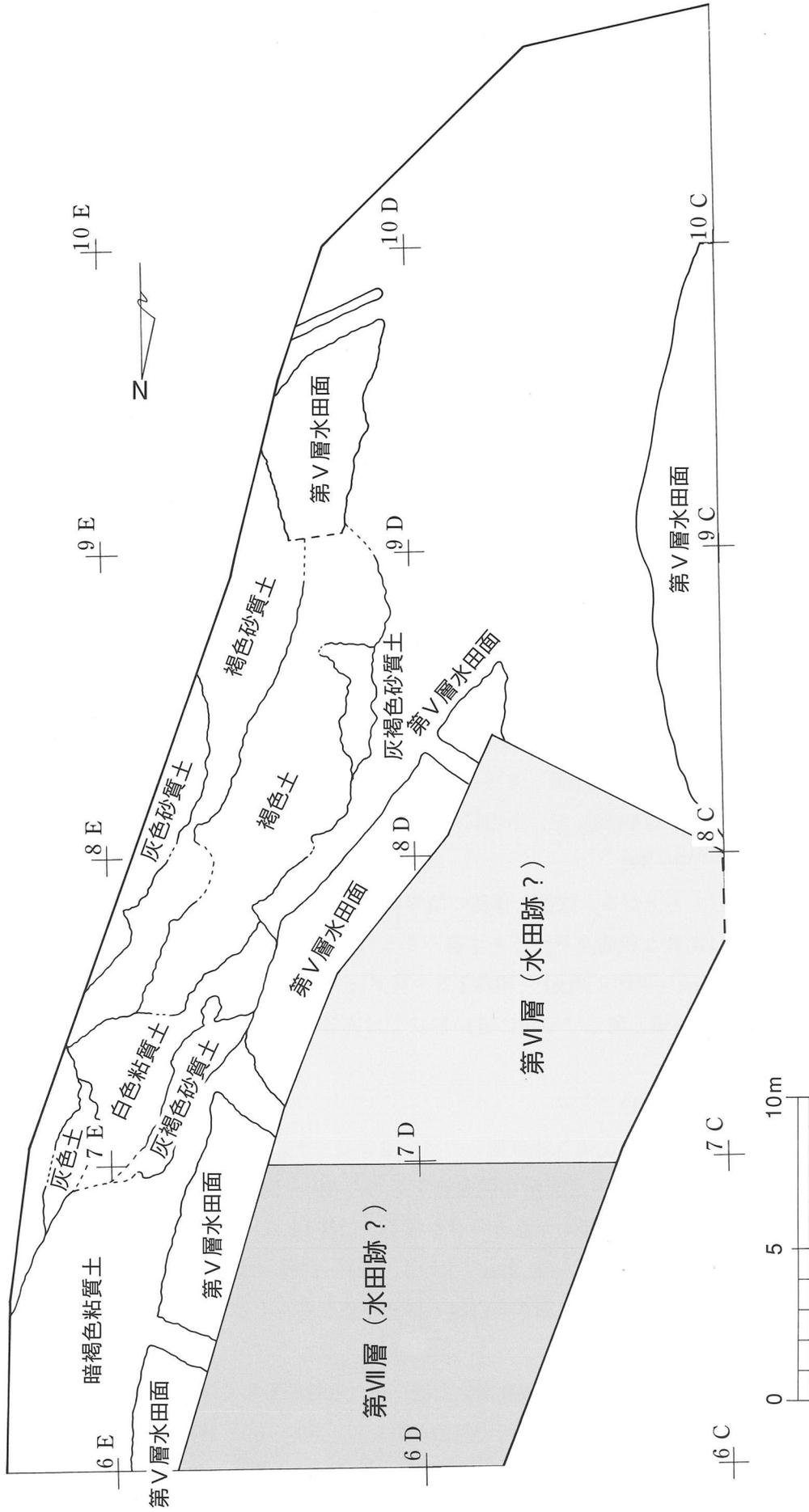


【土層註記 9ライン】

①黄褐色砂質土混灰色土…火山灰質土を多く含む／②黄褐色砂質土…白色・乳白色軽石粒を含む／③黄褐色砂質土…径2～3mmの橙色土のブロックを含む／④灰色砂質土…部分的にラミナ状堆積が認められる／⑤黄褐色砂質土…粗い砂質土より構成される／⑥暗灰褐色砂質土…細かい砂質土より構成される／⑦明灰褐色砂質土…白色と灰色の砂粒より構成される／⑧明橙褐色砂質土…白色・灰色・橙褐色の砂粒より構成される／⑨灰白褐色火山灰質土…二次堆積の入戸火砕流に由来するものと考えられる／⑩暗灰黄褐色砂質土…わずかに灰白色火山灰質土のブロックを含む／⑪暗灰黄褐色砂質土…含有物を含まない／⑫明灰褐色火山灰質土…含有物を含まない／⑬黄灰褐色砂質土…橙褐色と灰色の砂粒より構成される。ラミナ状堆積が認められる／⑭暗灰色粘質土…薄くラミナ状堆積が認められる。部分的に酸化が認められる／⑮明灰褐色砂質土…明灰色の砂粒が主構成土。径1cm未満の白色・褐色土ブロックを多く含む／⑯暗褐色砂質土…⑮層と似ているが含有物を含まない／⑰灰色粘質土…粘質強く、酸化粒を多く含む／⑱明灰色火山灰土…僅かに径3mm以下の乳白色軽石粒を含む／⑲橙褐色砂質土…含有物を含まない／⑳褐色砂質土…含有物を含まない／㉑黒色土…含有物を含まない／㉒明灰色火山灰土…粘質ややあり／㉓明黄灰褐色土…径1～3mmの白色・褐色土ブロックを含む／㉔暗黄灰褐色土…径1～3mmの白色・褐色土ブロックを多く含む／㉕黄灰色土…火山灰質土をわずかに含む／㉖明灰褐色土…わずかに径1～3mmの橙色軽石粒を含む／㉗黒灰褐色土…火山灰質土が主構成。青灰色軽石粒を多く含む／㉘灰褐色土…層上部に糸根状の酸化が認められる／㉙暗灰褐色土…部分的に酸化による変色が認められる／㉚暗灰褐色土…径2～3mm程度の軽石粒や砂粒を多く含む／㉛黒灰褐色砂質土…径5mm前後の乳白色軽石粒を含む／㉜暗灰褐色土…径1～2cmの大粒の白色軽石粒を含む。斑文状の酸化が認められる／㉝赤褐色砂質土…白色・黒色砂粒と径1cm前後の小礫で構成される／㉞褐色砂質土…白色砂粒と小礫により構成される／㉟褐色土…白色・乳白色の軽石粒を多く含む。糸根状の酸化が認められる／㊱灰褐色土…径1～3mmの青灰軽石粒と径1mm程度の橙色軽石粒を含む／㊲赤褐色砂質土…酸化のためか主構成土は褐色砂質土である／㊳灰色土…火山灰質土が主構成／㊴暗灰色土…火山灰質土をわずかに含む／㊵暗褐灰色土…白色・乳白色の軽石粒を含む／㊶黒灰色土…火山灰質土と砂質土を主構成とする／㊷赤褐色砂質土…水田遺構の層／㊸黒灰褐色火山灰質土…わずかに径2～5mm程度の白色軽石粒を含む／㊹暗灰褐色火山灰質土…火山灰質土の粒子が粗い／㊺黒灰褐色火山灰質土…わずかに径2～5mm程度の白色軽石粒を含む／㊻黒褐色土…含有物なく軟らかい／㊼暗灰褐色土…径1cm未満の乳白色軽石粒を多く含む。わずかに斑文状の酸化が認められる／㊽褐灰色土…白色・乳白色の軽石粒を含む／㊾暗褐灰色土…白色・乳白色の軽石粒を含む／㊿灰褐色土…砂粒を多く含む。白色・乳白色の軽石粒を含む／㊱赤褐色土…著しく酸化による赤褐色化が認められる／㊲黒褐色土…径2～5mmの小礫を含む／㊳暗赤褐色土…径2～4mmの小礫を含む／㊴灰黄褐色土…黄褐色軽石粒を含む／㊵黄灰褐色土…砂粒を含み、軟らかい／㊶黄灰褐色土…黄褐色軽石粒を含む。酸化による変色が認められる／㊷褐灰色土…白色軽石粒を多く含む／㊸にぶい黄褐色土…白色・黒色・無色透明粒を含む／㊹にぶい黄褐色土…径5mm程度の黄褐色軽石粒を含む／㊺黄褐色土…軟らかく粘質もある／㊻にぶい黄褐色土…細かい砂粒より構成される／㊼灰黄褐色土…礫を少し含む／㊽明褐色砂質土…褐色の細かい砂粒を主構成とする／㊾褐色土…ラミナ状の堆積が認められる／㊿褐灰色土…酸化が部分的に認められる／㊱褐色土…径7mm以下の小礫を含む／㊲明褐色土…下部に酸化による赤変が認められる／㊳暗灰黄色土…砂礫や大小の礫を含む／㊴暗褐色砂質土…わずかに黒褐色土が混入する／㊵暗褐色土…粘質土ブロックと白色軽石粒を多く含む／㊶暗褐色土…細かく粘質のある土／㊷暗褐色土…径3cm以下の赤褐色礫を多く含む／㊸暗褐色土…砂粒を多く含む／㊹褐灰色土…シルト質／㊺灰黄褐色砂質土…粒子の細かい砂質土を主構成とする



第11図 畑田遺跡 土層堆積状況図③ (1 / 40)



第12図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層遺構検出状況図 (1 / 200)

と共通する点が認められない。ある程度独立した型式である。

坏II類 (第13図—5～8)

体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。底部と体部の境界は、明瞭な屈曲点をつくらず、口縁部から底部中心部にかけて全体的に緩やかなカーブを描く。口径12.4～14.2cm (平均13.2cm)・底径7.0～8.3cm (平均7.8cm)・器高3.6～4.1cm (平均4.0cm)・口径/底径の値55～62% (平均59%) である。底部の平坦面が少ないのが特徴である。

坏III類 (第13図—9～13)

体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。底部と体部の境界は、明瞭であり、45～55° 程度の立ち上がり形成する。口径13.0～14.0cm (平均13.3cm)・底径7.9～9.6cm (平均8.6cm)・器高3.1～3.8cm (平均3.6cm)・口径/底径の値61～69% (平均65%) で、器高が低く底径が大きいのが特徴である。

坏IV類 (第13・14図—14～19)

体部は直線的に立ち上がる。底部と体部の境界は、明瞭であり、50° 前後の角度で立ち上がり形成する。口径14.0～15.4cm (平均14.4cm)・底径8.1～9.8cm (平均8.9cm)・器高3.9～4.3cm (平均4.1cm)・口径/底径の値58～64% (平均61%) で、口径・底径・器高がいずれも大きいのが特徴である。

坏V類 (第14図—20～28)

体部は直線的もしくはわずかに内湾して立ち上がる。底部と体部の境界は、外面は明瞭であり50～55° 程度の立ち上がり形成するが、内面は明瞭な屈曲点をつくらず緩やかなカーブを描く。口径11.7～13.8cm (平均12.5cm)・底径7.6～8.8cm (平均8.0cm)・器高3.7～4.4cm (平均3.9cm)・口径/底径の値61～67% (平均64%) で、平均に近い形状であるが、若干口径が小さいのが特徴である。

坏VI類 (第14・15図—29～39)

体部は内湾しながら立ち上がる。底部と体部の境界は、外面は明瞭であり50～60° 程度の立ち上がり形成するが、内面は明瞭な屈曲点をつくらず緩やかなカーブを描く。口径12.2～13.7cm (平均13.0cm)・底径7.2～8.5cm (平均8.0cm)・器高3.8～4.8cm (平均4.1cm)・口径/底径の値58～66% (平均63%) で、坏VI類と同じで平均に近い形状ではあるが、若干高い器高と体部の急な立ち上がりが特徴である。

坏VII類 (第15・16図—40～51)

体部は、一度直線的に135～150° 程度開いた後、更に緩やかに内湾しながら立ち上がる。底部と体部の境界付近の外面は、明瞭な1～2カ所の屈曲点を持ち、50～55° 程度の立ち上がり形成する。内面は、明瞭な屈曲点をもたず、緩やかなカーブを描く。口径11.6～13.0cm (平均12.5cm)・底径7.3～9.0cm (平均8.1cm)・器高3.4～4.2cm (平均3.9cm)・口径/底径の値60～69% (平均65%) で、平均に近い形状ではあるが、若干小さい口径と体部の急な立ち上がりが特徴である。

坏VIII類 (第15・16図—40～51)

体部は、一度外反気味に135～155° 程度開いた後、更に直線的もしくは僅かに外反して立ち上がる。底部と体部の境界付近の外面は、明瞭な2カ所の屈曲点を持ち、50～60° 程度の立ち上がり形成する。内面は、明瞭な屈曲点をもたず、緩やかなカーブを描く。口径11.6～12.5cm (平均12.0cm)・底径

7.2～8.2cm（平均7.8cm）・器高3.6～4.1cm（平均3.8cm）・口径／底径の値61～70%（平均65%）で、平均に近い形状ではあるが、坏Ⅶ類以上に小さい口径と体部の急な立ち上がりが特徴である。

墨書土器…52は墨書土器である。体部外面3カ所に描かれている。はっきりと何が描かれているのか不明であるが、右の2つは見方によっては人の顔と手のようにもとれる。

坏Ⅸ類（第16・17図58～67）

体部は一度開いた後、内湾しながら立ち上がる。底部と体部の境界の外面は、坏Ⅶ・Ⅷ類のように1～2カ所の屈曲点をもつと考えられるが、明瞭ではなく凹凸面となっている。内面は、明瞭な屈曲点をつくらず、緩やかなカーブを描く。口径11.0～13.0cm（平均12.0cm）・底径8.0～9.2cm（平均8.6cm）・器高3.4～4.6cm（平均3.9cm）・口径／底径の値66～76%（平均72%）で、小さい口径・底径と体部の急な立ち上がりが特徴である。

坏Ⅹ類（第17図68～69）

体部は鋭く内湾しながら立ち上がる。底部と体部の境界は、内外面ともに明瞭な屈曲点をもたず、カーブを描きながら60°前後の角度で立ち上がる。口径11.4～12.9cm（平均12.2cm）・底径9.0～10.1cm（平均9.6cm）・器高3.6～4.1cm（平均3.9cm）・口径／底径の値78～79%（平均79%）で、丸みのある体部と急な立ち上がりが特徴である。

坏Ⅺ類（第17・18図—70～80）

体部の大部分は欠損しており不明。底部と体部の境界付近の外表面は、外反せずに45～55°程度の立ち上がりを形成する。内面は緩やかなカーブを描く。底部は平坦に近い。坏Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類の底部であると考えられる。

坏Ⅻ類（第18図—81～96）

体部の大部分は欠損しており不明。底部と体部の境界付近は、外面が外反気味に開きながら、40～50°程度の立ち上がりを形成する。内面は緩やかなカーブを描く。底部は中心に向かって凹状に窪む。坏Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類の底部であると考えられる。

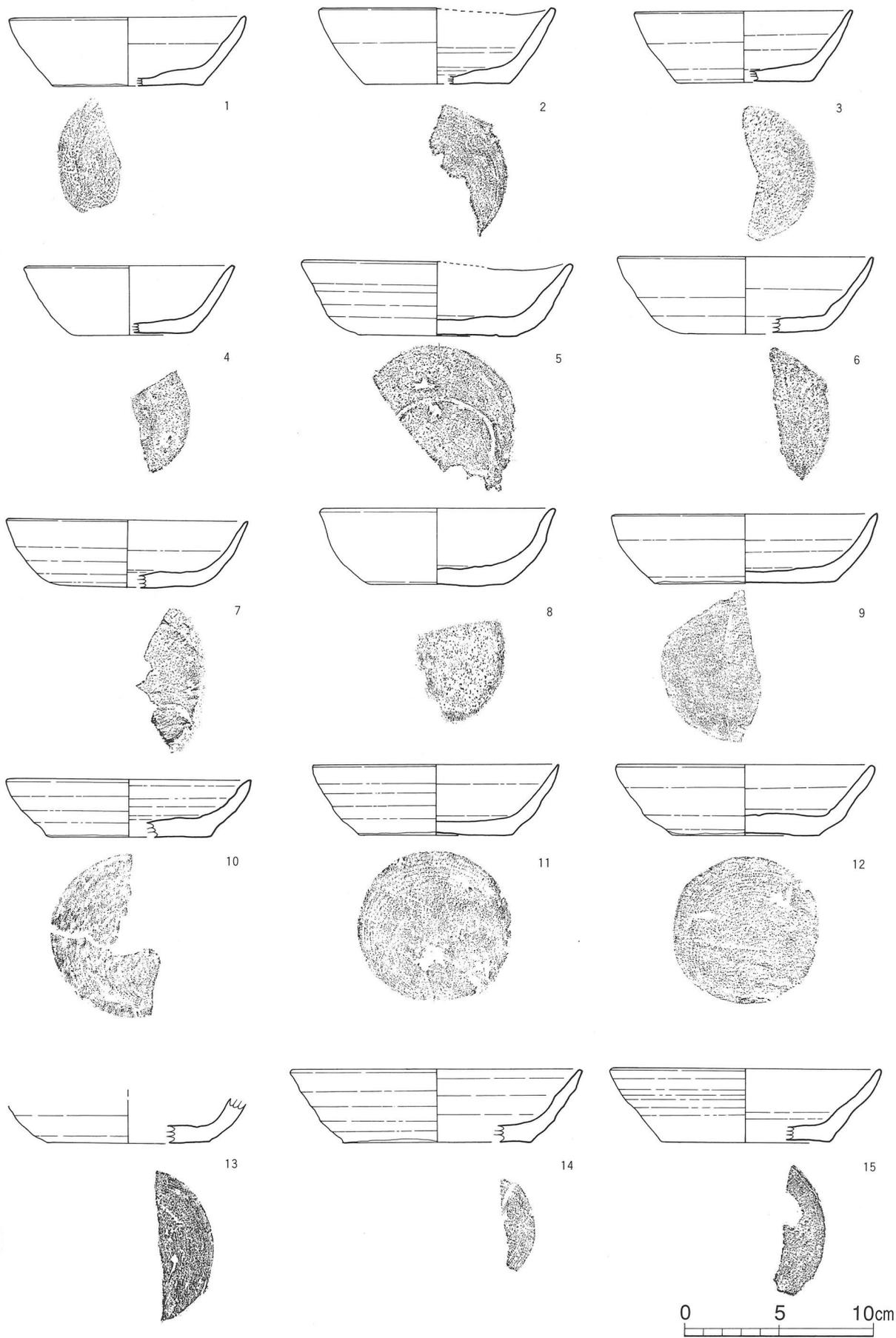
坏Ⅼ類（第18・19図—97～108）

体部の大部分は欠損しており不明。底部から体部にかけて約140～150°の角度で外反気味に大きく開く。底部は中心に向かって凹状に窪む。坏Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ類の底部であると考えられる。

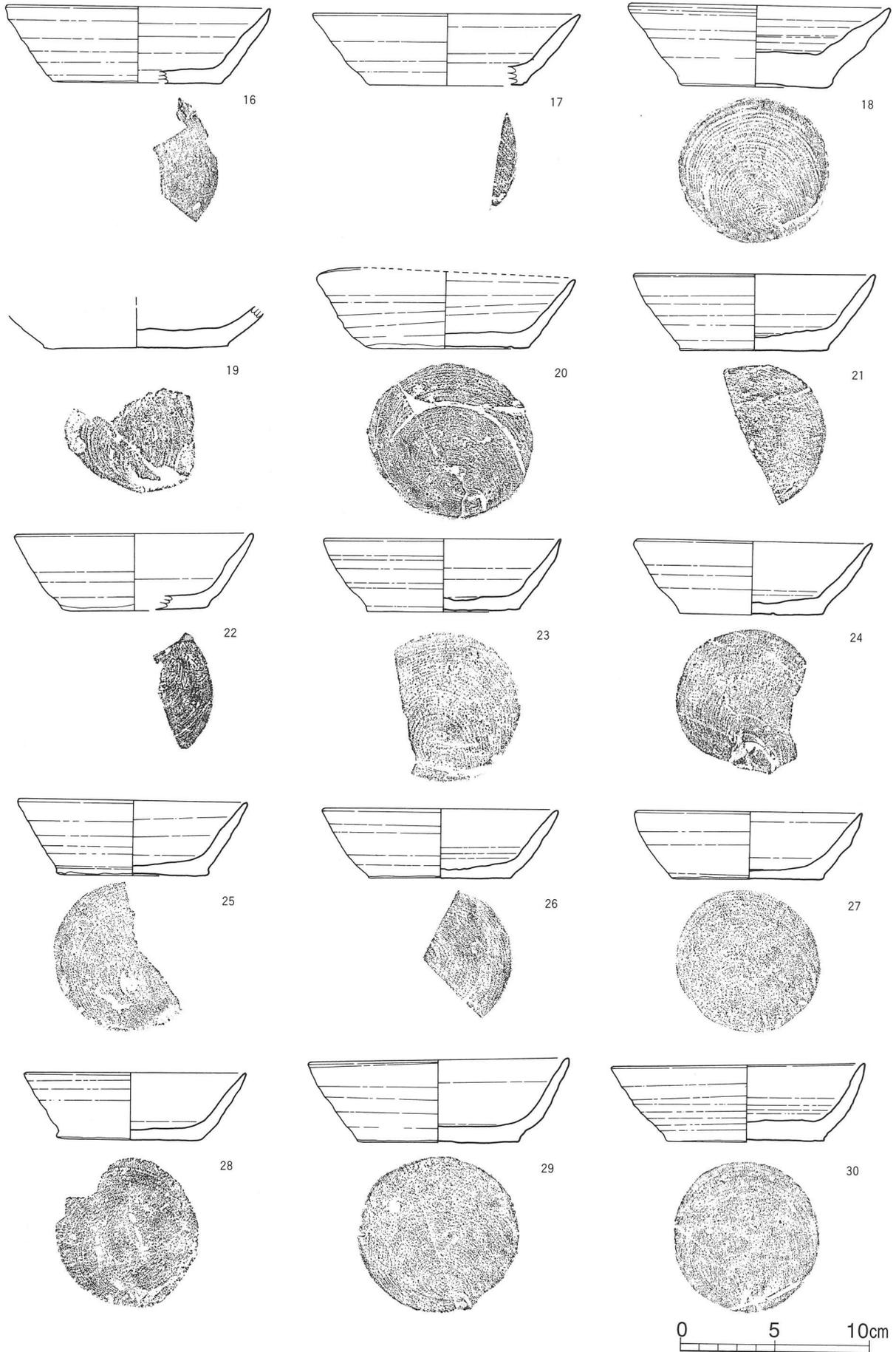
穿孔のある土器…97・98は、底部のみであり、底部中央に径5～6mm程の円孔が内外両面から穿たれている。2点とも若干風化しており細部の観察に限界があるが、底部を加工して土製円盤状に仕上げているようである。破損した土師器坏の底部を別用途の何かに転用した可能性がある。

坏Ⅽ類（第19図—109～113）

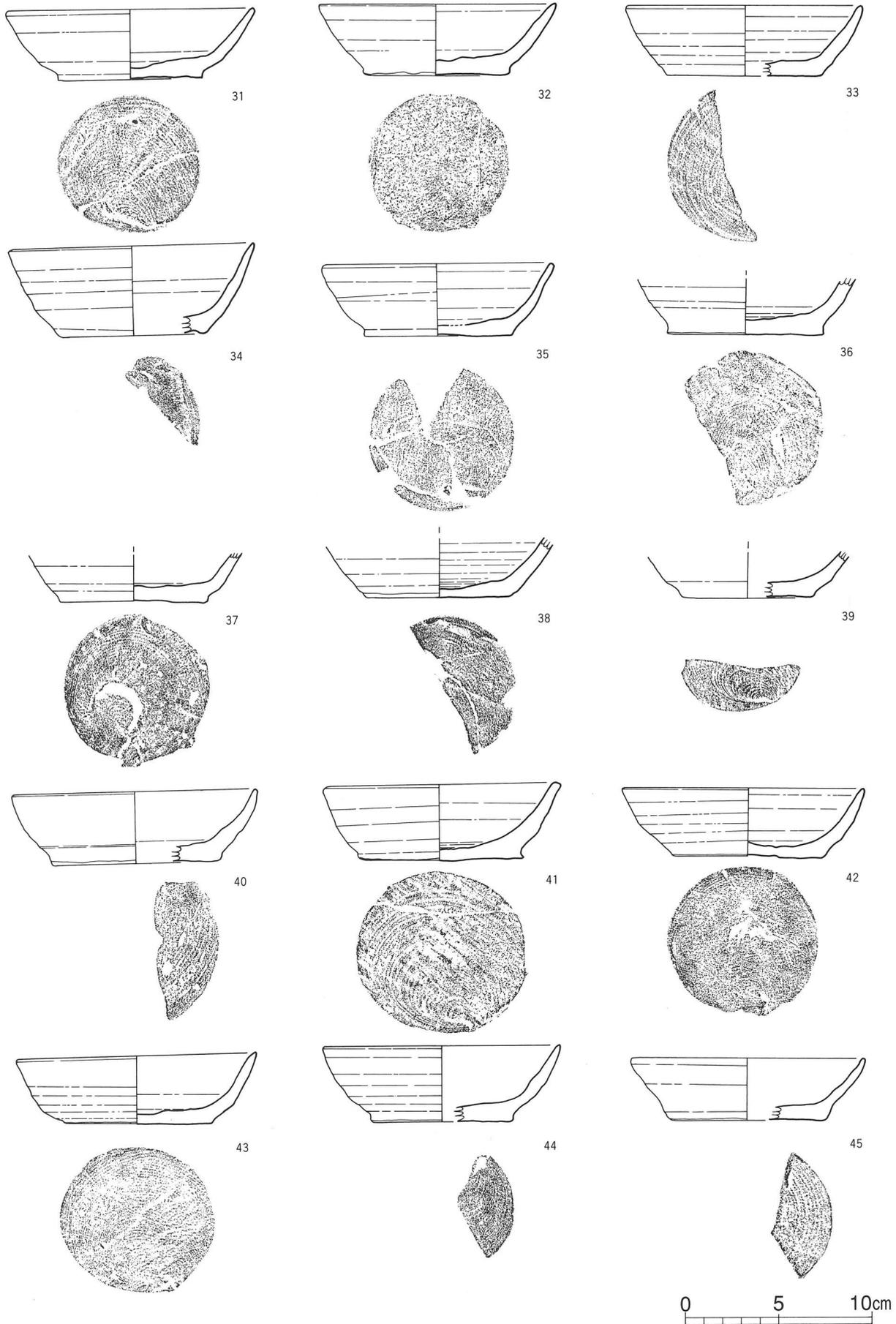
形態分類が困難なものを一括して扱う。いずれも体部の大部分は欠損しており不明。他の坏と異なり底径が6.0～6.6cmと小さい。109は、底径が6.6cmと比較的小さく、底部が1cmと他の坏と比べて厚い。椀の高台を連想させるような底部である。110と111は、底部が凹レンズ状になっており、床の接地面積が小さい。椀の形態に近いといえる。さらに110は、内黒土器であり、内面が一面黒色で直角に近い羽状にミガキを施している。9世紀～10世紀頃の土器で、他の土師器よりも時期が遡ると考えられる。112と113は、底径が5.5と5.8cmと小さく、器壁も薄く、他の坏よりも小型であると考えられる。



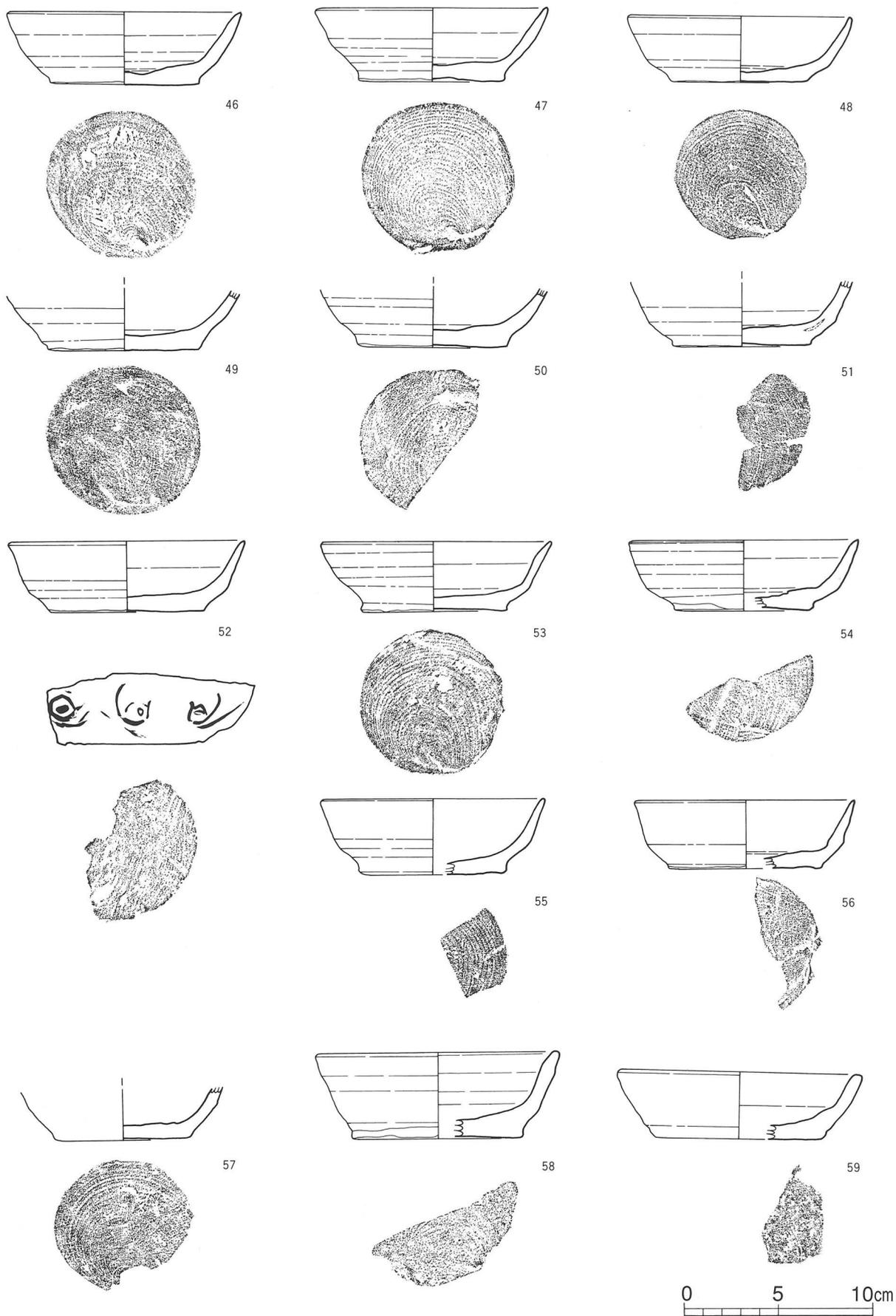
第13図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土土師器① (1 / 3)



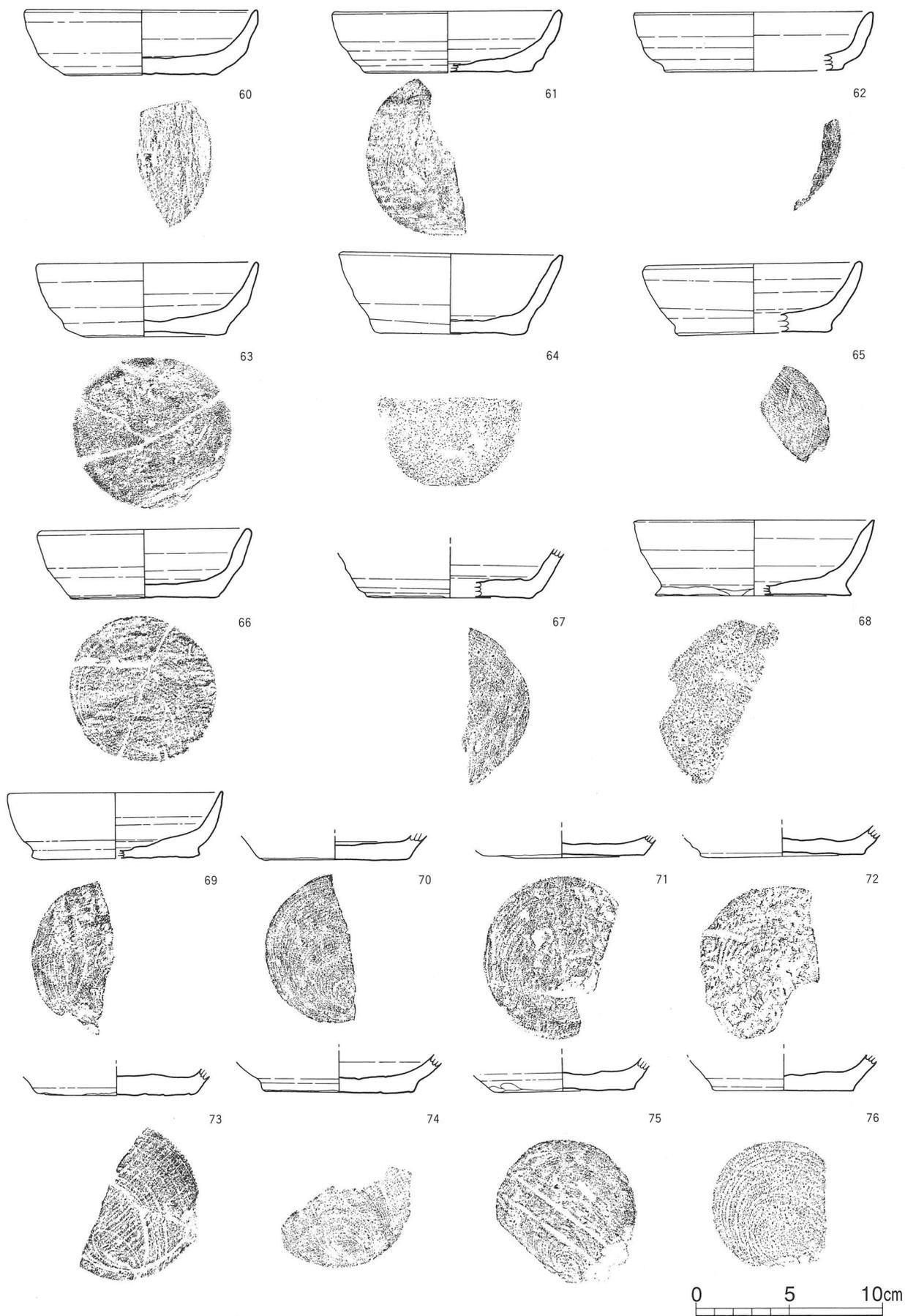
第14図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土土師器② (1 / 3)



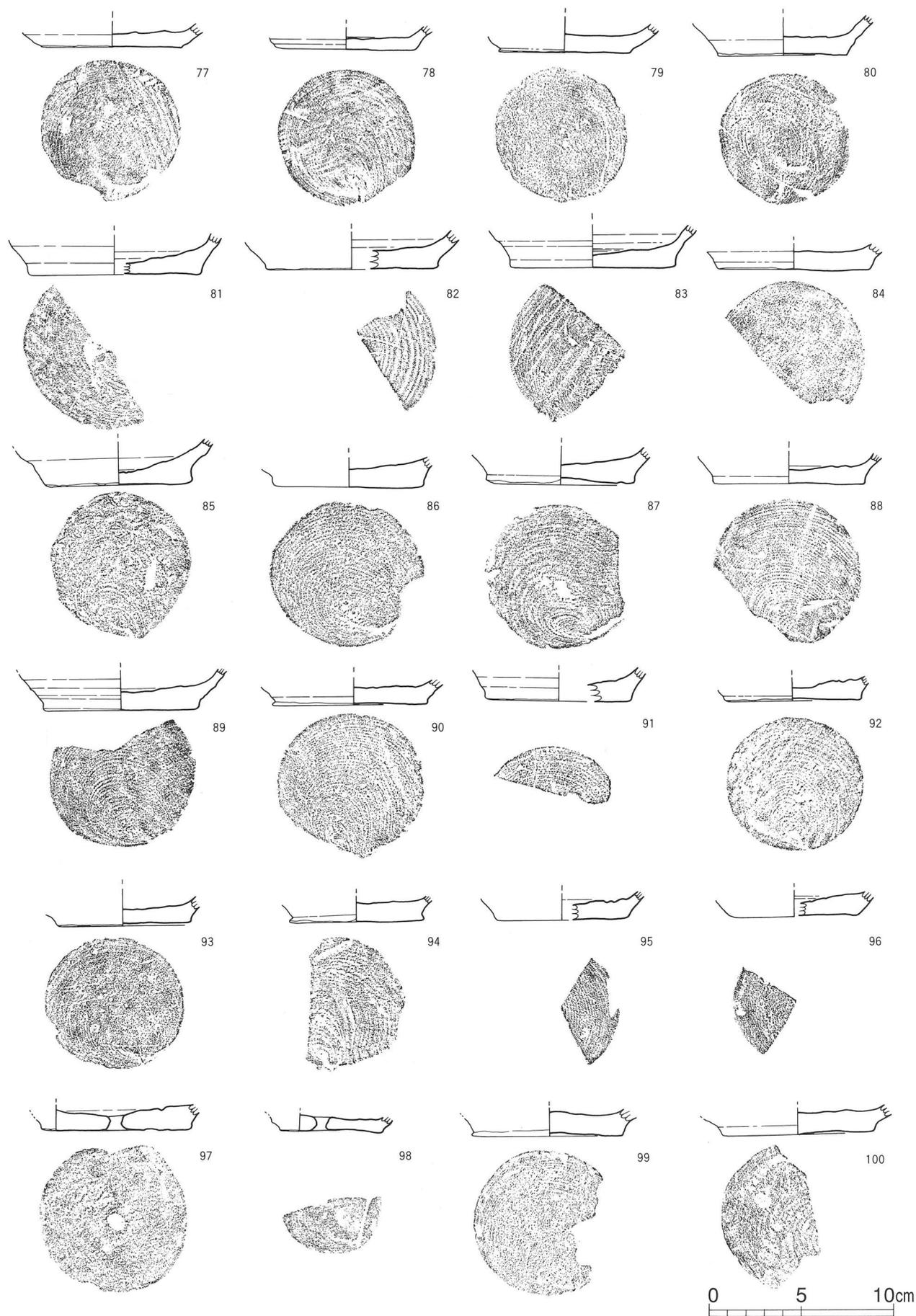
第15図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土土師器③ (1 / 3)



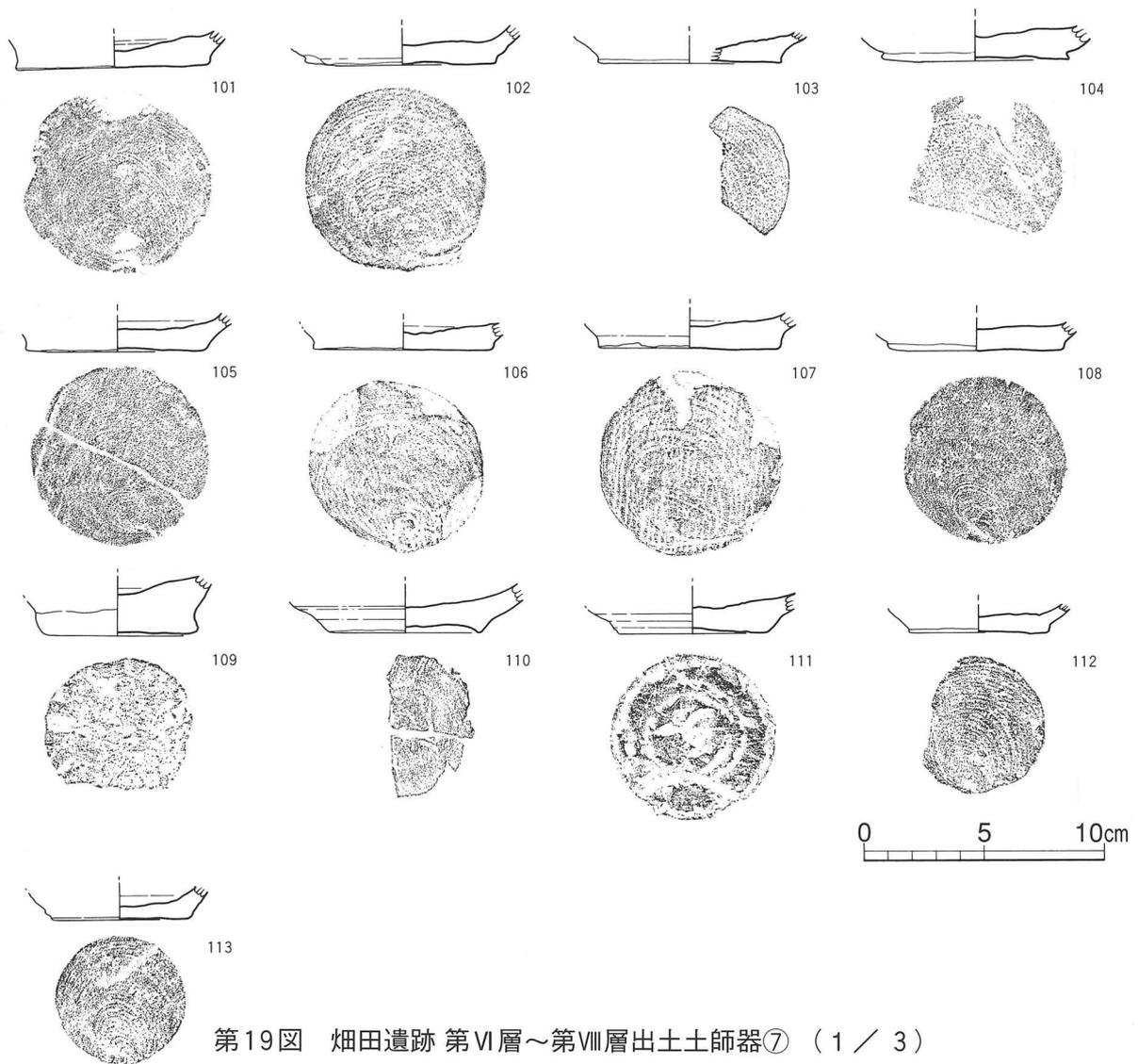
第16図 畑田遺跡 第Ⅵ層～第Ⅷ層出土土師器④ (1 / 3)



第17図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土土師器⑤ (1 / 3)



第18図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土土師器⑥ (1 / 3)



第19図 畑田遺跡 第Ⅵ層～第Ⅷ層出土土師器⑦ (1 / 3)

■皿 (小皿) (第20図～第22図—114～177)

器形から大きく9種類の大分類(皿Ⅰ～皿Ⅸ類)の設定を行い、更に組み合わせとして、坏の分類同様、切り離し技法(A～D類)や底部の板状圧痕の有無(a・b類)による小分類を設定した。この3つの分類の組み合わせによって、例えば、皿Ⅰ類の器形をもち・細目の糸で切り離しを行い・板状圧痕なしの坏は、「皿ⅠA b類」と分類される。

皿Ⅰ類 (第20図—114～121)

体部は直線的に立ち上がる。口縁部の断面形は尖った舌状を呈する。底部は、若干凹状に窪むが、平滑に近い。底部と体部の境は、外面は明瞭であり55～80°程度の比較的急な角度で屈曲点を形成するが、内面は明瞭な屈曲点をつくらず緩やかなカーブを描く。器壁はいずれも5～12mmと均一ではない。

皿Ⅱ類 (第20図—122～130)

体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁部の断面形は山形に尖る。底部と体部の境は、外面は明瞭であり40～50°程度の屈曲点を形成するが、内面は明瞭な屈曲点をつくらず緩やかなカーブを描く。底部は、7～8mmの比較的一定の厚さで平滑であり、皿Ⅰ類のように薄い円盤状をなすものが多い。

皿Ⅲ類（第20・21図—131～140）

体部は内湾しながら直線的に立ち上がる。口縁部の断面形は鋭く山形に尖る。底部は平滑もしくは凹状・螺旋状に窪む。底部と体部の境は、体部下半で一度40～55°の角度で屈曲し、薄い円盤状底を形成する。内面は、明瞭な屈曲点をもたず、底部中心部にむかって緩やかなカーブを描く。

皿Ⅳ類（第21図—141～145）

体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁部の断面形は舌状を呈する。底部は平滑もしくは凹状・螺旋状に窪む。底部と体部の境は、体部下半で一度45～55°の角度で屈曲し、薄い円盤状底を形成する。内面は、明瞭な屈曲点をもたず、底部中心部にむかって緩やかなカーブを描く。

皿Ⅴ類（第21図—146～153）

体部は、直線的ではあるが、内湾したり外反したり、若干不安定に立ち上がる。口縁部の断面形は肥厚した舌状を呈する。底部と体部の境は、外面は明瞭であり40～50°程度の屈曲点を形成するが、内面は明瞭な屈曲点をつくらず緩やかなカーブを描く。底部は凹状もしくは螺旋状に窪む。

皿Ⅵ類（第21・22図—154～165）

体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。底部と体部の境は、一度50～60°の角度で屈曲し、薄い円盤状底を形成する。口縁部の断面形は舌状を呈する。器壁は5～6mmと比較的薄く、平均して同じ厚さで口縁部から底部へとつづく。底部の径は、6cm未満のやや小さめのものが多い。

皿Ⅶ類（第22図—166～172）

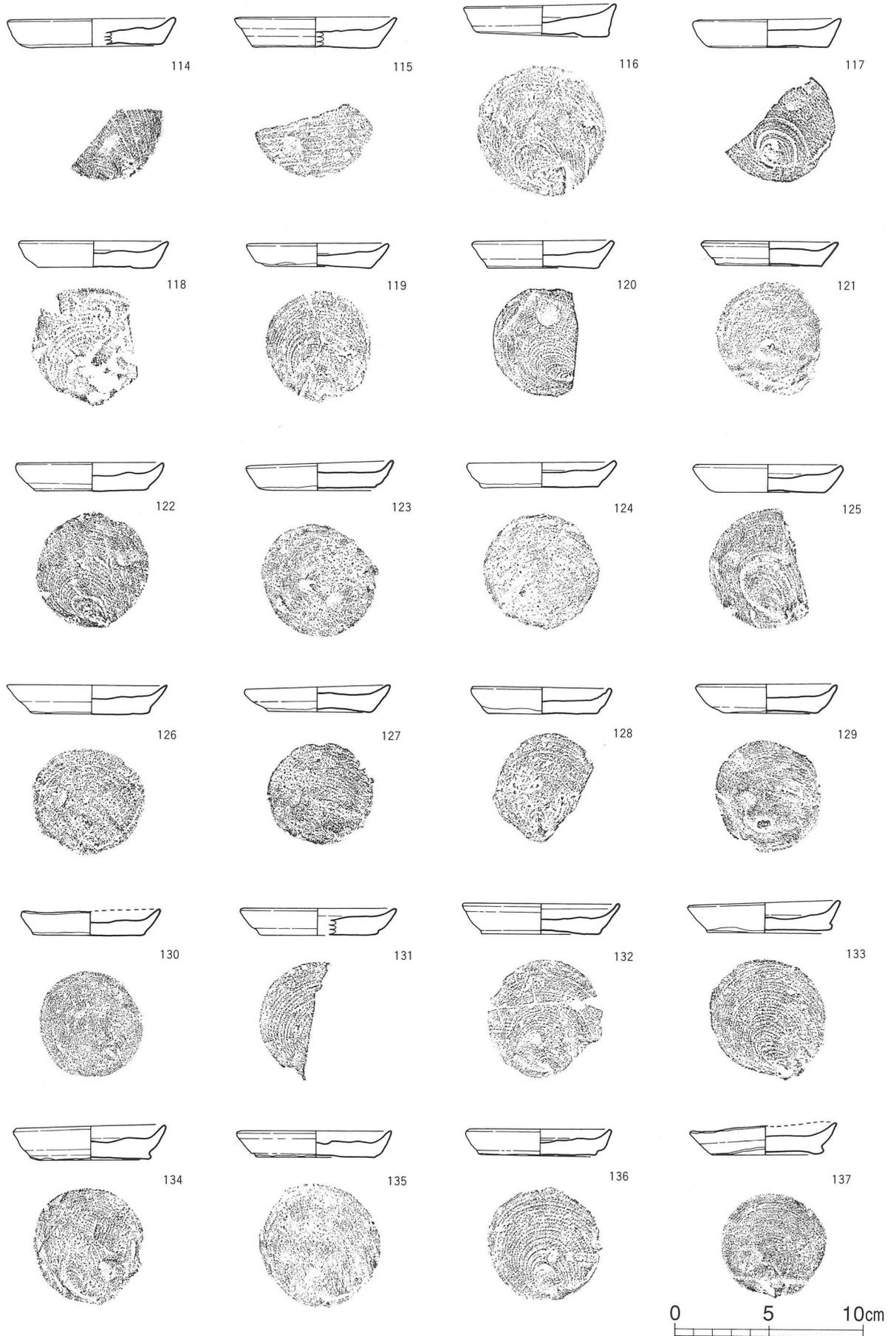
体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。口縁部の断面形は舌状を呈する。底部は、緩やかではあるが、中心部に向かって渦巻きを描くように窪む。底部と体部の境は、内面は明瞭な屈曲点をつくらず55～60°程度の緩やかなカーブを描き、外面もわずかに屈曲するがやや不明瞭なカーブを描く。

皿Ⅷ類（第22図—173～176）

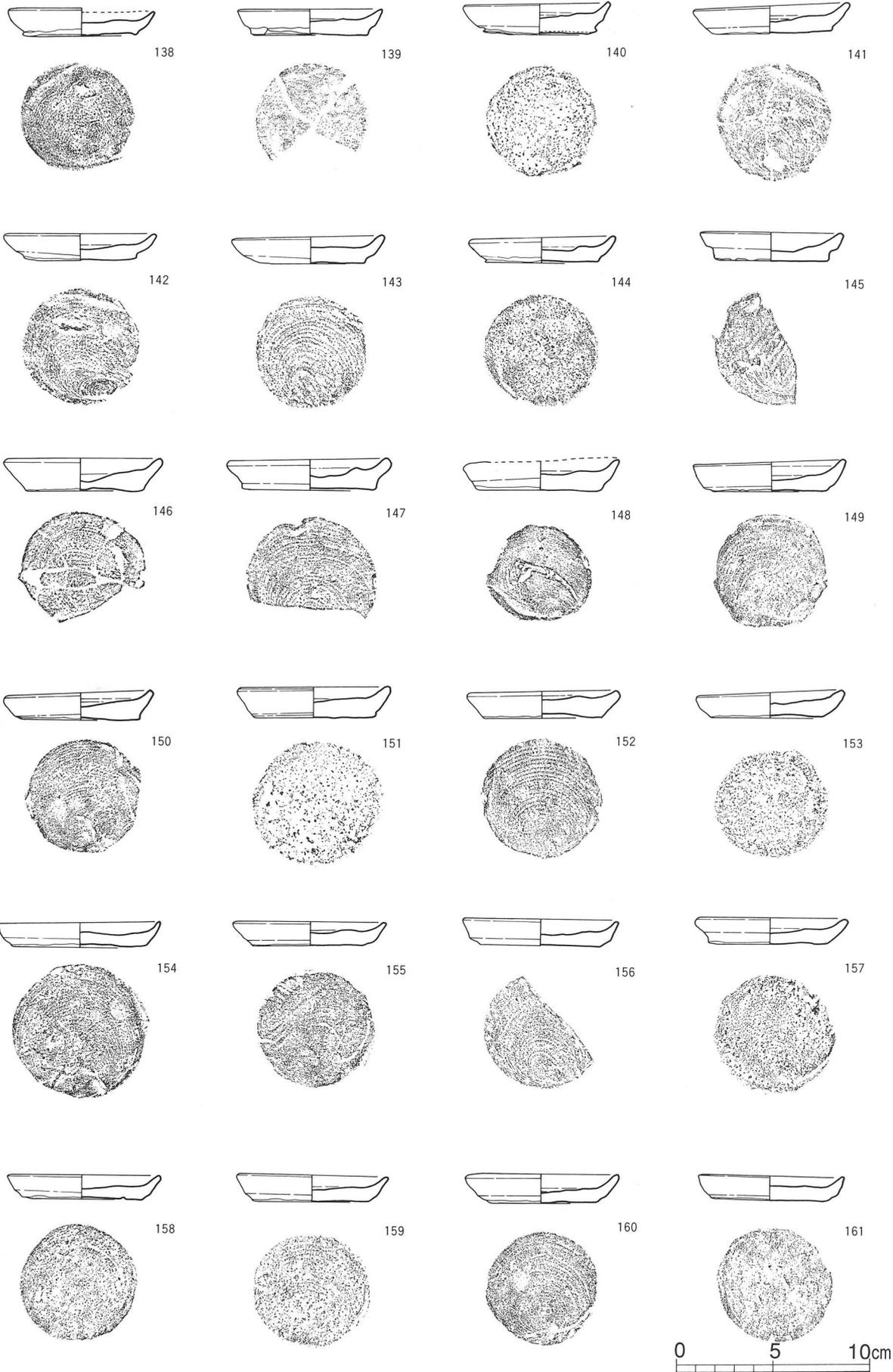
変形著しく分類の困難なものを一括して扱う。変形の状態から、使用中に変形したとは考えにくく、使用前の入手時にすでに変形していたものであると考えられる。

皿Ⅸ類（第22図—177）

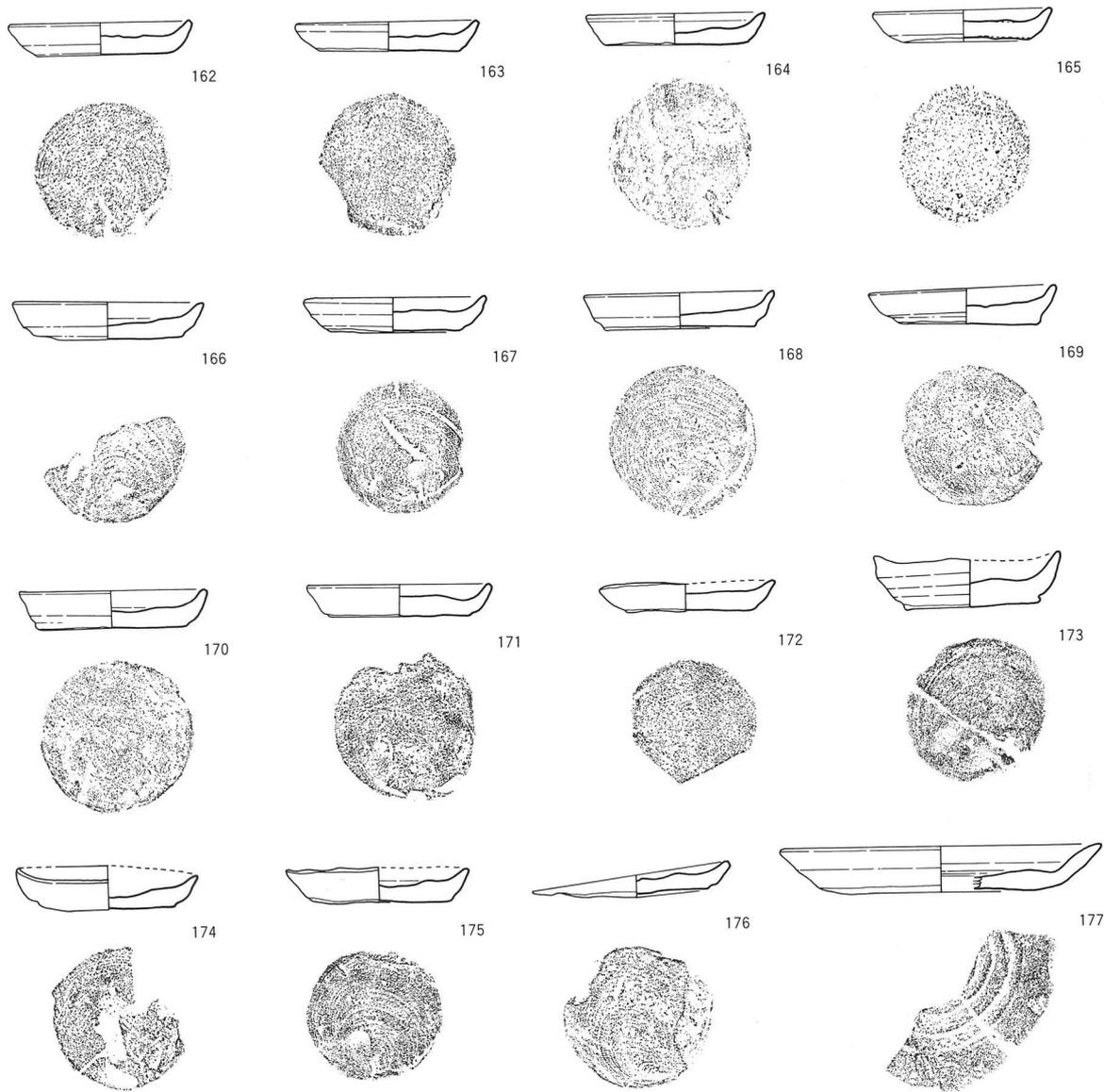
177は、他の皿が口径7.0～8.5cmなのに対して、口径12.9cmと群を抜く大きさである。その大きさからまさしく「皿」であり、「小皿」的なⅠ～Ⅷ類と異なる。



第20図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土土師器⑧ (1 / 3)



第21図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土土師器⑨ (1 / 3)



第22図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土土師器⑩ (1 / 3) 0 5 10cm

(2) 陶器 (第23図～第29図-178～256)

陶器片は全部で78点出土した。器種構成は甕・壺・鉢・播鉢・瓶子などからなる。内訳は、甕壺類57点・鉢4点・播鉢11点・瓶子3点・皿1点などである。その他破片も含めれば相当な数になりそうである。

ここでは、器種・器形・胎土を主な着眼点とし、分類を行った。ただし、細片も含まれており、分類の困難なものもいくつかあった。以下に簡単ではあるが、分類の基準を記す。

甕A類 (第23図・第24図-178～205)

褐色系の瓷器系陶器の甕である。口縁部形態などのより常滑焼だと考えられる。

178～205の器壁は厚い。外面は、上部に灰色系の自然釉がかかっているが、基本的には無施釉である。内面は、太めの粘土紐を輪積みしている跡が顕著に残されている。本遺跡からは口縁部・肩部・胴部・底部の各部が出土した。各部から考えて、肩部の張ったプロポーションが想定できる。

178～188は口縁部である。形態によって、更に3類に細分される。

口縁部 a 類…口縁部縁帯と口縁部が離れておらず、口縁部縁帯が「N」字状を呈するもの。(179・183・184・185・186)

口縁部 b 類…口縁部縁帯と口縁部が離れており、口縁部縁帯が横倒しの「T」字状を呈するもの。(178・180・181・182)

口縁部 c 類…口縁部縁帯が玉縁状を呈するもの。(187・188)

189～196は肩部であり、押印が施されている。189～191は、細片であり、全容が解りにくいですが、鱗状文と「×」字のような文様の組み合わせである。192・194は櫛目文と横倒し「大」のような文様との組み合わせである。193は、細片であり、全容が解りにくいですが、幾何学的な文様であると考えられる。195は格子目文である。196は、他の押印とは違い、篋描きによって円形文を施している。

甕 B 類 (第25図—206～209)

鉄釉が施された須恵質の甕である。

206～209は、須恵質の甕であるが、外面全体に鉄釉が施されている。206～209は同一個体の可能性が高い。206・209の頸部には、調整のためか装飾のためか、櫛描きによる連続羽状文が施されている。

甕 C 類 (第25図—210～221)

甕 B 類同様、須恵質の甕であるが、無釉である。

210は、口縁部下に綾杉文が施されている。211～214は格子目の叩きを施している。215・216は縦と横方向の交叉状に叩きが施されてまるで格子目文のようである。217～220は、条線状に叩きを施している。内面調整は、殆どが条線状の叩きを施しているが、215・219は同心円状叩き（青海波文）の圧痕を残している。

甕 D 類 (第26図—222)

プロポーションは甕 A 類と類似しているが、黄白色の胎土・ハケ目や指押さへの調整方法などは甕 A 類には存在せず、同類と考えにくい。どちらかという、甕 A 類の模倣品である可能性が高い。

甕 E 類 (第26図—223～224)

甕 C 類同様、須恵質の甕（または壺）である。焼成が弱いためか胎土は灰白色である。在地製のものだと考えられる。

甕 F 類 (第26図—225～226)

灰色系の瓷器系陶器の甕である。施文の特徴より渥美系陶器の可能性が高い。

225～226は長石類を含まず滑らかな手触りである。内面に薄緑色透明の釉がかかっている。外面には斜方向の櫛目文の押印が帯状に配されている。

壺 A 類 (第26図—227～229)

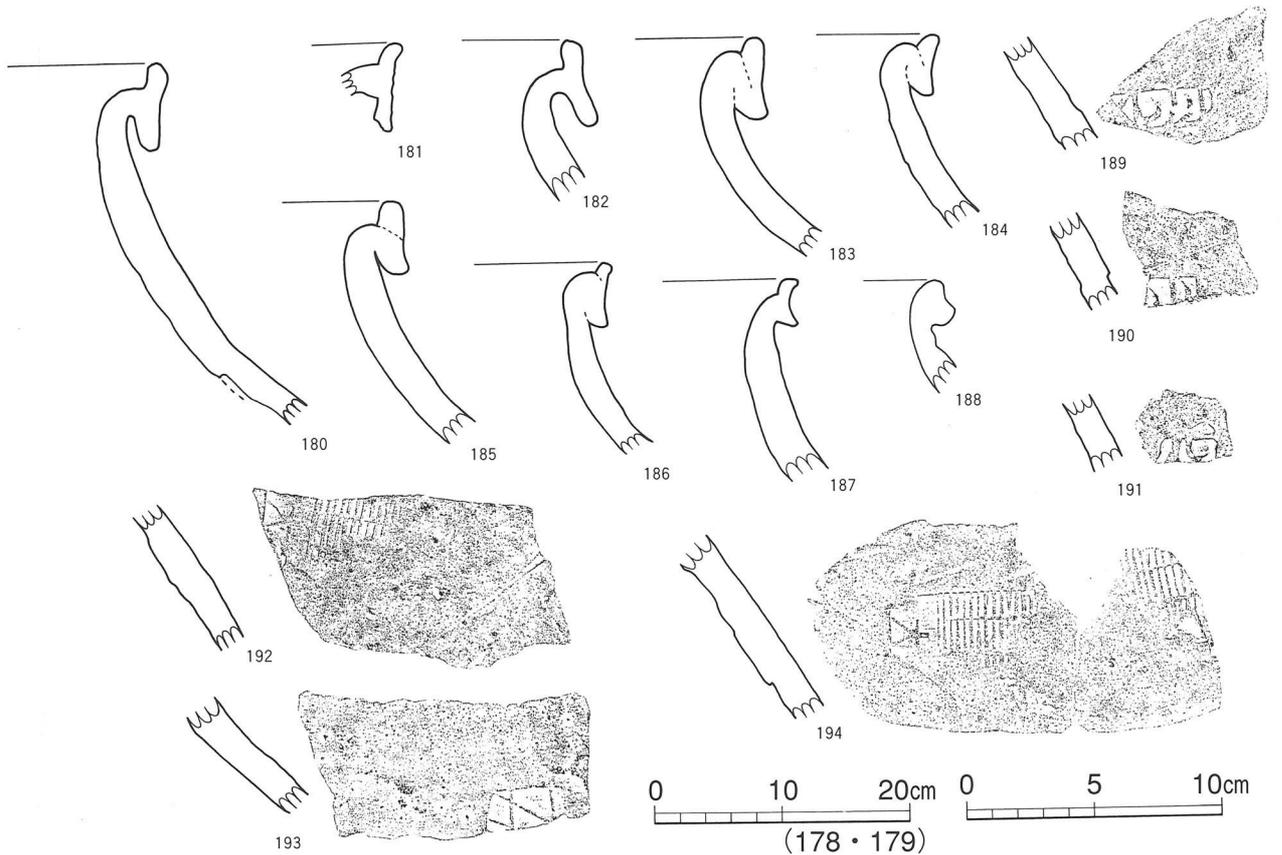
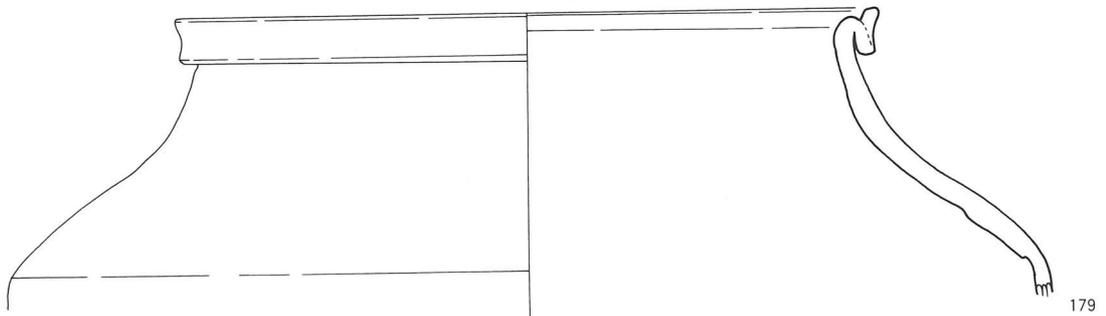
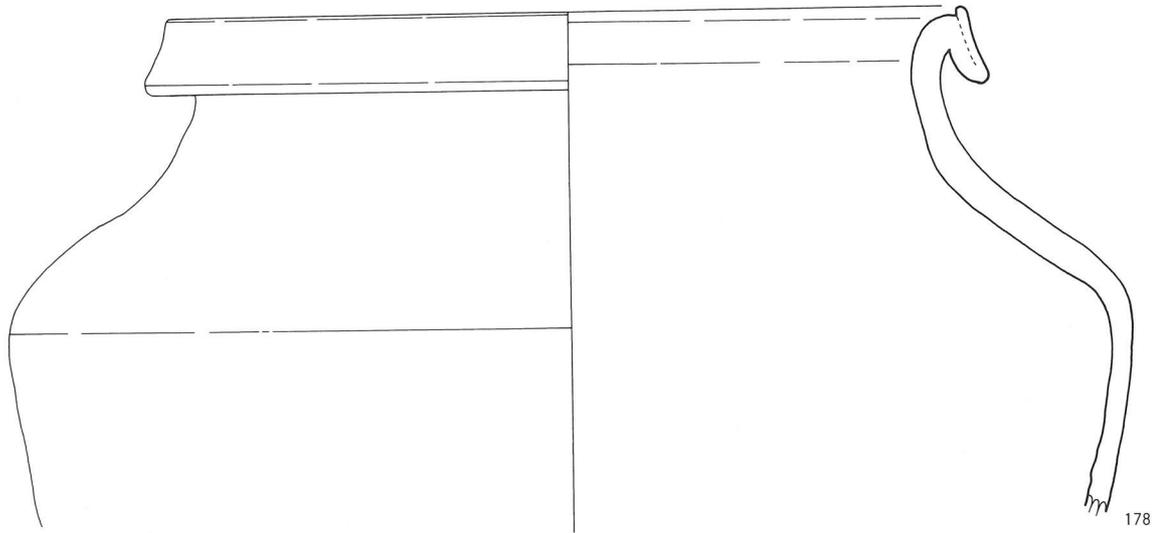
灰青色と茶褐色系の瓷器系陶器の壺である。口縁部形態などにより備前系陶器の可能性が高い。

227・229は灰青色であり、僅かに外反する玉縁状の口縁部をもつ。また、229は肩部に櫛描きの平行線を施している。228は、茶褐色の口縁部であり、口縁が内傾せずに立ち上がる。

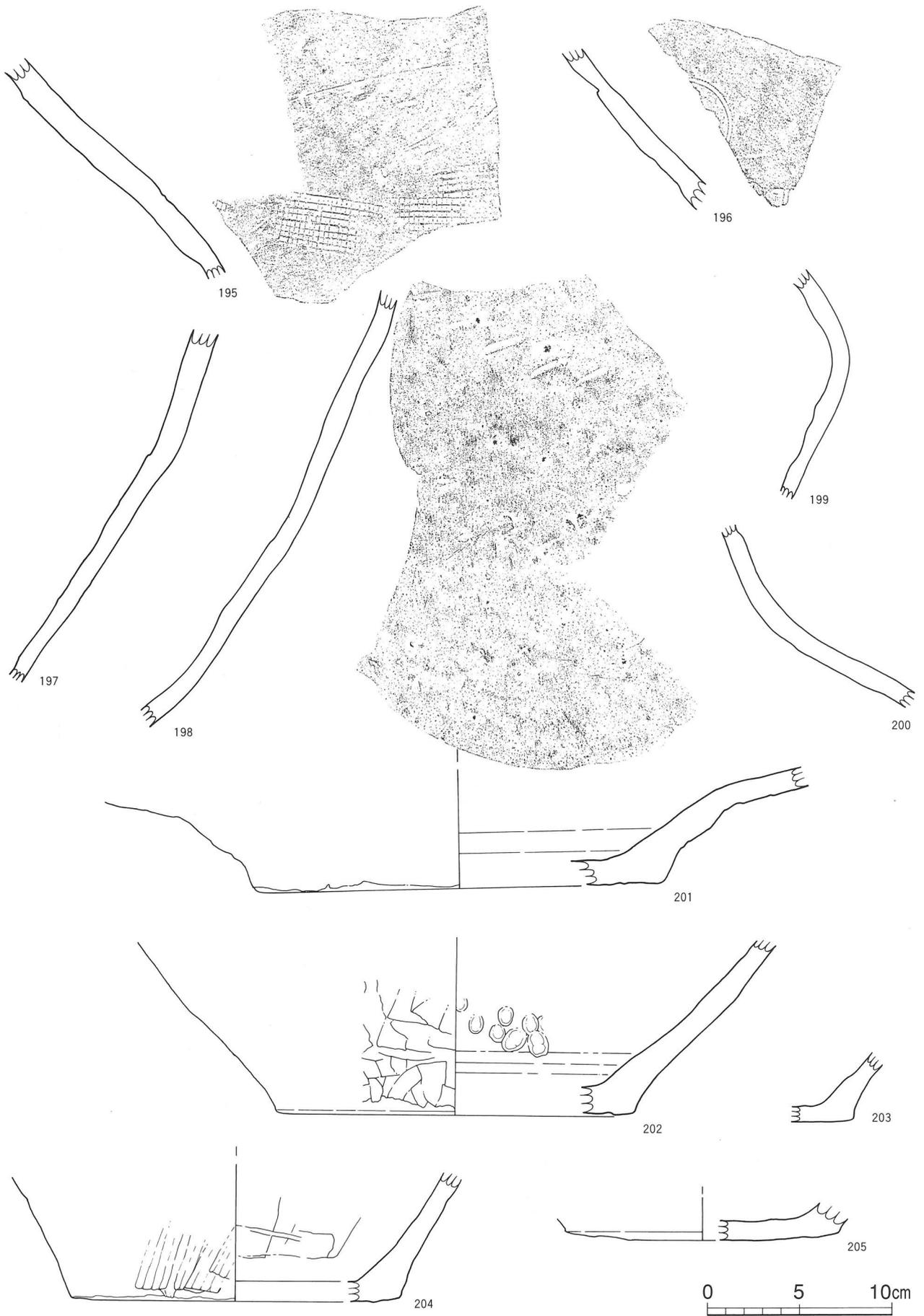
壺 B 類 (第26図—230～232)

暗茶褐色系の瓷器系陶器の壺である。

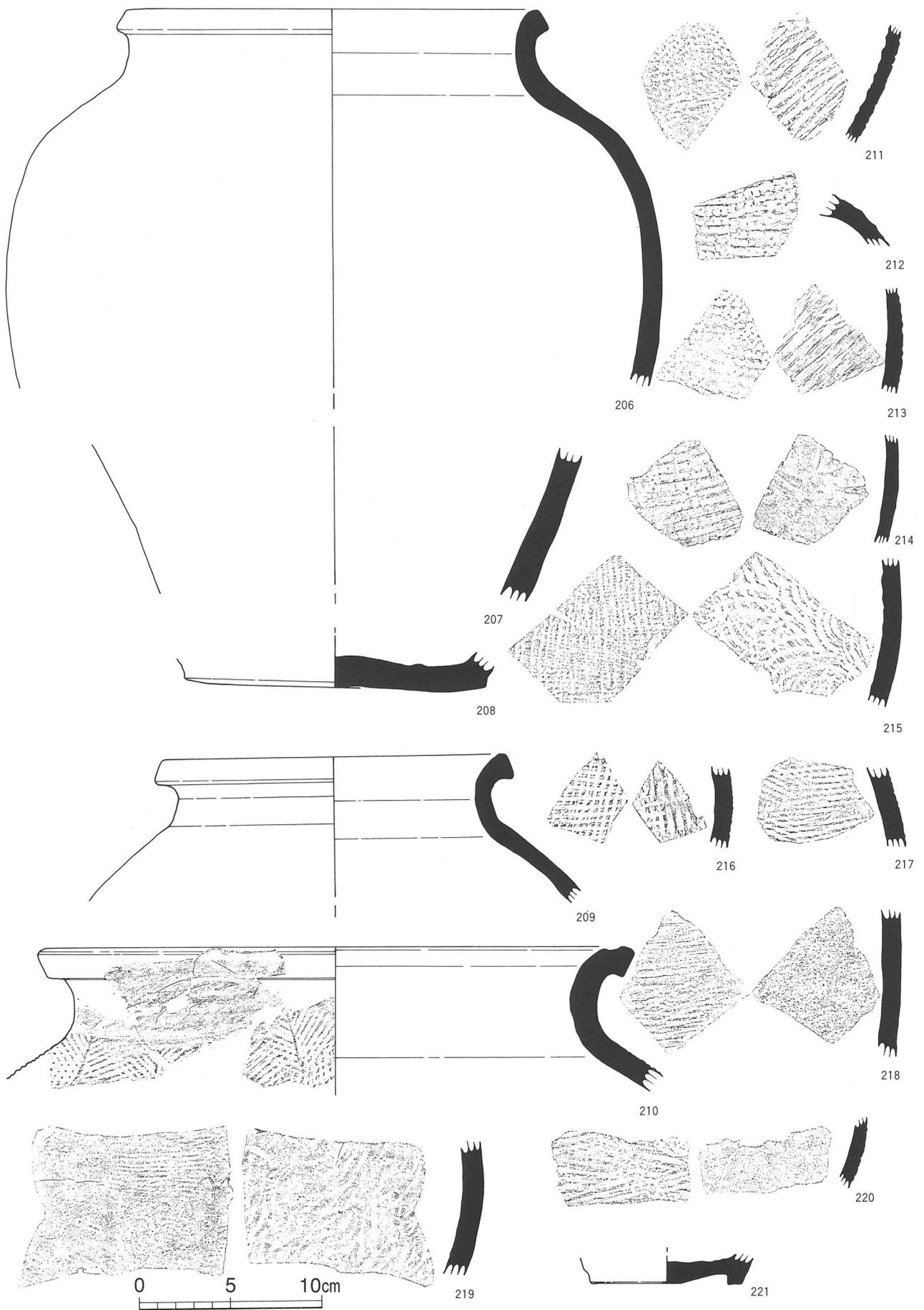
230～232は、細片であるが、球胴型の広口壺だと考えられる。外面全体には、暗茶褐色釉がかかっている。肩部付近は2～3条程度の篋描き条線を施している。中国産である可能性が高い。



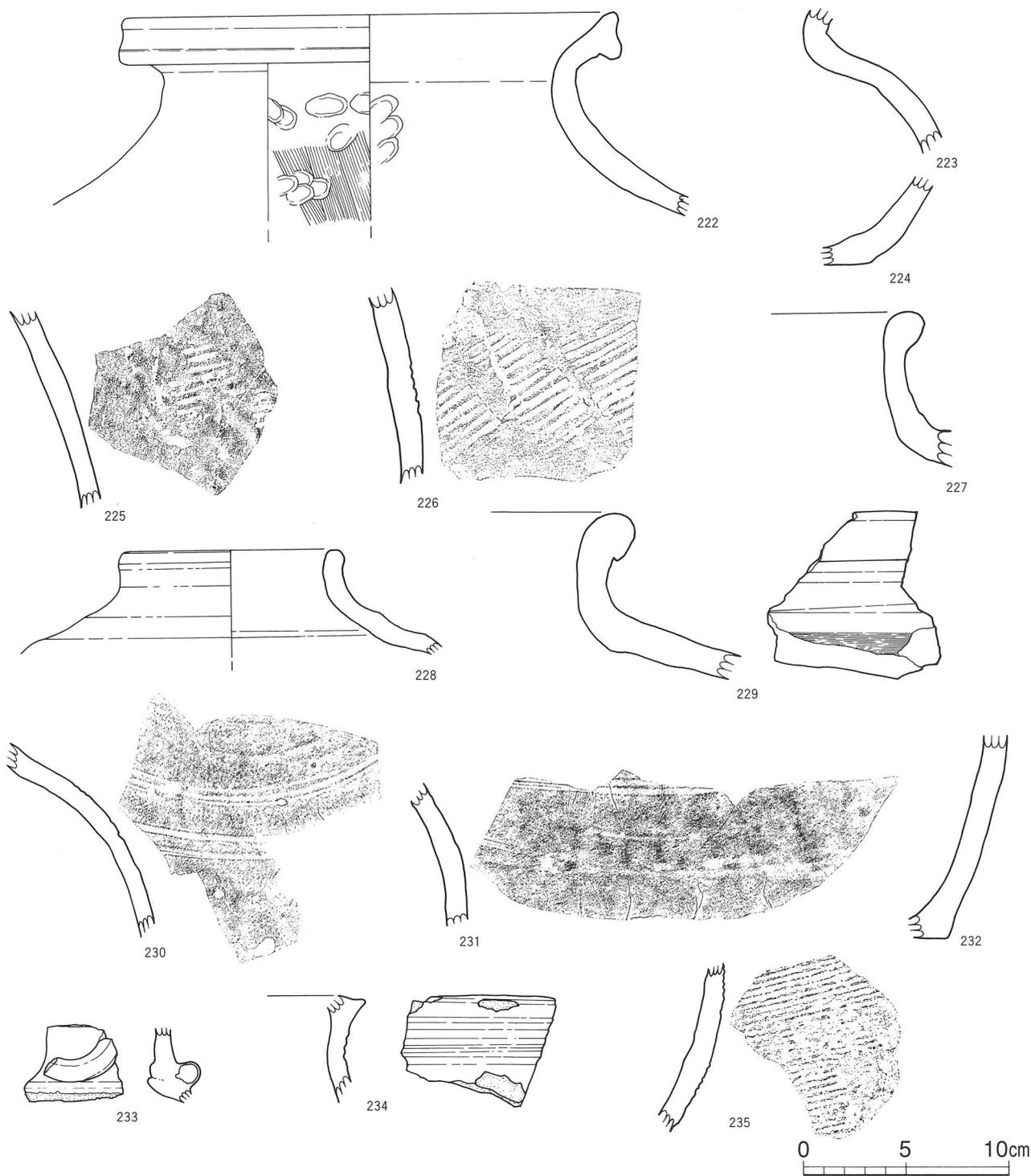
第23図 畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土陶器① (1/3・1/6)



第24図 畑田遺跡 第VI層~第VIII層出土陶器② (1/3)



第25図 畑田遺跡 第Ⅵ層～第Ⅷ層出土陶器③ (1 / 3)



第26図 畑田遺跡 第VI層～第VIII層出土陶器④ (1 / 3)

壺C類 (第26図-233～235)

不明の壺類を一括して扱う。

233は瀬戸系陶器の双耳か四耳の壺，または長頸花瓶の頸部だと考えられる。古瀬戸釉と称される黒褐色光沢釉がかかっている。234は，壺の口縁部だと考えられる。鉄釉がかかっている。

捏鉢 (第27図-236～239)

須恵質の鉢である。形態から判断して東播系の捏鉢だと考えられる。

236～239は，体部が丸みをもちながら立ち上がり，口縁部は肥厚する。いずれも口唇部に面をもつが，236・237・239は凸面状に膨らみ，238は凹面状に窪む。